
フェアリーブレイヴ ～７７７（スリーセブン）と蒼い弓～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェアリーブレイヴ 777（スリーセブン）と蒼い弓

【Nコード】

N2872G

【作者名】

雨月

【あらすじ】

第一部：まるで小さな妖精さんのような勇気の持ち主である天川蒼疾。そんな彼の元へまるで飛んで火にいる夏の虫のように現れる？女の子達。約束に時効は存在するのか？第二部：成長し、教師になった天川蒼疾。様々な問題？を彼は解決するために今日も闘う。

零：夢は夢（前書き）

こほん、少しばかり右手を負傷してしまって指の肉が減りましたが…
…いけそうなので小説投稿しました！

零：夢は夢

零

これが夢であるということはわかっている。

場所はわからないが、先ほどから神社、押入れの中、蔵の中と変わっている。目の前ではもやに包まれて顔の見えない女の子が泣いていた。

理由はわからない。

だが、このままではいけないと思って小さい頃のオレはいったのだ。

「ななちゃん！大きくなったら僕と結婚してよ！」

「え？………いいの？」

声もなんだか様々なものが混雑しているのか知らないが、聞き取りづらくはないが、どんな声なのかはわからない。

「うん、だからさ、泣き止んでよ」

「うん！―！」

元氣よく笑っているその姿はいつものななちゃんだった………と言っておこう。なにぶん、夢の話なので自信がない。

「じゃあ、僕は行くから」

「……………うん」

こうしてオレは次の日転校したのだ。小学校一年、二年ぐらいの話だろう。

所詮は夢だ、それはわかってる。

しかし、物語にはプロローグが大体、必要だ。そして、この話はあくまでもプロローグ……というわけではない。

プロローグ（前書き）

蒼疾「さあ、恒例となった次回予告……え？違う？こほん、失礼しました。今回からこのスペースを使用し、次回の予告をしていきたいと思います！拍手！……えゝ、次回、記念すべき第一話！」
「フー！」

プロローグ

プロローグ

「……………して、あるから……………」

睡眠効果を持つ校長先生の話は一方的に進んでいき、気がつけば校長先生の孫の話になっていた。当初はきちんとした話だったと思う……………五分ぐらい。

孫話に花が咲いているようで二百五十人以上の聴衆をえて確実に話は混迷へと向けてまっしぐらである。

それこそ、いつ生まれたとか何歳がともかわいいたか写真を皆に見せているとか当然の行為とも思っているのだろうか？手にしているのはアルバムであり、まだまだ写真はあるようだ。きつと目に入れても痛がらないに違いない。もつとも、左目には眼帯をつけているので右目にしか入れることはできないだろうが……………

「……………き、機動要塞グングニールが……………むにやむにや」

隣では見知らぬ生徒（とはいってもクラスメートとなる人物だが）が夢の世界で自分の陣地が壊されたことを目撃したらしい。彼の夢空間戦闘がさつさと終わることを祈ろう。

「……………その孫が……………」

二十回のところまで孫という単語が出てきたところで孫が何回出てくるか数えるのを放棄した。孫、出てきすぎだろ。

「……………グングニールの……………敵じゃああ！！」

隣は佳境にはいったらしい……………左側の生徒は目を開けたまま眠っている。

「……………」

教師人の中にも疲れているのか新人教師と思われる我がクラスの高峰涼子先生が転寝をしていらっしやる。未だに先生達の紹介すらあっていないし、校長先生の後に予定されている新一年生代表挨拶がどれほど後になるか実に気になる。これはもう、校長VS新一年

生&教師人&保護者という異種格闘技戦に匹敵する戦いだろう……
…くだらないが。

さて、あと三十分は待っていないといけないかなと思っていると

……

「校長先生！」

びしっとした声が体育館内に響き渡り、まるでそれは目覚まし時計かのように校長先生の睡眠作用を含んでいた声を吹き飛ばし、眠ってしまつて敗北を喫していた連合軍たちに一閃の光を与えるかのようだった。

「…………ふにゃ」

先生の寝起き顔、よもやこうも簡単に見れるとは思いませんでした。

「…………捕ったどお！…………ありや？」

野郎の寝起き顔は見なくていいけどな」

それはさておき、校長先生は顔をしかめることなくその相手を見る。それは一人の女子生徒であつて、既に立ち上がった。どうやら彼女が次のプログラムの主役らしかった。

しーんと静まり返る中、校長先生が威厳たつぷりに咳をする。そりやそうだ、自分が気持ちよく演説していたのになにやら騒ぎ出した小娘がひとりいたのだから。

「うおっほん！……………ななたん、すまん……………ななたんのすばらしい挨拶までの軌跡を皆に順序良く説明しようとしていたらこんなに時間を割いてしまった」

「いえ、お爺様お気になさらずに」

「……………」

え？孫、いたの？しかも、てつきり三歳とかそういったレベルだと思つていたのだが同い年だったとは……………口調の変わった校長のことは誰一人としておかしいとは思っていないようで静かに壇上に上ったその女子生徒に皆が視線を移す。

「……………皆さん、始めまして……………大津地七海といいます」

「？」

ふと、その顔をどこかで見たことが、会ったような気がしたのだが……気のせいかもしれない。

大津地七海というその生徒は誰かを探しているようで少しきよろきよろしている。家族（爺さん以外の）か、彼氏か、はたまたペツトか友達か……

「……………」

「……………」

目があったような気がした。美人だった。彼女は誰ももう探していなかった。

「……………えっと、これから先の高校生活、皆には……………」

それから先は百点を挙げたくなるような声、姿勢、内容で会場の拍手をさらっていった。校長先生はもう何も喋れないぐらいに涙を流していたし、誰一人として眠っている不埒なやつはいなかった。

拍手喝采の中、彼女は壇上を降りて階段を降り始める。

「……………」

「？」

そのときもまた、こちらを見たような気がした。もしかしたら後ろのやつかもしれないし、前のやつかもしれない。

兎にも角にも、彼女とはどうやらクラスが違うようで話すことも何をすることも特に出来そうもなかった。

まあ、あれだ……………悪いがオレに何かを（この場合は先ほどの女の子に話しかけること）するようなおおきな勇氣とか、何かを守るような力なんてない。

現に、それから一年間、オレは隣の変なやつと友人になったりはしたのだが女子とはあまり話さなかったしあのこを見ることもめつたになかった。

ただいえることはあの子がすばらしく男子の中で人気となっていてということだ。

オレにある勇気といえば小さな妖精さんの勇気ぐらいだろう。

しかし、事情が変わったのは高校二年になってから……再び入学式がある日、オレはたまたま学校へとやってきていた……この話があくまでプロローグであるということはいうまでもない。

第一話：「始まる前のひと時（前書き）」

蒼疾「あれ？前回の前書きで言ってた題名と違うような……まあ、いいか。とりあえず、今出ている面子で次回予告を！」涼子先生「はあゝい！全国のムラツてきているみんなあゝ涼子でゝすゝ」蒼疾「……………人間間違えたかな……………」涼子「次回、フェアリープレイヴ第二話！『体育館から聞こえる担任教師のエロい声！』お楽しみに！」蒼疾「……………何一つとしてあっていませんのでご注意ください！」

第一話：「始まる前のひと時」

第一話：

「始まる前のひと時」

「…………であるからして…………」

相変わらず長い長いながーい！校長先生の話は尽きる事無く、永遠と続き、今回は誰一人として止める事無く、孫がどれだけ素晴らしい存在で、今はこの学校の生徒会長を目指しているところまでアルバムや小学校の頃の思い出の品々などを用いて終了したかに見えた…………だが、

「…………しかしのう、実はあの素晴らしい七海ちゃんに結婚する約束をしたというクソガキがおつたらしく、七海ちゃんは二年になったからといって今日、わしの家から出て行ったんじゃ」

実にどうでもいい話をし始めたなあと思っただが、これはこれで面白い話かもしれない。まあ、元から雲の上にいるような存在だったし、彼女の悪口を言おうものなら校長先生の権力の下にひれ伏すことになる。こんな爺さんをもつというその哀れなやつに手を合わせたくなった。

「クソガキのところできっと同棲するに違いない…………じゃがな、聞いた話ではこの学校の中にその容疑者が存在するらしい…………」

いつからそいつは犯罪者になったんだろつかと思いつながら裏方でその話を聞いていた。俺としてはさっさと式場を片付けたいのだが

…………

「だからな、そいつがわかった瞬間、嫌がらせを開始する！よって今日からこの学校にやってきた諸君！犯罪者あぶり出しの協力を要請する！」

その言葉を聞いて大半の生徒がこけた。その中に俺の存在も入っている。

「こ、校長先生、そういった話は……………」

「ええい！ばか者が！」

「ぐはっ！！」

やってきた教頭先生が床に沈み（カカト落としを脳天からくらって本当に沈んだ）それを見た教師が誰一人として止めようとしていなかった。

「……蒼疾君、今の見た？」

「え、ええ……」

隣で一緒に雑用と化している担任の涼子先生の言葉に啞然となる。

「孫パワーっておそろしいわね」

「そうですね、けど、その男子生徒って誰なんでしょう？」

首をかしげる俺に先生は告げる。

「直接大津地さん本人に聞いてみたら？ほら、蒼疾君と大津地さんは一緒のクラスだから」

「そうなんですか？」

「ええ、そうよ」

そういつて再び校長先生の方を見ていたのだがどうやら終わったらしい。校長先生はこちらへと歩いてきた。

「どうもお疲れ様です」

涼子先生はそういつて頭を下げている。

「うむ……ところで天川君」

校長先生のほぼ雑用みたいな（うちの爺ちゃんと校長先生が親友らしい）存在の俺にまた何かようでもあるのだろうかと思っ返事をすることにする。

「何ですか？」

突っ立っていた俺に先生は一枚の紙のようなものを（良く見たら裏返された写真だった）を見せる。

それを手にとって表にしてみると大津地七海の幼い頃の写真と思われるものだった。

「ん？」

少しばかり首をかしげる。これはどこかで見たことが……

「これを君にあげる代わりに、君にも世界の敵を見つけて欲しい」
よくはわからんがランクが上がっている。そうだな、例を挙げる
なら芋虫がアゲハチョウになるぐらいの違いだろう。

「はあ、別にいいですけど……」

心当たりがあるわけではないのだが、校長先生の言葉を無視すること
も出来ない。どうせ、見つからないだろうし、写真をくれるの
ならもらっておくに越したことはない。後で男子に売ることが出来
るだろうから。

「じゃ、頼んだぞ」

「ええ、わかりました」

消えていった校長先生の背中を見ながら俺は首をかしげる。

「なんだか大変なことになったわね？」

「そうですね？ どうせ見つからないでしょうからほっときますよ
……とりあえず、式も終わつたみたいですから片付けにいきまし
よう」

新入生達が俺たちに後姿を見せながら体育館を後にしていく。そ
んな光景を一年前は当事者だったんだなあ感慨深げに眺め続ける。
「そうね」

こうして、俺は午前の残り時間いっぱいを片付けに費やしたのだ
った。

「疲れた」

誰かと一緒にいるわけではないのだがとりあえずそんな言葉を口
に出してみる。時刻は夕刻で遠慮していたのに無理やり涼子先生の
部屋に連れ込まれて食事を作らされた。先生が作ってあげるといっ
ていたのだがそれを謹んで辞退し（あれを料理とかいうやつは眼科
に連れて行かないといけない、作つた先生は刑務所いきだろう）俺
が作つたのである。

両親は家にまだいない時間帯なので鍵がかかっているはずだろう
と思って鍵を取り出して自宅の玄関の鍵穴に鍵をつっこむ。

「
鍵が……開いていたのだ。」

第二話：「始まる前のふた時（前書き）」

蒼疾「いやあ、やっぱり人選間違えたんで今回は別の人を……………」
校長「うむ、妥当な線であるといっておこう、天川君」蒼疾「……………」
… 確実に人選ミスだな……………」校長「む？ 何か……………」蒼疾「……………」
てないです」校長「そうか、それならいいんじゃない……………」次回、フェ
アリーブレイヴ第三話！『あの日の約束！』こうご期待！」蒼疾「……………」
どうせ、また題名変わるんだろうな」

第二話：「始まる前のふた時」

第二話

「始まる前のふた時」

さて、鍵が開いていた。

なんだ、これは？

冷静に考えてみてちよつとだけ思い当たる……… 勿論、普遍的なことに。

「ああ、母さんか父さんが一時的に帰ってきたのかな？」

そんなときに携帯が鳴り出す。相手は母さんだった。

『あ、もしもし？午後九時の定期連絡だけはきちんとしておくのよ？』

「俺、もう帰ってきたよ」

『そうなの？じゃあ母さんと父さんはいつもの通りかえってこないからね』

『美月ちゃん愛してるよ………』

『もう、とうさんったら………』

「……………」

さっさと電話を消して……… というより、電池がなくなったので再び玄関の扉を開けようとしてみる。普通にドアノブはまわってしまつた。幻覚でもなんでもなく、現実だ。

「いやいやいやいや！これは、これはどうということなんだ？俺が鍵をかけ忘れた？」

そう思ってみるが俺は完全に鍵をかけた。勿論、確認までしていて。冗談で携帯のムービーまで録ってしまったのだ。すぐに確認してみるが『ロックしまゝす』というふざけた声入りも覚えがある。

ドロボウが入ったのだろうか？だが、既に取りれた後なら警察に報告すればいいだけであつてとりあえず、中に入ろう？な？俺。

がたんっ！！

「……………」

家の内部から音が鳴り響く。なんだ、今のは？

「…………… ああ、ポルターガイストかあ…………… びっくりさせやがつて勝手に家具が動いて音を立てちゃったのか、もう、なんていたずら好きなお化けさんなんだろう？

ふと、何か頭の中に浮かび上がる。

それは昨日のことだ…………… たまたま父さんにあつてこういわれた。

「実はなあ、ふと思つて夜遅くに霊が見えるやつを連れてきたんだ」

「え？何で？」

「なんとなくだ……………」

ごくりとつばを一度飲み込んで思つたことを聞いてみる。なんだか嫌な汗が流れているような気がした。

「その話、ホラー？」

そういつた瞬間、いつもの調子に戻つた父さんはあっけらかんとして言つたのだ。

「いや、この家にはお化けなんていないといわれたなあ」

「なんだ、脅かさないでよ」

そりゃそうだ、俺の家でこれまで幽霊いたとかこの家が元危険な場所だったとかそういった類の話は一度も聴いたことがない。

「…………… つまり、つまりはさっきの音は……………」

つまり、ポルターガイストとかじゃありませんね、うん。

じゃ、あの音は何だ？ドロボウか？おいおいおいおい！…………… ドロボウなんて勝てないぞ、俺。ここはやはり、警察を…………… あ、携帯の電池は切れてたんだっけ？

電話を求めたいのなら…………… 怖いのだが、玄関のところに電話はあるのでドアノブをまわせばすぐ見える…………… そのときはもしかしたらドロボウさんとこんにちは、はじめまして、さようなら、どすっ、ぎゃーってな感じになりそうでめっちゃめっちゃ怖いのだが……………

「……………」

覚悟を決めてドアノブを……………ひねってみることに……………しなかった。

「こういうのは覚悟が必要だね」

決めた拳句にもう一度躊躇し、その行為を3セットぐらい繰り返してバクバクなる心臓を押さえるために胸に手を置こう。えーと、落ち着かせる呪文は……………

「ポマードポマードポマード……………ありや？」

ふと、違うような気がしたのだが……………まあ、いいだろう。

充分落ち着いたのを確認してから俺はついにドアノブに手をかける。死ぬ前に言いたいことを決めておこう。

「…………… 大津地七海さん！一度でいいから死ぬ前に話したかった……………」

そういつて俺はドアノブを回した。

第三話：「あの日の約束（前書き）」

蒼疾「…………あれ？今回はきちんと題名が合ってるような…………ま
あ、それはともかく、今回からようやくメインヒロインである××
×や○○○○、さらには　　が出てきます！そのまま次回予告！」
月水金は生ごみ出し日『乞うご期待！』

第三話：「あの日の約束」

第三話：

「あの日の約束」

まあ、ドアノブをまわしただけで開けてはいないんだけどね」

だが、ドアの向こう側に誰かいたらしく、ドアノブが自動的にまわり、ドアが押されて……

「ええと、そういうことは玄関先でいってはいけません……恥ずかしいですから」

「!？」

ウェディングドレスの天津地七海さんがなんともまあ、玄関から出てきた。

「こほん、家間違えました」

「え？ちよつと！」

なんだか見てはいけないものを見てしまったような気持ちでさつさと玄関の扉を閉めて俺は回れ右をした。

「しっかしまあ、まさか天津地さん家が俺の家とそっくりだなんてなあ……知らなかったな」

さて、俺の家はどこだっただろうかと思っていたのだが……急いで玄関の扉が開いて俺を捕まえて天津地さんは家に引っ張り込んだ。

「……こほん、お久しぶりですね蒼疾さん」

黒い髪の毛を揺らしながらにこりと微笑む。可愛いことは認めよう。

「？」

首をかしげる俺に彼女は言った。

「私は婚約者ですよ、婚約者」

「？」

「何いってるの、そういうならあたしも婚約者に決まってるじゃない

い！」

そういつて風呂場が続くところからひとりの女の子が出てくる。意志の強そうな瞳にポニーテール……姿はウェディングドレスだった。

「あの、どちら様で？」

「がーん!!」

そういつと床に倒れてののじをかいている。

近づこうとしたら後ろの玄関が開く。なんだか、他人に見られたら変なことを言われるに違いないと思って急いで扉を閉めようとして動きとめた。

「久しぶり、お兄ちゃん！」

「……………」

ブーケを持った女の子がウェディングドレスで現れた。

「あの、えつと……………どなた？」

「がびょーん!!」

そういつて床でののじをかき始める。

「何これ？どつきり？」

「そ、それより……………蒼疾さん、これはどういうことですか？」

俺と同じように啞然としている七海さんに俺はなんとも言えなかった。

「えつと、さあ？」

「酷いじゃない！蒼疾！」

立ち直ったのか俺に攻め寄ってくるポニーテール。

「どういうこと！おにいちゃん！」

ツートールの少女も俺によってくる。

「説明してくださいよ、蒼疾さん!!」

そして極め付けと言つていいのだろうか？笑ったままで……………ただし、目は笑っていない……………七海さんが俺に近づいてくる。

「な、何がなんだか……………わけわかめ？あはは……………」

「……………」

しらけた雰囲気だったがいきなりポニーテールに首をつかまれて
そのままリビングに直行……………

「え、これより第一回天川蒼疾の裁判を開廷したいと思います」
弁護士ついていない状態で俺の裁判は始まったのだった。

さて、まずは状況を説明しよう。時間は少し巻き戻る……………どう
やらリビングで話を聞いたところ俺は過去にこの三人にプロポーズ
をしていたらしい……………。

「えっと、それってこっちじゃないよな？」

「ええ、私たちはこちらに引っ越してきたようなものですから」

「……………残念だけどさ、俺ってこっちに來て事故にあって記憶、あ
んまりないんだよね」

「「「！？」」」

三人が驚いたような顔をする。そして、すぐに悲しそうな顔に……………

「まあ、その、嘘をつくつもりはないから！」

俺、今物凄くかつこいいと思う。三人だって……………

「蒼疾さん……………」

「蒼疾……………」

「お兄ちゃん……………」

すごいのはこの三人だ……………だって、まだ小学生の頃の約束を覚
えてるだから。

だが、感動に浸っている時間もちょっとだった。三人が同時に首
をかしげたからである。

「あの、一ついいですか？」

「ん？何？七海さん？」

「七海で結構です……………あの、どなたと結婚するっておっしゃられ
たんですか？」

「……………」

そうなのだ、三人が三人、ウェディングドレスということは結婚

だろう。固まる空気の中、ポニーテールが俺の手をとった。名前は
緋斑奈々枝。

「こほん、じゃああつちの部屋であたしが蒼疾に聞いてくるわ」

そういつて寢室を指さす。

「待った、その役目はわたしがするから」

そういつてツォーテールの少女が立ち上がった俺の手をとる。彼女
の名前は三塚菜々子

「何いつてるんですか、その役目は私がやりますからお二人は座つ
ててください」

最後に絶つたのは大津地七海。なんだか怖い雰囲気になったので
俺は言つた。

「えっと……………かすかにだけど俺、覚えてるから……………確か、なな
ちゃんと結婚するって……………だからさ、この中でななちゃんていう
愛称で呼ばれていた子にプロポーズしたってことじゃない？」

実に妙案だ。俺って頭いいと思っていると……………

「蒼疾さん……………みんな、ななちゃんです」

七海に奈々枝、菜々子……………スリーセブンじゃん。

「じゃ、じゃあいつそのこと三人……………」

そういつた瞬間に縄でぐるぐるまきにされてその場に転がされた。

「……………蒼疾、そういうことはいつちやいけないわ」

「そつだよ、お兄ちゃん」

にこりと笑っている二人が怖い。

「そういう悪いことをする人には裁判が必要ですね」

次回は……………次回は地獄だ！

第四話：「月水金は生ごみ出し日（前書き）」

蒼疾「さて、今回の登場は……」七海「七海です！肩書は蒼疾さんの妻です！」蒼疾「次回、フェアリーブレイヴ」月曜日は七海の日」七海「む、無視された……」

第四話：「月水金は生ごみ出し日」

第四話：

「月水金は生ゴミだし日」

「えゝ判決、天川蒼疾にはゝ」

「以下の判決をゝ」

「言い渡しますっ！」

被告側の弁護など存在しておらず、検察側の証言だけなうえに気がつけば裁判官が三人に増えていた。傍聴席には誰一人としておらず、この一方的なやり取りを見ていたものは窓から中を覗き込んでいる白猫ぐらいなものだろうか？これ以上残念無念なことを繰り返していても事態は好転しないということだろう。

意味のわからないへこみ時間はおいておくとして今まさに、俺の処理が下った。

「月曜日は私、大津知七海が……」

「そして水曜日はこのあたし、緋斑奈々枝が！」

「最後に！金曜日は三塚菜々子がお兄ちゃんと一緒だよ！」

こほんと一つため息をついて七海は言ったのだった。

「これはあくまで救護策であり、決して私情が挟まっているわけではありません。私たちは公平かつ、未来の妻としての技能や男性……この場合は蒼疾さんがどういった女性に惹かれるのかという実験でもあつて……決して、決して夜中ベッドに進入とか寝ぼけている隙に唇を奪って初めての相手は自分だと主張しないための、私たちによる、私たちのための、素晴らしい判決なのです！」

いいきつた七海の背中には後光が見えた……なんてあるわけないな。

「ちよいまつた！俺の意見は？」

「……こほん、フタマタならぬサンマタを敢行しようとした蒼疾さんの意見なんて無視します」

「え？」

七海が断言し、他の二人がうんうんと頷く。

「してないぞ、サンマタなんて……………」

そついうとどこからかスモークガラスと手に持つタイプの目を隠すあれね……………わかるかな？証言VTRとかで目を隠すあれを彼女達は持つて啞然としている俺の目の前でそれは始まったのだった。

「ええ、はじめは……………いわれたときとても嬉しかったですよ？だって、まさか、あちらのほうから……………ええ、そうです。けど、どうやら引越しの前の日に……………うつ……………酷い人です！（プライバシー保護のため、三人の証言者の音声は変えております）」

「ああ、そうね……………あたしの場合は暗がりで、えっと……………押入れの中だったかな？それで、せまっちいからぴとつくつについて……………あの頃は弱虫で、泣いていたら抱きしめてですよ？耳元で優しく。君みたいな綺麗な女性はいないって……………本当に女たらしよ！」

断言しよう……………俺がガキのころにそんなくどき文句を言えとは思えない。

「えつとねえ、こつ、なんかとても暗いところでお互い顔とか見えなくて……………そうそう、押し倒されてもう何がなんだか……………そのときこけていたくてね……………なんだかどこにもいけないんじゃないかっていう不安が来て……………そうそう、そしたらわたしのことをすきなんだあつて言われて……………そのまま……………」

今だったら本当に何をしでかすかわからないがそんなガキが男女の営みというやつを知っているとは思えない。

兎にも角にも、三人が三人とても美人だ……………悪くはないのかもしれない……………意外と俺っていい待遇なんじゃないだろうか？だって学校だって同じだし……………そこまで思い当たってふと考えた。

「あのさ、少し思ったんだが……………俺と同級生の人……………」

「はい」

そついつて手をあげたのは七海ひとり。まあ、妥当なところだろ

うか？身長の高い奈々枝に身長の低い菜々子……この二人は年上と年下ということなのだろうか？

「俺より学年一個上の人」

「はいっ！お兄ちゃん！」

うん、既にその時点で俺は菜々子のお兄ちゃんではないね。

「……………じゃ、あんた年下？」

「何よ、その驚きようは……………？しばくわよ？」

しばいちゃんやん……………とかいつている場合ではない。

「先輩に対して敬語がなってる」

「はあ？蒼疾は自分が先輩だっと思ってんの？年齢は同じよ、同じ！」

つまり、この奈々枝は……………

「すべった？」

「うつさいわね！」

留年したのだろう……………頭が悪そうには見えないのだが……………

「テストとかまじめに受けたのか？」

そういうと奈々枝はなんだかもじもじし始めてふと、天井を見上げる。

「あ、あんたのことを考えて夜空を見上げていたら勉強どころじゃなかったわよ！」

「……………」

なんだか、今物凄いことを言われたような気がしたぞ、おい。いや、気のせいだろう。

「こ、こほん……………それより、菜々子だっけ？本当に年上？」

そういうと頬を膨らませる。どうみても中学生にしか見えない。

「失礼だな～おにいちゃんは！」

「あ、わかった……………年はしたんだけど飛び級とか？」

「いえ、菜々子先輩は十七歳ですよ。五月一日に十八歳になられます」

「ふ～ん？」

首をかしげる俺に近づいて菜々子先輩は言ったのだった。

「……………ロリ姉、萌える？」

「……………ごめん、萌えないっす」

「ガン！」

しきりにシヨックを受けているロリ先輩は放っておくとして俺は七海に視線を移した。

「……………俺と同年？」

「ええ、そうです。十六ですよ」

本当だろうか？意外と裏設定があるのでは？実は男だったとか、元、男だったとか……………

「あの、何か失礼なことを考えていませんか？」

「いや、考えてないぞ、うん」

あせつてもしょうがないので俺はそこで話を終えることにした。

「まあ、あれだ……………よくはわからんがこれから宜しく！」

こうして、俺は約束を守るためにやってきた三人と友情を深めるべく、がんばることにしたのだった……………色々と。

第五話：「月曜日は七海の日（前書き）」

蒼疾「えーと、今回は……………」七海「七海です。今回も次回予告をしにきました」蒼疾「あれ？おかしいな……………」七海「次回、フェアリーブレイヴ第六話！『三人と婚前交渉！』」蒼疾「絶対違うだろ……………」

第五話：「月曜日は七海の日」

第五話：

「月曜日は七海の日」

二年生になって初めての月曜日。担任教師の面倒な話を聞いている間も隣にいる大津地七海の視線を感じる。そんな七海に先生の視線が突き刺さっている。

「……大津地さん、聞してる？」

「ええ、聞いてますよ、先生。今日から朝の十分間校舎のごみ拾いをするんですよ？あ、ちなみにその前は新しくやってきた新入生達を歓迎するための会を作ろうとかいってたんでしたっけ？」

「……………」

先生は固まって一つだけせきをする。そして、七海はもう用事は終わったとばかりに俺の横顔を眺めていた。

「……こほん、えっと……………あゝもうっ！内容忘れちゃったじゃない！後で報告するからね！解散！」

教室中がざわざわとなり始めて先生はこちらをなんだか睨みつけるような感じで出て行った。

「……七海、なんだかさつきからずっと見てない？」

「それはまあ、婚約者ですから」

答えになっていないことをいってにこりと笑い……………そういった言葉は他人に対しては（主に男子）降り注ぐ銃弾となってその体を貫いていった。

「おい、今の聞いたか？」

「婚約者って聞こえたわね？」

「本当か？」

俺の背中にヤヴァイ汗が流れ始める。

少し話しが変わるようだが聞いて欲しい……………あるとき校長先生が剣道部の不始末を知るやいなや素晴らしい校長先生は竹刀を持って

剣道部全員肅清を敢行したのである。生徒に対しては無期限の部活動禁止（剣道部は存続）を命じて顧問は次の日から行方不明となった。新聞にも取り上げられたのだがあれから約半年……校長先生がどれだけ恐ろしいのかさっぱり想像がつかない。

「校長先生に連絡だ！」

誰かがそういったので俺はそいつにドロップキックを喰らわせる。なあに、そのくらいでひとは死にはしない。

「こほん、良識あるクラスメート皆に聞いてもらいたい」

殆どが持ち上がりなため、三分の二が知り合いである。静かになったところで俺は教壇から言い放った。

「俺はまだ死にたくない！」

おおっ！という声が聞こえてくる。よし、ここで一押しを……

「というわけでミザルキカザルイワザルでよろしく頼んだ！」

頭を下げる。ここまでしておけば俺の保身は完璧だ。

そんな俺のことを可哀想だと思ったのか一人の男子生徒が肩に手を置いていった。

「……わかったよ、パシリー号」

「は？」

頭を上げた俺に当然だといわんばかりの瞳の色を見せる。

「そりゃ、ばれたら切断だからな……気持ちわかる」

「せ、切断？」

別の男子生徒が首をすくめる。

「というわけで、黙っておいてやるからみんなのパシリーな？」

「ええ！？」

「おいおい、切断は免れるんだぜ？」

まるで王手飛車取りみたいな顔をしているクラスメートA……その面に一撃ぶちかましたい気がしたのだが、そんなことをしたら切断である。

「ちょっと待ってください！」

「うおっ？」

教壇を叩いて七海がクラスメートをじろりと見た。それだけでいつもの彼女からは想像できない雰囲気が出てきて大抵のクラスメートが黙り込んだ。

「パシリとか、いけません！私が許しませんよ！」

そういつて先ほどまで俺をパシリにしようとしていたクラスメートが愛想笑いを浮かべる。

「え？や、やだなあ……冗談だよ、冗談」

そういつて引ッ込んでいった。

クラスメートを眼力だけで退けた伝説を持つようになった大津地七海は俺のほうを見た。

「さ、次の授業は生物室でありますから一緒に行きましょう？」

「え？あ、ああ……」

腕を引ッ張られながら廊下を歩く。廊下を歩いている人たちはそんな二人組をみながらひそひそと話していた。

「ちょ、ちよつと！」

「どうしたんですか？」

不思議そうに立ち止まる七海に腕をつかんで歩くことをやめさせようとおもったのだが……

きんこんかんこん

「あ、予鈴が……」

「やべっ！急ぐよ、七海！」

俺は急いで七海の手をとって駆け出したのだった。

「はあ、疲れたなあ……」

屋上の転落防止用フェンスに背中を預けて蒼空を眺める……ああ、空はこんなに青いのにな何で俺の心は真っ暗闇のどしゃぶりののだ？

「さ、あゝん」

「……………あゝん」

病人じゃないんだから自分で食べれるのだが悲しいことに箸が一膳しかなかった。お弁当は七海が作ってくれたのだが、まさかこんな罨が待ち受けているとは全然思っていなかった。

「どうですか？」

「……………おいしいけどさ、恥ずかしいんだけど？」

「そうですか？」

そういつてあたりを見渡す七海。

「でも、私たち以外の人たちもやってますよ？」

そこらじゅう、カップル達がひしめき合って一つのお弁当をつついていた。カップル以外の連中がこの甘ったるい空間にいるわけではないので……………というか、いたとしてもかなりいづらい雰囲気があるだろう。俺だったら退散している。このラヴ・フィールドに耐えられるのは自らそのラヴ・フィールドを形成できる者達だけなのだ！

「……………いや、いちやいちやフィールドでも一緒に」

「何いつてるんですか？」

「いや、何も……………ところでさ」

ふと、思ったことを口に出してみる。

「十年ぐらい前だっけ？俺が七海に会ったのは」

少しの間、考えるようにして七海はいった。

「……………そうですね、あの頃……………蒼疾さんはとても引つ込み思案な人だったと思います」

蒼空を眺めており、当然俺もそれを追うようにして蒼空を眺めてみる……………だが、俺が見ている蒼空は七海が見ているような蒼空とは違うものなのだろう。どこまでも続いていく蒼空、雲……………何の変哲もないそんな蒼空だつて見る人によつていろんなものになつてしまふのだ。

「……………けど、私は今の……………その、蒼疾さんが好きですから」

「え？」

少し強めの風が吹いて聞こえなかった……………なんていいわけはし

ないが、唐突過ぎて驚いていた。当然だな。

「……去年は一度も話しかける勇氣なんてありませんでしたから」
「？」

首を傾げる俺を見て七海は笑って言ったのだった。

「さ、そろそろ戻りますか？」

「………そうだな」

ま、いいか。どうせ来週のこの時間も一緒に飯食ってるだろうから。

そろそろと仲良さそうに帰っていくカップルの後ろを俺たちは二人で一緒についていったのだった。

「ただいま」

「ただいま戻りました」

俺は靴を脱いで廊下へと足をつけ、七海はスカートを脱いで……

「ちよつと待て、何でスカート脱いでるんだよ？」

「えっと、その、帰ったすぐにするのが………礼儀かと」

「違います、というか、何をするんだよ？」

俺は七海のスカーートを握って七海にはかせる。

「おかえり〜さきかえってたわよ………七海先輩、どうやら一日じゃ駄目だった見たいですねえ？」

「むっ………」

七海と奈々枝がにらみ合っている。ああ、そうか、そういえば……

……

「おかえり、お兄ちゃん」

「ただいまかえりました、菜々子先輩」

この三人がこの家に住むということはまだ話していなかったと思われる。

第六話：「その日の夜は暗かった（前書き）」

蒼疾「えっと、今回登場するのは……」 奈々枝「あたしよ、あたし」 蒼疾「奈々枝かぁ…… あれ？七海は？」 奈々枝「七海ならさつき縄で縛っておいてきたわ…… 大体！前はあたしが登場するはずだったのに！」 蒼疾「まあまあ、憤慨しないで次回予告してくれよ」 奈々枝「次回、フェアリーブレイヴ第七話！『蒼疾がすきなのはあたしだけ！』」 蒼疾「…… また勝手な題名つけ始めたな」

第六話：「その日の夜は暗かった」

第六話：

「その日の夜は暗かった」

大津地七海、緋斑奈々枝、三塚菜々子が俺の家にやってきたその日の夜、流れでそのまま全員でゆうしょくをたべることになった。無論、俺がこの場合は三人をもてなす側なので夕飯調理者となっている。

メニユーは子供が大好きなカレーであり、これならば食べれないやつはいないだろうという俺の独断と偏見で決めさせてもらった。案の定、誰一人として文句を言うやつはいなかったのだが………「そういえば、ご両親を見かけませんか？」

口の中のすべてのものを飲み込んでから七海は俺に尋ねてくる。

「……まあ、いつもいないから」

こちらに引越してから毎日のように両親は姿を消しており、かなり忙しい日々を送ってきている。一週間に一度くらいしか姿を見ていないし、顔だつて忘れかけたこともあった。まあ、每晚九時ごろには親子水入らずの時間という意味不明な時間を設けていて声は聞いているが。

「そうなんですか……大変なんですね？家事とかお一人ですよ？」

気がつけば七海がすべて食べ終えていて食器を流しに持っていく途中だった。

奈々枝、菜々子先輩は一生懸命カレーと格闘しているし、俺だってまだ半分ほど食べていない。しかしまあ、不思議な話だが初対面名はずなのにぎこちないという雰囲気は一切流れていない。これはどうということなのだろうか？彼女たちが言っているとおり、将来を約束していた仲だという証拠なのだろうか……

さっぱりわからないので俺は無言のままカレーを口に運ぶ。

俺の沈黙をどうとったか……七海は言った。

「うん、決めました！」

「なにを？」

「私、やっぱりこの家に住んで蒼疾さんのお手伝いをします！」

右手をグーにし、天に掲げて七海は断言したのだった……………そして、驚いたのは俺である。

「ちょ、ちよつとまった！」

「どうしたんですか？」

「なんでそういった流れになるんだよ？」

「だって、これでは蒼疾さんがかわいそうですよ！あ、心配しないでください。私、舵は得意なほうですから」

「いや、そういうことじゃなくてだな……………」

俺がどうやって説明しようかと思っていると俺の隣で食事をしていた奈々枝が言った。

「うん、それいいわね！あたしも手伝ってあげるわ」

「はあ！？」

「当たり前じゃない？大切な人が家事で苦しんでいるのなら…………助けてあげるのが、その、妻としてのつとめじゃない？」

いや、素直に言われてうれしい言葉だけどな、別に家事で苦しんでいるとは言っていないだが…………なんていうことを奈々枝に言う前に菜々子先輩がお皿を俺に突き出して言った。

「まかせて、お兄ちゃん。わたし、家事とか結構得意だから」

「つて、先輩まで……………」

この奇妙な先輩のことをとやかく言いたくはないのだが（さきほど腕相撲をしたところ、軽くひねられた）破滅的な料理が出てきそうな予感がするのだ。

協力すると言い出した二人に対して、七海は言った。

「いえ、私一人で大丈夫です…………お二人は何もしなくて結構ですよ」

「でも、そんな……………」

「水臭いよ、七海おねえちゃん」

本当に申し訳なさそうな顔をして七海はいった。

「だって、お二人が蒼疾さんのお手伝いをしてしまつたら蒼疾さんがお二人に寄っていく可能性がありますから……私だけが蒼疾さんのお手伝いをする事によって私だけが蒼疾さんの心の中のパーセントゲージをゲットできます！」

「……意外と黒いのな、七海」

「いえ、当然ですよ……だって、その、二人きりじゃないといろいろとできないじゃないですか？」

何をする気だ、何を。

「ちよつとまつた。七海、悪いけど蒼疾は渡せないわ……」

そういつて食事を終えた奈々枝が立ち上がる。

「右に同じでおにいちちゃんは渡さない……もちろん、奈々枝先輩にもね」

いまだ食事を終えていない菜々子先輩は立とうとしたのだが俺が座らせた。

「絶対に、お二人がこの家に住み込むことを許しませんから」

「何言つてるの、未来の奥さんのあたしが絶対に勝ち取るわ」

「二人には絶対にお兄ちゃんは渡さないってあの日誓ったから」

一触即発な空気をもやもや一としたオーラとして産出している三人に俺は言つた。

「待つた、俺の両親が決めないとそりゃ、だめだろ？」

「た、確かにそうですね……」

「ごめん、蒼疾」

「忘れてたよ」

やれやれ、とりあえずあと十分ぐらいで九時だからそろそろかけても大丈夫だよな？

フル充電完了の携帯を取り出してプッシュ。もちろん電話の相手は父さんたちだ。

「あ、父さん？」

『お、息子か？どうした？大人の階段を上がる方法を聞きたいのか？』

「違う！……信じてもらえないかもしれないけど俺の家に住みたいって言う…友達がいるんだけど？」

若干の間が相手から声が聞こえてくる。すでにそれは父さんではなかった。

『で、その友達って男の子？それとも女の子？』

「えっと、女の子」

そういうと完璧に沈黙。ああ、これはだめだろうなと思って電話を切ろうとすると……

『わかったわ。あの三人なんでしょう？だけど、簡単に手を出しちゃだめよ？節度あるおつきあいをするのよ』

そういったすぐあとに父さんの声が聞こえてくる。

『さあ、美月ちゃん一緒に寝ようよ』

そのまま電話は一方的に切られた。

「……なんなんだよ、いたい」

三人の宿泊許可があつさりと決まったことに対して半ば不安を覚えながらも俺はそれを伝えた。

その後も少しいざこざがあつたのだがこうして俺たち四人は同居することになったのである。不安がないといったらうそになる……とにかくにも、始まってしまったこの生活に慣れることだけを信じて俺は枕を高くして寝ることにしたのだった。

第七話：「水曜日は奈々枝の日（前書き）」

蒼疾「今回もまた登場するのは奈々枝！」奈々枝「へえ、珍しく紹介してくれるのねえ？」蒼疾「まあ、たまにはな」奈々枝「今回こそあたしが主役よ！」蒼疾「では、次回、フェアリーブレイヴ第八話！…………『題名忘れました！』乞うご期待！」

第七話：「水曜日は奈々枝の日」

第七話：

「水曜日は奈々枝の日」

さあ、今日も明るい朝がきたよ！目覚めよう！すばらしき青空が君を待っている！

そんな音が目覚まし時計から流れ出る。ちなみに言うが外は曇りだ。青空でもなんでもない。昼からは雨だって昨日の夜のニュースで言っていたし。

そんな時、俺の部屋の扉をあく音が聞こえてくる。誰が来たのかわからないが起こしに来たのなら無駄である。そう簡単におきない！これが俺の譲れない信条である。

「そ・う・や」ほら早く起きなさいよ」

「……」

「もうっ！ほら、おきてよ！」

ゆさゆさと俺をゆすっているが甘いな、奈々枝。俺は先ほども言ったとおり鉄と書いてくるがねという心を持っているのさ」

「もう！仕方ないわね……」

おもむろに俺の耳あたりに顔を近づけている。ふふ、どうせ大きな声を出して驚かせる作戦だろうと思って身構えていると……

ちゅっ

「！？」

「あ、よ、ようやくおきたのね？」

ぎよつとした顔で奈々枝を見ると顔を真っ赤に染めていて俺を見てはいない。

「い、今何した？」

「……お目覚めの……ほっぺにちゅう」
「……」

俺は何も言えずに奈々枝を凝視しているが、それに対して本当に恥ずかしそうに下を向く奈々枝。かわいい……じゃなくて！

「え、えつと……とりあえず飯だよな？」

「え？う、うん。だから早く起きてつていったじゃない！」

ほらほら、早く行つたと俺を押しながらエプロン姿の奈々枝は顔を赤色に染めたままだった。ピンク色のエプロンがよく似合っているというのは言わないでこつ。

すでにほかの二人は学校に登校しているらしい。どうやら目覚まし時計がおくれていたらしい。登校までの時間は本当にぎりぎりであり、ゆっくり二人で朝食を食べている時間はないのだが……それでも俺は、いや、俺たちはともに食事をしていた。

「ほら、またこぼしてるわよ」

「あ、すまん」

「ほら、ご飯粒」

「……」

奈々枝はそれを自分で食べる。

「何？」

「え？いや、何も」

「さ、そろそろ学校行くわよ？」

「あ、ああ……」

高鳴る鼓動が実に馬鹿らしい。

「じゃ、いつてきます」

もはや誰も残っていない我が家に対して奈々枝は頭を下げたのだ。
つた。

「……」

「ん？どうかした？」

「い、いや……何してるんだろつと思つてな」

「ああ、挨拶？……本当に何も覚えてないのね？」

そういつてかなりしょげたような顔になっていた。

「え？あ、その、なんだ？えっとだな……あのさ、小さい頃の俺ってどんなやつだった？」

救護策というか、ごまかし案として共通のはずの時間を聞くことにした……まあ、俺は記憶喪失で全然昔のこと……小学三年生以前のことを覚えてはいないのだが。

「えっと……とりあえずおとなしかったかな？けどさ、友達とかあんまりいないようだったよ？本しか読んでなかったし、誰かが話しかけても意図的に無視してた」

「……根暗まつしぐらだったのな」

成長したときの姿がめがねかけてパソコンやってそんなイメージだ。

「けどさ、ある日珍しいことが起きたんだよね」

懐かしそうに青空を見上げる奈々枝。

「へえ、何がおきたんだ？」

「えっとね……あるとき一人の子が泣いてたんだ」

「ふんふん、それで？」

「小学生ってさ、ふざけて何か物をとったりするじゃない？それでさ、そのときあたしのお財布が盗られたんだ」

早速金目のものに目をつけるとはガキの癖にしては一番悪いことじゃないか……まあ、人のことを言えた義理ではないのだが。

「クラスで一番の悪がきでさ、誰もがそいつが盗った事をわかってたんだけど仕返し怖かったから黙ってたの」

そりゃそうだな。

「俺も確実に黙ってるだろうな」

「そうよね」

なぜだかにこりと笑って奈々枝は笑っていたのだった。

「おいおい、そこはそんなの間違ってるわよ！っていうところじゃないのか？」

「うつん、それでさ、その子も勿論先生とかにいつてなかった。ただ黙ってみてただけなんだけど……あるときさ、その財布をあたしに返してくれたんだ」

「へえ、どうやって？そいつ、その悪がきを校舎裏にでも呼び出してぼこぼこにしたのかよ？」

「いや、呼び出されたのはあたしだよ。それでさ、校舎裏で財布を渡してくれたんだ。ただ、それだけ」

「はあ？」

「返してくれたのかって聞いたら首を振ってただ一言……」

「……盗った」

「そう、そう言ってた」

驚いたような顔をして奈々枝は俺を見る。ふと、俺はなんだか変な気持ちになっていた気がした。

「……話を続けてくれ」

「えっと……ありがとってお礼をいえずにさ、そのまま過ごして……けどね、その根暗な子にも友達が出来た。隣からその子が読んでいる本を覗き込むようにしてさ」

「……」

記憶の断片というものだろうか？ふと、俺は……なんだか忘れていた記憶がよみがえりそうな気がした……だが、それはあくまで気のせいだった。

「……ま、今、そいつはどうなったんだろうな……」

「さあ？」

奈々枝に言われて気がついたこと……なるほど、俺の始まりはもしかしてそれが発端だったのか？うつむ、とりあえず俺が今するべきことは……

きんこんかんこん

「って遅刻じゃないか！」

「い、急ぐわよ！」

手なんか繋ぐ事無く、俺たちは全く同じスピードで走り始める。

「奈々枝、意外と足速いな？」

「え？そう？ただ蒼疾の足が遅いだけじゃない？」

「い、いつてくれるじゃねえか！」

みよ！これぞ某ロボツトアニメを見て作成した俺の最高傑作！

「これぞ三倍の速度を誇る赤い角！」

「あ、いゝなそれ！」

「あっ！？」

赤い角をあつさりとられてそれをそ、装着しただと！？

「おお！本当に早くなるのね、これ！」

「な、なんとあ！？」

見る間に残像を残して俺の目の前から去って行つたのだった。

そして、無常に鳴り響く本鈴。

「……………はあ」

とぼとぼと歩いていると向こうから怪しい男が走ってきた。手にはバックが握られている。

「誰かあ！ドロボウよ！捕まえて！」

「どけっ！」

俺の右肩にあたっていつてそいつはすぐさま消えちまった。

「ああ、だれかあ！」

後ろからやってきたおばあさんに俺はバックを手渡す。

「どうぞ、さっきのドロボウは当たった衝撃でこれを落としていき
ました」

「ありがとう……………」

そんなことをしているうちに……………というか、そのまま俺はや
つてきた警察などからお礼などを言われている間にどんどんと時間
が経過していくがまあ、既に警察から学校へと電話はされているの
でこれでセーフ。

意気揚々と歩いていくと校門のところで一人の女子生徒が立って

いた。

「遅い！」

「って、待っててくれたのかよ？」

「勿論じゃない……………」

少しだけ間が開いてから奈々枝は口を開いた。

「今回も助けてあげたの？」

セピア色の映像が頭の中に現れるがそれはノイズを伴って姿を消す。

「……………いや、これが初めてだな」

そういつて俺は再び奈々枝の隣に立って校門を通過したのだった。

第八話：「火曜日と木曜日は布団を…」（前書き）

蒼疾「あー、疲れた……次回フェアリーブレイヴ第24163話『俺そろそろ飛べそう』」菜々子「ちよつと蒼疾お兄ちゃん！しつかりしてよ！次回！フェアリーブレイヴ第九話！『金曜日は菜々子の日』」蒼疾「実は菜々子先輩は……」

第八話：「火曜日と木曜日は布団を…」

第八話：

「火曜日と木曜日は布団を干す日」

火曜日はいたって普通……というわけでもなく、俺のクラスとその隣にはこの学校屈指の美少女大津地七海が陣取っているのである！

「あ、やべっ……教科書忘れちゃった」

教科書は全てロッカーに放り込んだりしている派閥なのが、七海がそれではいけません！と声を高らかにしてくれたおかげでロッカー内は給料前のお財布同然までにしょぼくなった。

とりあえず、教科書を忘れたことを隣に告げる。

「ごめん、教科書見せてくれる？」

「ちよつと蒼疾さん、何で私にいわないんですか？」

「……いや、ほら、大津地さんの勉強邪魔しちゃうかなあと」

クラスメート達にじろじろと見られているのでは色々と申し訳がたたないというか、下の名前で呼び合っていると校長先生の耳に入りやすくなるに違いないので苗字である。

「む、下の名前で呼んでください」

「……だつてさ、校長先生にばれたらどうするんだよ？」

これが間違いだったということなんて俺は知らなかった。

「あ、そうでしたね」これからお爺様のところへ行きましょう！

「え、ちよ、ちよつと！？」

あのホームルームも終わってざわざわしていたのだがここでひとりの少女が俺たち（主に七海）の進路を塞ごうとする。

「おはよう、蒼疾と七海」

「おはようございます奈々枝ちゃん」

「って家で会ってるじゃんか」

はあと一つため息をついて俺は奈々枝のほうを見る。俺を隠すよ

うにして七海はにこりと笑って奈々枝を見ていた。

「それで、何かようですか？」

「ああ、ちよつと蒼疾に……ごめん、ちよつとこっちにきてくれない？」

「え？あ、ああ……んお？」

奈々枝のほうに行こうとすると七海がその間に立ちはだかる。

「………何考えてますか？」

「え？ああ、ちよつと友人に紹介しようかなって思ってた」

「本当ですかあ？」

ジト目になつて奈々枝を見ているが裏表のなさそうな奈々枝は勿論だといわんばかりに頷く。

「ま、いいじゃない？昨日はずっと一緒だったんでしょ？」

「まあ、そりやそうだな」

「………確かにそうですね」

しぶしぶといった調子で、だが俺はかなりほつとした調子でため息をそれぞれはいた。

「蒼疾さん」

「何だ？」

「いえ、何でも……」

そういつて七海は席に戻ったのだった。

「じゃいきましようか蒼疾」

「あのさあ、ふとおもったんだけど……」

俺は足を止める。

「俺が行ったところでどうなるの？というか、恥ずかしいぞ」

「まあまあ気にしない気にしない」

留年したと聞いたが意外と友達が……あれ？まだ四月の初めだぞ？そんなすぐに友達なんてできるものだろうか？

疑問はそのまま残っていたのだが俺は去年までは自分がいた教室にやってきた。やはり、まだなれていない生徒達がいるのかそれぞれが席に座っているようだったが既に交友を深めたのかまとまって

話している連中もいた。

「ほら、あそこよ」

引きずられるようにして教室にやっていくとこいつは誰だ？という雰囲気の流れていた。

「あ、おかえり！ ナナスケ」

ほほう、そんなあだ名で既に仲良しさんがいるのか？

「紹介するわ、これがあたしの婚約者よ！」

「これっていうな、それと誰が婚約者だ？」

「あんたよ、あんた……ええと天川蒼疾。この学校の二年生！」

片手でぶんぶん振り回される俺。クラスの連中が物凄く面白そうな顔をして俺を見ている……上等じゃねえか！放課後全員校舎裏に呼び出してリンチしてやるぜ！ってその場合は俺がリンチされる側だな。

「へえ、先輩なんだあ！ ナナスケと違って」

「あたしも先輩なんだけど？」

「年齢だけね」

がーんとショックを受けている奈々枝を放っておいて俺へと右手を差し伸べてくるぐるぐるめがねの女の子。

「君、名前は？」

「八津崎凜呼です」

「八津崎さんね、よろしく」

「凜呼でいいですよ」

握手をしてみると……

「ぐっはあ！」

「えへ、こうみえて握力強いんですよ」

「お、おれるう」

ゴキッ

「あ、折れた」

「え？す、すみません！」

謝るんならそんなに強く握らないで欲しいんだが……しくしく。
そんな中奈々枝が立ち上がった。

「奈々枝え、折れちまったよ」

「ええ？しょうがないわね………ほら」

ゴキリ♪

「あ、直った……いや、治った！」

「良かったですね、先輩！」

二人でばんざーいばんざーいとしているところに本鈴が鳴り響く。
「ああっ！しまった急いで戻らないと………じゃあな、奈々枝、凜
呼ちゃん」

こうして俺は一時間目を遅刻して過ごす羽目になったのである。

そして、昼休み………

「さあ！お爺様のところへ行きましょう！」

「かんべんしちくれえ！」

ずりずりと床を引きずられながら俺は教室の扉へと近づいていく。
クラスメートの男子生徒たちに助けをもとめる。

「じゃあな、逝ってこい！」

「漢字が逝ってこいつてなってるぞ！お前、七海と結婚したいって
いつてたじゃないかよ！」

「ああ、だがあの爺さんじゃちよつとな」

「なんじゃそりやああああ………！！」

「開け放たれるドア！」

「あれ？」

「ん？」

てつきり七海が開けたのかと思ったのだがどうやら違っらしい。
そこにはちっちゃな先輩がたっていた。

「邪魔するよ、お兄ちゃん♪」

「な、菜々子先輩？」

ちっちゃなお弁当箱を持って教室へと入ってくる。

「何してるの？もしかしてもうお弁当食べちゃった？」

「いや、まだですけど？」

七海が答え、俺も頷く。お弁当はお爺様と仲良く食べようといっていたのである。

「なら一緒に食べよう？」

「え？そ、そうですね」

俺の足を

天使だ……いや、女神だ！この教室に女神が光臨された！

「え？何々？」

「先輩って……」

しかも早速クラスメート達に囲まれていた。

「いやあ、いいねえ……えつとね、わたしは三塚菜々子。その蒼疾おにいちゃんの婚約者なんだ」

「犯罪だろう！」

いきなり誰かが高らかに宣言する。

「何だ？」

「どこからだ？」

こ、この声は……

「学級委員長！青葉ゴンゾウ！参上！」

一人の女子生徒が頭をつかんで一気に引き抜き、そこから一人の男子生徒が現れた。いや、このクラスの学級委員長だから変装とかしてなくてよくねえか？

「はじめまして三塚先輩」

「え？う、うん……」

ほら三口……先輩引いてるぞ。

「蒼疾お兄ちゃん、ええと、この人は？」

「変態です。先輩、今すぐ俺の後ろに隠れてください」

「う、うん」

隠れてすぐ、ゴンゾウは行動を開始した。どこから取り出したカメラで比較的成長の遅いクラスメートを激写する。

「さあ！先輩！僕の気持ちを癒してください！はあはあ」

「そ、蒼疾お兄ちゃんどうにかして！」

「いいですか、絶対にあいつとは目を合わせちゃいけませんよ！目、瞑っててください」

「う、うん」

ぎゅっと目をつぶったのを確認して俺は一步踏み出す。

「ゴンゾウ、先輩は今さっきその窓から飛び降りたぞ」

「はあ？なにいつてるんだ？」

「実はな、先輩は魔法少女だったんだ」

「何？」

「ほうきにまたがって飛んでいった」

「なんと？せんぱーい！俺もいきまーす！」

窓を突き破ってそのまま消失。

「先輩、危機は去りました」

「え？本当？じゃあお弁当食べよう？」

「ええ………」

席についてそれぞれが談笑する。

「蒼疾さん？」

「あ、七海………」

なんだかものすごく怖いオーラが立ち上っている。俺、何かした？

「どうです？蒼疾さんも魔法少女追いかけてみますか？」

「え？いえ、えんりよしておきます」

その後、ずっと七海は機嫌が悪かったのだった。

第九話：金曜日は菜々子の日 + α（前書き）

蒼疾「菜々子先輩、気がつきましたか？」菜々子「何を？」蒼疾「実は前回のサブタイトル、きちんとかぎかつことじがつけられているんです！」菜々子「それは知らなかったよ！でも何で？」蒼疾「記念すべきだい十回目だったからです！次回！フェアリーブレイヴ第十話！『自給七百円で世界を守りませんか？』」菜々子「感想よろしくお願い！」

第九話：金曜日は菜々子の日 + α

第九話：

「金曜日は菜々子 + α の日」

朝、俺の眼の中に日差しが飛び込んでくる。

「蒼疾お兄ちゃん、朝だよ」

「……………先輩、おはようございます」

「うん、おはよう！」

ああ、癒されるなあ…………… っていかんいかん。なんだか所詮は脇役キャラのゴンゾウが頭の中に入ってきてしまったのか？

「じゃ今から朝食作りますね？」

「うん！がんばってね蒼疾お兄ちゃん！」

菜々子先輩が張り切って作るといったのだが正直不安だ。怖い。俺のことをチキンだとののしりたければののしるがいい！悪いが俺には輝かしいかよくわからんが、とりあえずは大切な未来があるのだ！

「目玉焼きでいいですよね？」

「うん！」

その間先輩は朝食の準備をしている。

「あ、そういえば後の二人は？」

「まだ寝てると思うよ」

「ん」

「ん」

哀れ、寝室には猿轡までされている七海と奈々枝の姿があった。

「そうですか……………じゃ先に食べて学校に行きますか？」

「うん」

「じゃ、二人とも先にいつてるから」

まだ寝ているだろうから声だけを寝室に響かせて俺は菜々子先輩と一緒に通学を始めることとなったのだった。

通学途中、やつが現れた。

「せんぱーい！ゴンゾウです！」

「ひいっ!？」

えっと、マンホールから。

「はい、そこでストツプな」

「んがっ!！」

マンホールの蓋を顔面にぶつけてやる。

「何するんだ！」

「意外としぶといのな、お前……………人間か？」

「失礼だな、親友」

「親友？」

先輩が首をかしげる。

「ええ！そうなんです！ちょっと色々とおあって……………あ、そうだ！先輩は『蒼い弓』ってしてます？」

「おい、ゴンゾウ！」

「蒼い……………弓？ってあのスリだよ蒼疾お兄ちゃん？」

「……………蒼い弓。結構前から噂されてるスリですね。それこそ様々なものをすっていくっていうやつです。ですがここ最近、さっぱり出ていませんし、その多くの犯罪が他人だったりその名前を勝手に使ったりする連中ばかりです。実際、専門家はそのスリ犯罪者も何もしていないといっていますから」

「へえ、詳しいだね蒼疾お兄ちゃん？」

「……………ええ、まあ……………」

「そうだよな、蒼疾」

「お前もつ出てくるなよ！」

開いていたマンホール内へとゴンゾウを落として蓋を閉める。

「さ、行きましょう先輩」

「うん」

こうして、俺は遅刻する事無く、学校へと到着したのだった。

放課後、校門前で先輩と待ち合わせをしていたのだが、どうやら俺のほうに先に来てしまつて待ちぼうけを喰らっていた。

「やあ、親友」

「おい、またかよ？」

足元のマンホールをすばやく踏む。

「おっと、やられちゃったか……で、蒼い弓は……」

「蒼疾お兄ちゃん！」

「あ、先輩」

マンホールから声など聞こえてくるはずもなく、そんなものは都市伝説だ。俺はさつくりと無視して先輩と歩き始めていた。

「ああ、そういえば聞きそびれていたんですが小さい頃の俺ってどんな奴でした？」

風がふと強く吹いて俺と先輩の間をかける。

「何で？そんなことを聞くの？」

「え？」

普段からは声色どころか、声自体変わったような声が聞こえてきた。

「え？それは……記憶が失われているんだか知っておいたほうがいいと思ったからです」

「そう……」

ふと、物凄く強い風が吹いたような気がした。

「……あれはわたしがあなたに出会つてすぐ……そうね、今から約十年前ぐらいかしら？あの日、わたしは近所の公園で遊んでたわ」

先輩、そっちのほうかなり年上らしいです。気のせいか身長も大きくなった気がしますし胸もその、でかくなってる気がします。

えつと、これ、本当に気のせい？

「ひとり遊びが好きだったわたしは砂場でお城を作っていたわ……

…そこへ、あなたがやってきた」

物凄く切れ味のある瞳が俺を射抜いた。

「そうね、あなたとの出会いはわたしの世界を壊したわ……………全てね」

「そんな悲痛にいわないで下さい」

「そう？まあ、壊しちゃったことには違いはないわ」

「やれやれ困ったものだとかばかりに先輩は言った。」

「とりあえず、あなたの所為でわたしは二人になったのよ」

「ふ、二人？」

「ええ、家では静かにしているから大人しいこの性格」

おとなしいか？

「そして、遊ぶときとかはこっちの人格がでるんだよ」

に、二重人格か？

「ええと、じゃあさっきの人格はなんて呼べば？」

「そうだね、あのこは菜々子先輩で大丈夫だと思う♪だって、二人とも菜々子だもん♪」

ああ、そうなんだあ……………じゃなくて！

「でも、呼ぶときが……………」

「じゃあ、わたしのときはちゃんをつけて……………」

「こっちはさんづけね」

「……………切り替え、早いっすね」

公園のベンチに座ってそんな話をする。

「というか、ねえ……………今のあなたじゃ信じてもらえないだろうけどさ。わたしの姿は鏡の中だったら物凄く綺麗に写るわよ」

ポーズをとってんでいるのだがやはりその姿は菜々子ちゃんのものだった。

「はあ、まねに戻るんだけどね……………その目、信じてないわね？」
「そりゃそうだ。誰がそんな話を信じるのだろうか？」

「じゃあさ、ちょっとついてきて」

「え？ちよつと！」

腕をつかまれてそのまま引きずられていく。ふと思って全力で抵抗してみたのだが腕は一向にはなれず引きずられていった。

連れられてやってきたのは公衆トイレ（女子専用）だった。

「ちよつと、こんなところを見られたら後が酷いですよ！」

「気にしない気にしない」

一緒に鏡を覗き込む……………そこには……………

「蒼疾お兄ちゃん、今日は楽しかったね？」

「え？ええ……………」

「蒼疾おにいちゃん、今日は楽しかったな」

「そっちの声でやめてください」

きつと今鏡で俺を見ると真つ青な顔となっているだろう……………

「まあ、これからもよろしくね？蒼疾お兄ちゃん？」

「……………ええ、よろしくお願いします」

もはや蒼空はどこかに引っ込んで星空が瞬いている。

「……………今日は早く寝よう」

「それなら蒼疾お兄ちゃん！一緒に寝よう」

普段とはやはり違う切れ長の瞳にハスキーボイス。

「……………だから、そっちの声でいわないでくださいって！」

「じゃあ、もうひとりならいいのか？」

「……………それも駄目です！」

ああ、なんだか一番この人が……………というか、やっぱりこのひとが一番特殊な存在だったのな。

番外編

「ん？」

頭になんとかピーンと来たような感じがしたのだが俺は気のせい
にすることにした。新聞を読むと『噂のヒーロー！現る！』とかか
れていた。

「ナナスティアって……なんだっけ？」

「ああ、ナナスティアって正義の味方ですよ。知らないんですか？」
「世間でよく言っているわよ？」

「わたしも大きくなったら正義の味方になるんだあ♪」

「ふ〜ん」

まるで他人事のように俺は新聞をたたんだのだった。
それが、いずれ自分の身に訪れることになるうとは…………

第十話：「自給七百円で世界を守りませんか？（前書き）」

蒼疾「ついに十話目……長かった、この道のり！」ゴンゾウ「そうだね、僕も実に嬉しいよ……だって、菜々子先輩が……」蒼疾「次回！フェアリーブレイヴ第十一話！『お嬢様は好きですか？』」ゴンゾウ「大好きです！」

第十話：「自給七百円で世界を守りませんか？」

第十話：

「自給七百円で世界を守りませんか？」

二回目の月曜日がやってきたがまあ、ぼちぼちというか、先週と同じようなことが起きて火曜日。

その日は蒼空だった。ひとりで休み時間の間廊下をうろろろとする。特にすることはないのだが教室に戻ると七海が俺を処刑場（校長室）に送ろうとするし、下の階では奈々枝が笑って待っているだろつし、上の階では菜々子先輩たちが笑って、嗤ってまっているだろつ。

「きゃっ！」

「あ、ごめん」

ぼーっとしながら歩いていたせいもあってか誰かとぶつかってしまった。情けない話だな。

「ご、ごめんなさいっす！失礼するっす！」

「？」

どう見ても女子生徒だった慌てて走り去っていった。

「蒼疾、君には今フラグが立ったぞ！」

「ゴンゾウ、毎度毎度思うんだがどっから沸いて出てくるんだ？」

何もなかったはずの床からゴンゾウが現れる。

「ふふ、それは秘密さ……………兎にも角にも先ほどの女子生徒とはこれからスペシャルで甘い雰囲気が漂う午後の昼下がりが……………そして、君には女の子四人による修羅場が待っているだろう。うらやましいぞ、このハーレム男」

このこのとっていたのだが……………たとえそれが現実になったとしてもどう考えても楽しい日々になるとは思えない。

「ありゃ？」

ふと、手の中を見してみるとリボンが握られていた。

「おやおや、またすったのかい？」

「すってないっていうか……大体、これは事故だろ？」

うつん、無意識のうちに手が動いたのだろうか？ 違うよな？

「それは返したほうがいいんじゃないかな？ 結構使い古されてる」

「そうだな」

ぼろぼろというより綺麗に使われてきているというのが伝わってくる。追いかけてようにも風のような速さで先ほどの女子生徒は消えてしまったから探さないといけないな。

「蒼疾、そろそろ授業の始まりを告げるチャイムが鳴るよ」

「ああ、わかつてる」

昼休みにでも探しに行くか……そう言うわけで俺はリボンを手に持って廊下を後にしたのだった。

「蒼疾さん、どこにいたんですか？」

「ん？ ああ、ちよつと用事があったてな……それよりさ、すっていう語尾の女子生徒知っているか？」

少しばかり考えるような仕草をして七海は手を打った。

「ああ、ナナスティア・リベッタさんですね？」

「ナナスティア・リベッタ？」

「ええ、外国からやってきたと聞いています……まさか蒼疾さん、何かちよつかいを出そうと考えているんですか？」

ジト目でこちらを見てくるが俺は首を振った。

「いいや、ちよつとさつきりボンを落としていったんだ。だから返しにいいこうと思って」

外国人だったのか……知らなかったなあ。というかナナスティアってどこかで聞いたことがある名前だぞ？

昼休み、廊下に出ると長い銀髪の女の子が四つんばいになって廊下をなめるように何かを探していた。その手には虫眼鏡が握られている。

「ないないないないないないないないないっすう！！ああ

「!どうしようっす!警察へ……………行くっす!」

「あ、そのあんだ」

ぶつかってきたのがこいつだったか知らんがとりあえず関係あるだろう……………

「あんたが探しているのはこれか?」

「え?」

振り返るその女子生徒にリボンを見せる。

「そ、それっす!それ、一体全体どこで見つけたっすか?」

「ああ、さっきぶつかったときに拾ったんだ」

「あ、さきほどぶつかったしまった方でしたか……………」

そいつの顔が俺の顔をとらえ、固まった。

「そそそそそ蒼疾さんじゃないっすか!?!」

しえーみたいな感じで廊下にへばりついている花も恥らう女子高生。銀髪が面白いように広がっている。

「あ?俺のこと知っているのか?」

「知ってるも何も……………いえ、なんでもないっす。うちの名前は知ってるっすか?」

「えっと、さっき聞いたらナナスティアって聞いたな……………もしかしてそれって最近噂の覆面ヒーローナナスティアになるために必要な返信道具だったりしてな」

そんなわけないよなって感じでナナスティアのほうを見ると……………

「どどどどどどうしてばれたっすか?ああっ!とりあえず屋上へ連れて行くっす!」

「え?ちょ、ちょっと!」

右手をつかまれて引きずられていく。頭痛がし始めた。

「うち、変身ヒーローっす!すごいっすよね?」

「へえ!本当!?みんなの平和を守るんだ?」

「蒼疾君の平和をずっと守るっす!」

金髪を見ながら俺は嬉しそうに野山をかけている。

「何か思い出せそうだったな……………」

以前もこうして腕を引つ張られて引きずられてどこかに向かつていたのかもしれない。

「ついたつす！」

ばたんという音共に屋上の風が吹いてくる。しかし、そこからは甘ったるい空気が流れ込んできていた。

「はい、あゝん」

「うん！ゆんなたんのお料理美味しいよ」

「もう！りくたんたら」

「ゆんなたんを食べちゃおうかなあ」

「昼間からす・け・べ」

二人してきよんととしてそれを見ている。ああ、そういえば昨日も七海と一緒にたべていたつす……………ああ、変な人と一緒にいるからうつちまったよ。

「ああ、既にお昼休みに突入していたつすねえ……………しょうがないから一緒に食べるつすか？」

「弁当がない……………」

そういつてからいつの間にかその手にお弁当が握られているのに気づく。

遠慮しようとしたのだが俺も弁当を食べていないのでおなかがいっていたのは事実だったのしぶしぶと屋上へいったのだった。

「蒼疾君は思い出したつすか？」

「何を？」

「ああ、やっぱり忘れたままだったんすね？」

「？」

一つの弁当を二人でつつきながらそんな話になった。

「過去一度、いや、何度かあってるんすよ、こちらは」

「そうなのか？だがあいにく俺は小学校三年以前の記憶がないんだ

が？」

「それはまあしょうがないっす」

しよぼくれて蒼空を見ようとはしなかった。

「何か知っているのか？」

「いや、そういうわけじゃないっすよ。うちが知っていることは蒼疾君とうちはとても仲良しだった……そういうことだけっす」

そういつて再びお箸を取り出して俺に差し出す。

「おままごともこんな感じのことをしていたっすよ……あゝん」
「……あゝん」

おとなしくその申し出を受けておくことにしておこう。だって、目の前の女の子は今にも泣き出しそうな表情をしていたのだから。

「……嬉しいっすよ、またこうして一緒におままごと……いや、お昼ご飯が食べれて……」

気がつけば周りの連中はすでに退場していた。残っているのは俺たちだけだ。ナナスティアは俺をしつかりとした瞳で見据えていた。「蒼疾君、とりあえず過去の知り合いのよしみで正体を知ってしまったのは許してあげるっす……」

「そ、そりやどうも……」

どうも不安だ、こいつのほうがポロリとしゃべってしまったの难道ろつか？ 大体、名前自体でばれそうなものなのだが？

「ところで、バイトをしてみる気はないっすか？」

「バイト？」

「そう、バイトっす！ 老人や町の人から喜ばれる正義のバイトっすよ！」

「一応、内容だけ聞こう」

一冊のノートを取り出してそれを広げる。

「えっと、キャッチコピーは『あなたも平和を守りませんか？』っす。自給七百年で和氣藹々とした仕事場っす。今のところは正義の味方の助手って言うポストがあいてるっすよ」

「いや、遠慮しておく」

「ええ？とても楽しい職場っすよ？」

「なんだかとても危なそうなおいがぶんぶんしているぞ？大体、自給七百年で命を投げ出すやつがいるのだろうか？」

「それ、悪者とか絶対出てきて戦闘になるだろ？」

「この前だつて新聞で怪人が出たーとか言つてたぞ。」

「えっと、確かに戦わないといけないっすよ」

「そら、見たことか……」

「まだまだ命は惜しい。」

「そんな危険なバイトはしないっす……というわけで、じゃあな立ち上がって屋上の扉を開ける。だが、開け放たれた扉の先にもナナスティアがいた。」

「だ、大丈夫っす！謎の正義の味方ナナスティアが命にかけても守つてあげるっす！」

「謎という部分をかなり強調してそんなことを言うが正体はばれだろうに。」

「ううん、そうだな……」

「そこまで言つたとき……」

「おーっほっほー！」

「この声は！」

「？」

後ろのほうを見ると宙に一人の女性が浮いていた。セクシーな衣装を身にまとつていて赤色のバイザーみたいなものをつけている……あれ？この学校の生徒でこんなのがいなかったか？とふと思ったが気のせいだろうということにした。

「謎の悪者幹部、ナナスティア参上よ！愚民共、わたくしにひれふしなさい」

「た、大変っす！早くにげるっす！」

俺の手をとつて校舎内の階段を駆け下りようとする。

「させなくつてよ！」

「のわっ！？」

鞭状のなんだかとても現実離れた変な触手のようなそんなものに……自分で言っていてなんだかわけがわからなくなってきた……俺はつかまってあつという間に小脇に抱えられる。

小脇に抱えられることによってその豊かな胸が俺の顔に当たっているということをつけ加えておこう。役得か？

「さあ、あのお邪魔虫を呼んできなさい！」

「蒼疾君！」

ナナスティアが蒼白の顔で俺の名前を呼んだ。

「……………」

そんなことより俺は顔に当たっている胸のほうに気になってしょうがなかった。

「……蒼疾君！すぐにナナスティアをよんでくるっす！」

「町外れの工場にきなさいとつたえなさい！」

そういつて俺を小脇に抱えた悪者、ナナスフィアは空を駆け抜けたのだった。

どうでもいいことだが、どうみてもこのナナスフィア……ナナスティアの髪の毛を金髪にして眉毛を若干釣りあげ、それにじゃっかんするどい目になっているようにしか見えない。あとは右ほほに小さな傷があるということぐらいか？

こうして、俺は生れて初めて悪者に誘拐されたのだった。

番外編

蒼疾のいなくなった教室。

「あら？大津地さん、蒼疾君はどうしたの？」

「え？ちよつと用事があるっていつてかえってきてませんよ？」

「そう？」

「先生、蒼疾のために時間を割かないでください」

「そうねえ、まあ、蒼疾君なら大丈夫でしょう」

「大丈夫ですよ、蒼疾さんは一人でもなんとかできますから！」

これが信頼といえるのだろうか？それはこの会話を聞いた人によ

って変わるだろう。

第十一話：「お嬢様は好きですか？（前書き）」

蒼疾「はぁ………なんだか最近以上に増加してないか？」ナナステ
イア「なにがっすか？あ、苦労っすね？」蒼疾「そうそう。かなり
増えたんだけど？」ナナステイア「大丈夫っす！そんなときのため
にはうちがいるっすから」蒼疾「だから苦労が増えるんだろうな…
……次回、フェアリーブレイヴ第十二話『たまには番外編を！』」

第十一話：「お嬢様は好きですか？」

第十一話：

「お嬢様は好きですか？」

誘拐された俺はまっくらな工場の一室の縄につるされていた。誘拐してきたあのナナスフィアは今では姿を見せていないし少したつてから隣で音がしていた。どうにも、もう一人誰かいるらしい。

ぱつと、電気がついた。

「よお、お二人さん……居心地はどうだい？」

ストッキングをかぶった悪者が俺へとそう聞いてくる。
いまどきストッキングが

「お二人さん？」

「隣を見てみる、坊主」

「……？」

隣には俺が通っている高校の近くにあるお嬢様学校の制服を着た一人の女子生徒がつるされいた。その顔はナナスティアの眉毛をもう少し吊り上げて若干釣り目にし、右ほほに傷があった。

「そっちお譲ちゃん縄の具合はどうだい？」

「ふんっ！わたくしに話しかけないでくれる？虫唾が走るから」

こんな状況でもかなり高飛車……その少女の後ろのロッカーからは先ほどのセクシー衣装が見えていたりする。

ストッキング男は首をすくめて口を開いた。

「まあ、ナナスティアがやられるその姿をその目で見ておくんだな

……」

そういつて扉から出て行ってしまった。あえて聞こう！この部屋は締め切られていて窓すらないと！

「はあ……なんでわたくしがこんな目に……」

いや、あんたが俺を誘拐したんだろうがといたいところだったがいわないほうがいいのだろうか？

「ん？そういえばあなた……先ほどからあったことがあると思って

いましたが……もしかして天川蒼疾様？」

「え？ああ……」

あんたにさま付けで呼ばれるとは思わなかったのだが……俺はうなずいた。お互いつるされたままだったけど。ゴンゾウだったらないて喜んでいただろう。もっと縛ってくれ！そう叫んでいたに違いない。

「わたくしのこと、やっぱり忘れたままかしら？わたくし、ナナス・ファイ・リベッタと申すものです」

「……知らないな」

そういうとあからさまに落ち込んだ表情になってくらくくなった。

「……す、すまん俺小学三年のころから記憶が……」

「わかってますわ」

そういつてけなげに笑って見せた……あ、意外とかわいいんだな。

「この傷のこと当然忘れていきますわね？」

「……その傷は……」

なんともいえない頭痛が襲ってくる。それは俺に何かを見せてくれそうな予感がするものだった。

「そ、蒼疾様！大丈夫ですか！」

「ナナちゃん、血が、血が出てるよ……」

「蒼疾様もたくさん出ています！だ、誰か！誰か救急車を！」

「あの時は本当に申し訳ないことをしてしまいました」

自分の唇をぎりぎりとかみ締めてそんなことを言っていた。

「お、おい、血が出てるぞ」

「かまいませんわ、別に……それより、ひとつ面白い話をして差し上げますわ」

「どんな？」

「まあ、そうせかさないでくださいな……昔、あるところに双子がいたのですそこへ、一人の男の子が引越してきました……それか

ら双子と男の子は毎日毎日遊びました。ですが、ある日……男の子は双子の片方を守って大怪我をしてしまったのです」

懐かしそうに右ほほの傷をなでながらナナスフィアは話を続ける。「まあ、思ったより男の子の生命力は強く、命の危険はなかったのですが記憶を失ってしまったのです」

「……………」

「その双子の片方はもう一人の双子を責めました。それはもう、涙や鼻水を流してとても見ていられるようなものではありませんでしたわ……とても、汚らわしくて、惨めで、その男の子への大切だという気持ちが痛いほど伝わってきた」

俺が口を挟むことなど何もないだろうな。

「それからケンカの毎日です。まず、事故が起きたとき、その日は双子の片方と遊ぶ予定でしたがもう片方はあまり社交的な性格をしておりませんでしたわ。お部屋で絵本を読んだり、お人形さんで遊んだり……唯一の友達がその男の子だといってよろしかった。その男の子はいつも双子たちと遊んでいましたからあまり友達ができていなかったようですがわたくしたちと遊んでいても楽しそうな表情をしていましたわ」

懐かしそうに笑ってずっと目を細める。

「双子の片割れはもう一人をだまして外へと出て行ってしまった……そして、いつもの時間帯男の子はやってきましたわ……そして……」

そこまでナナスフィアがしゃべってから工場が揺れた。

「きゃっ!」

「うわっ!」

つるされた状態だったのでぐらぐらゆれてたまにナナスフィアにぶつかったりもした。どん!どん!どん!そんな音が徐々に近づいてくる。二人して音のほうに視線を向けるとコンクリートが破壊されて人の形をした影が現れる。

「天川蒼疾君!助けに来たっす……いや、きたわよ!」

そこにいたのは俺をさらっていったナナスフィアの色違いバージョンだが若干露出抑え目といううわさのヒーローナナスティアだった。

「あら、今頃正義の味方のお出まし？」

「むっ、失礼っすね……いや、失礼ね！これでも最短できたっす……きたのよ」

ナナスティア、絶対にお前の正体いずればれるぞ。

「とにかく！ここから脱出するっす！！」

そういつて自分の語尾を訂正することなく俺たちの縄をあつさりと取る。

「さあ、いくっす！！」

「ああ」

「そうですわね」

三人で出口へと向かって走り始める。順番はナナスティア、俺、ナナスフィア。そして、計ったようにゆれ始めた。突っ走りながら大声を出して叫ぶ。

「な、何で崩壊しようとしてるんだよ！？」

「たぶん、主要な柱を壊しすぎたからだと思うっす」

「それでも正義の味方！？ぜんぜんスマートじゃありませんわ！」

残りに20メートルというところでさらにゆれが増す。

「いそぐっす！もう持ちそうにないっすよ！！」

「わかってる！」

「蒼疾様急ぎますわよ！」

すでに後ろからものすごいスピードで崩壊が始まっている。まれに俺の頭上からもぱらぱらとコンクリート片が降り注いできている。残り五メートル……すでにナナスティアは外に出て手を招いている。もう、あと二メートル。そんなところで頭上からものすごい音が聞こえてきた。

「危ないですわ！」

「おわっ！？」

後ろからすごい衝撃が来て外に出ていたナスティアと一緒にな
ってこけてしまった。その状態で急いで後ろを振り返るがそこには
コンクリート片しかなかった。つまり、ナスティアは生き埋めと
なったのだ。

視界いっぱい広がるコンクリート片の向こうから声が聞こえて
くる。

「ナスティア！急いで蒼疾様を安全なところへ！」

「な、ナスティアはどうするっすか！？」

「わたくしよりも蒼疾様を！お急ぎなさい！それでもあなたは正義
の味方！？」

「わ、わかったっす！」

「お、おい！ちよつと待てよ！」

ナスティアは俺を担いでとんだ。それと同時に進行で工場が音を
立てて崩れ始め……瓦礫の山となった。

「な、ナスティアあああああああ！！！！！」

叫んだ俺の声も崩れる瓦礫の前では無力だった、無駄だった、絶
望の象徴だったといつていいだろう。

「蒼疾、なんだか元気がないようだけど？」

「そうなんですよ、本当に大丈夫ですか？」

「そつやお兄ちゃん、大丈夫？」

「……大丈夫だ」

一日がたち、水曜日。朝からやっていたあの工場の瓦礫の下はい
まだに人探しを行っているところだろう。

登校してきてそのまま机に突っ伏す。何か思い出せそうだったが、
思い出せない。

「はい、皆さんにいきなりですが転校生がやってきたというお知
らせです！」

先生がそんなことを言いながら入ってくる。

「蒼疾さん、転校生ですって」

「……ん？ああ……」

ぼーっとしながらそれを聞く。

「じゃ、入ってきてください」

「失礼しますわ」

「！？」

俺は目を疑った。そこにいたのは……

第十二話：「たまには番外編をしよう（前書き）」

蒼疾「なんと、今回は番外編！拍手」ナナスフィア「それはすごいですわね」ところで、次回からはきちんと話が始まるそうじゃないですか？」蒼疾「ああ、そうだ。大体主要メンバーは出したらしいから」ナナスフィア「へえ、知りませんでしたわ……………これでライバルが増えることはないんですね？」蒼疾「まあ、そういうことだろうなあ。次回予告、よろしく」ナナスフィア「次回、フェアリーブレイヴ第十三話！『蒼い弓編第一話：蒼』ですわ！」蒼疾「評価……………というより感想おねがいします！」

第十二話：「たまには番外編をしよう」

第十二話：

「番外編をたまにはやろう」

調理上の注意に当たって：この料理を作ろう、または食そうと思うあなたへ……一切の責任は負うことができませんので自己責任でお願いしたいと思います。

七海

「さあ、今日も始めました……『天川蒼疾のぶつつけ！クッキング』。蒼疾さん、お願いしますね？」

蒼疾

「あのなあ、そんなに料理なんてできないぞ…今日は『豚の味噌煮』を作りたいと思います」

奈々枝

「その割にはやる気満々ね、蒼疾」

蒼疾

「奈々枝、助手は二人も要らないぞ」

菜々子

「そつだよ、七海おにいちやんに奈々枝おねちゃん！」

蒼疾

「菜々子先輩いれて三人じゃねえか！」

ナナスティア

「ここにもいるっす！四人っすよ！」

蒼疾

「な、ナナスティアまで……」

ナナスフィア

「わたくしもいましてよ、おーっほっほ！」

蒼疾

「もう何もコメントする気にもならん……えゝまず、深めのフライ

パンに200ccの水とまあ、適量（人それぞれ）の味噌を入れて火をつけます。火は中火で煮立ってきたらお酒大さじ三杯としょうゆ小さじ一杯をいれ……」

七海

「あ、私甘いものが好きなので佐藤入れますね！」

佐藤

「佐藤、いきまーす！」

蒼疾

「そっちの佐藤？というか、誰だよ……ま、まあ、気を取り直してフライパンの中身がどろどろになる前に安物でもいいので豚肉六百グラムぐらい放り込みます」

菜々子

「じゃ、わたしはチョコレートを入れるね」

奈々枝

「えっと、じゃあわたしは蒼疾に食べてもらうためにあ、愛情を……」

……

ナナスティア

「そうはさせないっす！うちが先にいれるっす！」

ナナスフィア

「あなたたちの愛情なんて哀情にちがいありませんわ！お父様の愛嬢であるわたくしが入れるものこそが本物の愛情であるに決まっています！」

蒼疾

「えええい！邪魔！えっと、それからある程度煮立ってきて味もついてきたなあとおもったらここでみりんを加えます。量としては小さじ二杯程度ですね」

奈々枝

「こ、今度こそ愛情を……」

ナナスティア

「させないっす！」

菜々子（裏）

「今のうちにわたしが愛情いれるんだ！」

ナナスフィア

「まるほっぺにはさせませんわ！」

七海

「じゃ、私が当然の権利で……」

奈々枝&菜々子&ナナスティア&ナナスフィア

「」「」「させない」「」

七海

「きゃあああああ！！！！変態！脱がされます！！蒼疾さん！！助けてください！」

蒼疾

「ええい！じゃま！！！！！！というかお前らうるさすぎだろ！！！」

奈々枝

「た、大変！焦げてるわ！」

蒼疾

「ほら見る！底が焦げてる！どうしてくれるんだ！！ちょっと縛ってやる！」

菜々子

「あ、だ、だめだよ蒼疾お兄ちゃん……みんなが見てるから……」

蒼疾

「す、すみません」

ナナスティア

「何してるっすか！蒼疾君！おしおきっす！変身するっす！」

蒼疾

「何！？変身しただと！？一般人に勝ちめねえだろ！三十六計逃げるにしかず！」

ナナスフィア

「逃がさなくってよ！変身！」

蒼疾

「挟み撃ち！？だがまだ甘いわぁ！！さらば！」

七海

「逃がしませんよ、蒼疾さん！」

蒼疾

「や、やられる！？だが、ここでやられるわけには……ぐはっ！」

佐藤

「完成したら深めの皿にご飯をついでその上からかければ完成だぜ、ベイベ♪おっと、気をつけないといけないのは佐藤の投入時期だぜ？じゃ、アディオス！」

第十三話 蒼い弓編第一話：「蒼（前書き）」

蒼疾「最近疑問なんだけどさ……………」七海「なんですか？あ、思えば再びここに来ることが出来たんですね……………」感激です「蒼疾「この小説って面白いと思うか？」七海「それは読者の方が決めるものですよ、蒼疾さん」蒼疾「そうだよなあ……………」七海「せっかく新しいお話になったんですからがんばりましょう！」蒼疾「よし！がんばるか！次回、フェアリーブレイヴ第十四話 蒼い弓編第二話『蒼い』！お楽しみに！」七海「感想、お待ちしております」

第十三話 蒼い弓編第一話：「蒼

第十三話 蒼い弓編第一話

「蒼」

学校にやってきてすぐ、ゴンゾウが俺のほうへと歩いてきていた。
「やあ、天川」

こいつがこんな風に苗字で呼んでくるときはたいていいいことがない。

「どうした？」

つつい声をひそめてしまうのは悲しい癖なのだろう。まあ、ほかの連中からはそうそう怪しまれたりはしないのだが。

「どうしたんですか、お二人ともなんだか深刻そうな顔をして」

「ああ、七海か……」

「大津地さん、ちょっと悪いけどこれを借りていくよ」

「これっていうなよ」

「ええ、良いですよけど、ちょっとはいは出さないでくださいね」

「もちろん。僕は男にはまったく興味を持たないんだ……ああ、そうだ、ちなみに僕の趣味を覚えておくね？僕の趣味は君や天川の知り合いの三塚菜々子先輩だね。あの丸ほっぺなんて最高だし、つるぺただから。ああ、それとツンデレもいけるくちだよ。あ、これはテストに出やすいから注意してね？」

「は、はあ……よくわかりませんが心に留めておきますね」

「頼んだよ、大津地さん」

かなり困った顔をしている七海のためにゴンゾウの襟首を引っ張る。

「行くぞ、こら」

「おっと、そうだね……じゃ、次は天川の好きなものを教えてあげるね」

「そ、それは興味があります！今度じゃなくて今教えてください！」

ゴンゾウの胸元をつかんでそのまま上へと上げる。七海、お前つて意外と力があるのな。

「ちょ、ちよつと苦しい……」

「一歩先へ！蒼疾さんにくつつく悪い虫よりも先へ進みたいんです！この前なんて大きな目のＴシャツ着て蒼疾さんのお布団の中にいたんですけど普通にスルーされちゃいました！なぜですか！」

あれ？そんなことあったか？記憶を思い返してみるのがそんなことは一度もなかったと思われる。

「あ、ああ……それはたぶんもうちよつと君が全面的に押しを強くすればいいと思うよ」

「ゴンゾウ、それ以上何かしゃべったらシャツとパンツが全校生徒の前にさらされると思え」

「……えつと、つまり今のが蒼疾なりのヒント。蒼疾の大きな目のＴシャツ一枚だけをきて下には何も着るなってサインだから」

「わかりました！」

なんだかとてもつやつやした調子になってゴンゾウの胸ぐらを放す。ゴンゾウ、今ここでめえの運命は決定したぞ。問答無用で地獄いきだな。

「へえ、蒼疾様はそのようなご趣味をお持ちなのね？」

「な、ナナスフィア……絶対違うだろ、それは」

いつの間にナナスフィアが俺の机の上に尻を乗せていた。

「ナナスフィア、俺の机にケツを乗せるな」

「まあ、お下品ですわよ、蒼疾様」

「じゃ、臀部を乗せるな」

「それなら、今夜蒼疾様の上に臀部を乗せてよろしいかしら？」

俺のあごをなでるようにする。すると、俺とナナスフィアの間七海が入ってくる。

「ちよつと待ってください、この前引越してきたナナスフィアさんが蒼疾さんとお知り合いなんですか？」

「え？ああ、なんだか昔の俺と知り合いだった」

「そうですね、そちらさんこそどういったお知り合いで？所詮は単なる同級生。たまたま隣の席だったということでしょう？まあ、わたくしはお隣の上に過去にお風呂に入ったこともあるいわば『同じ穴のムジナ』なのですね」

そういつて高らかに笑う。クラスメートたちがなんだなんだとやってくる。おいおい、そろそろ抜け出さないと時間がないのにな……

「お、お風呂……け、けど私と蒼疾さんは結婚する約束をしています！」

おおっ！という声が周りから上がってくる。俺の顔は温度が上がる。ゴンゾウは首を上下に動かして修羅場万歳なんていつていやがる。

「あーら、その程度だったらわたくしだってしてますわ、まだキスしてませんけどね」

俺たちのほうがあいつらより進んでるよな、というおぼかなカツブルの声が聞こえてくるがそんな連中は屋上にいつちまえ。これは見せものじゃねえぞ。

「へえ、キスしてないのに婚約者だって言っているんですか？」

ここで七海が増徴。悔しそうにしてナナスフィアが顔を真っ赤にする。

「そ、それなら大津地さんはなにかしましたの？」

その質問に七海は自信満々にうなずいてクラス中はおおっ！という声が響き渡る。え？あれ？そんなんだか大人の階段上がるようなことしたっけ？ゴンゾウ、お幸せにとかいつて俺の肩をたたくな「ええ過去に、か、か、間接キスをしたことがありますから！蒼疾さんが口をつけたストローでオレンジジュース飲んじやいましたから。ど、どうですか！」

「……」

ここまでひっぱといてその程度か？とかつぶやくんじゃねえよ。羞恥にほほを染める七海なんてめったに見ることねえな。珍しい珍しい。

「や、やりますわね……そ、それならわたくしだって蒼疾さんになめられたことがありますわ!」

「……はあ!?!」

クラス中が俺のほうを見てくるが俺は首を振る。おい、ゴンゾウ! そのプレイはどうかと思うなんていうんじゃねえよ。やってないから、まだ。

「血が流れていたので応急処置でなめてくださったのです。ぞくぞくきましたわ」

「や、やりますね……」

なんだ、そうだったのかあとかそういう声が聞こえてくる。

一体全体、ここはどこだ? 高校だろ? なんだ、ここは? 小学校じやねえだろ。内容が小学生だ。

「おい、ゴンゾウさっさとここ出るぞ」

「え? なんだかこれからもつとすぐそんな気がするんだけど?」

「だから出て行くんだよ。俺の身がもたん」

「そうかい? 残念だなあ……」

そういつてポケットの中に手を入れて何かのスイッチを切る。きつと、ボイスレコーダーかなにかを忍ばせていたのだろう……あとで何かしら悪用するに違いないから後で壊しておくことにしよう。

俺とゴンゾウは白熱してきた二人の間をぬって外に出たのだった。

屋上、まだ十分ほど時間はあるので何とか教室に戻る時間はあるだろう。

「で、どうしたんだよ?」

「また、偽者の蒼い弓が出てきたよ」

「……またかよ」

俺はげんなりとした調子でため息をついた。そういえば最近の新聞でスリがどうかそつという話をよく聞いていたがまさかまたそつだったとは……

「模倣犯かよ、感心しないな」

「だろう？だからさ、また捕まえにいったらどうだい、蒼い弓さん」
「……気が進まん」

「おいおい、このままじゃ冤罪でつかまるかもよ？」
同でもよさげにゴンゾウは蒼空を眺める。俺も真似て蒼空を眺めてみることにした。

「そりゃそうだがよ、今度こそ下手したら俺らが捕まるぜ？大体、俺はもうこの手を使わないって決めてるんだ」

「それは知ってる……」

そういつてゴンゾウは視線を俺に向ける。

「でもね、この前だってその手、つかったろ？」

おばあさんの顔が頭に浮かぶ。それと、奈々枝の顔。

「まあ、確かに」

「それにだ、ほかのスリが何かしらの情報をつかんでいるかもしれないから接触してみるのも良いんじゃないか？偽蒼い弓が味を占める前にどうにかしないと」

「……そうだな」

放課後、知り合いに行くという約束をして俺たちは教室に戻ったのだが……

「わ、私はどんなことでも蒼疾さんのためならできます！蒼疾さんが望むのならここでその、こ、ここここの名前とか決めてもいいと思ってますから！つ、作っちゃいますから」

何をだ、何を作る気だよ七海。

「わ、わたくしだって！ここでそのごによごによを……初めてが教室でも……」

ごによごによがすぐく気になる。

「……平和だねえ、蒼疾」

「そうだな」

俺はため息をついて渦中のそれこそ真ん中の俺の机に座ったのだった。

第十四話 蒼い弓編第二話：「蒼い（前書き）」

蒼疾「……………次回フェアリーブレイヴ第44444話！」「蒼空を穿つもの」お楽しみに」奈々枝「ちよつとどうしたのよ？元氣ないわよ？」蒼疾「いいんだ、どうせ俺なんて……………」奈々枝「まったく……………」次回、フェアリーブレイヴ第十五話 蒼い弓編第三話「蒼い弓」よろしくね！」「蒼疾「どうせ俺なんて……………」

第十四話 蒼い弓編第二話：「蒼い

第十四話 蒼い弓編第二話：

「蒼い」

本日木曜日……一時間目の休み時間、二時間目の休み時間、三時間目の休み時間、四時間目の休み時間、昼休み、五時間目の休み時間、そして掃除の時間……その間中、七海とナナスフィアはお互いに言い合いを続けていた。

「はあ……はあ……」

「ぜえ……ぜえ……」

よくもまあ、そんなに続くものだ。すでに途中から観客たちも飽きてきたのか二人の周りに人がいなくなっていた。

そして、放課後……掃除の時間もずつと言い合いをしていたんかするほど仲がいい二人組みは仲よさそうに職員室に連行されていた。合掌だけはしておいてやろう。

「さ、行くか」

「ああ、そうだね」

適当な理由をつけて逃げる時間が割けてよかった。まあ、とにかくにも俺がこれから行くべき場所はこの町の北東に位置している少し大きめの駅だ。その駅員に用事がある。携帯で七海、奈々枝、菜々子先輩に少し遅くなるというメールを送っておく。こうしておけば心配をして探しにくるなんてことはないだろうからな。

今の時間帯はまだ人が少ないのだが、それでも学生でこった返していた。比較的有名なのかウチの高校には遠距離からやってくる人たちも多い。無論、駅員も券売機あたりをうろろしていたりする。

「おやおや、これは蒼い……」

「こほん」

「おっと、失礼……天川にえっと……アホ葉だっけ？」

「違う、僕の名前は青葉ゴンゾウ。幼女に光と希望を見出しているこの世界の救世主」

「で、天川今日はどうしたんだ？」

「さらにゴンゾウを無視してその駅員は俺たちに尋ねてくる。この駅員は実はその昔ものすごく手癖の悪いスリだった。まあ、スリが手癖が悪いのは当然だが、それからいろいろ俺たちとあってからスリをやめて今ではスリを見抜くべく駅員になっていた。

「実は最近こちら辺でよくうわさになっている偽者の蒼い弓を探しているんですよ」

「ゴンゾウが立ち直って俺の代わりにしゃべる。しばしうなずいてから駅員はいった。

「なるほど、たぶんお探しの偽者はこの前の女だな」

「女？どんな？」

「駅員は少し待てと行って駅員室へともどって数枚の写真をもつてくる。それを渡されて俺とゴンゾウは覗き込んだ。

「なるほど、一応見た目は女だね」

「一応ってどういうことだよ？」

「そのまんま、実は股の下に息子がいますとかそういうオチかもよ？」

「いいや、そいつは女だ。俺のセンサーが感じたからな」

「そいつって親指を立てる俺の先輩……やめてください、知能がゴンゾウと同じくらいに思われますから。」

「とにかく、こいつは女。しかもあのお嬢様学校だな……白昼堂々犯罪行為に走るなんて何があつたのかねえ？」

「ケケケ……と笑って先輩は続ける。

「それで、今回はどういった手で捕まえるんだ？この前現場を押さえたと思うんだけどどこにも持ってなかったぜ？しかも、自信満々に『蒼い弓はこの程度で捕まえられませんよ。それには証拠をきちんとつかんでからいってくださいねえ』って言われちゃった。おれもやきがまわっちまったもんだな……引退するかな」

そういつて葉巻に火をつける。

「……先輩はもう引退した身でしょう？それに、その葉巻また誰かからすったんでしょ？」

「いいじゃんか、別に。禁煙中のおっさんからいただいたんだよ。」

つまり、禁煙のお手伝いさ」

まあ、それはほうっておくでしょう……それよりも……

「先輩が証拠をおさえられなかったということはこれまでの偽者よりも腕はたしかですね？」

「そうだなあ……そうなるな」

これまでは俺らがわざとおとりとなつてその瞬間を先輩が指摘してから蒼い弓を捕まえてきた。しかし、連携をとる上で必要な駅員が見られているということは相手も警戒するに違いない……つまり、ここでするべきことは……

「天川、どうやら相手はとてもプライドが高いようだね？」

「そのようだ……先輩、その偽者が現れる時間帯ってどのくらいですか？」

「ええつと……朝は七時半ぐらいで夕方は五時半過ぎ」

すでに時刻は六時を指している。どうやらもう今日はそいつをみることはできなさそうだな。

「今日はもう帰ります。被害のほうを食い止めるようがんばってもらえますか？」

「おいおい、駅員が駅の平和を守れなくてどうするんだよ？男が盗んでいいのは女の心だけ、財産は盗んじやだめなんだぜ？まかせとけて」

それじゃあなと先輩はそういつて俺たちの前から姿を消したのだ。先輩、相手は女ですよ。

券を買っている女子高生の尻を眺めながらゴンゾウは俺に尋ねる。

「で、作戦は決まったのかい？」

俺は先ほどからひっきりなしにかかってくる七海、奈々枝、菜々子先輩にナナスティア、ナナスフィアからの着信を無視しながら（

前者三人には番号を教えていたが後ろ二人にはまだ番号を教えていないはずだった。考える。まあ、これだけざわわしていれば他人の邪魔にはならないだろう。

「ああ、プライド高いなら自分よりすごいやつがいるってことであきらめてくれるだろうよ」

「けどさ、逆にそれを認めなくて犯行が悪化するかもよ?」

「そのときは……」

警察に連絡するしかねえだろうよ。そんな言葉を言うことなく、俺は黙って回れ右をして家を目指したのだった。もちろん、誰の着信にも出ることなく。

「ねえ、蒼疾おにいちゃん……」

「なんですか、菜々子先輩」

「また蒼い弓の事件が出てるよ」

地方記事のところを俺に見せてくる菜々子先輩。リビングのほうでは七海と奈々枝がぶよ。よをしていた。両者とも一歩も譲らず画面の三割ほどで粘っている。三十分ほど前からはじめたばかりなのだが意外と長持ちするもんだなあ……いまだ一戦目だ。しかもスーフ。三版である。

「今回の被害者はお嬢様学校の生徒か……ありや、一連の事件の被害者はすべて学生……?」

一体全体、これに何か理由があるのだろうか?

「あれ?蒼疾お兄ちゃんどうかしたのか?」

「奈々子さん、そっちの声でおにいちゃんはやめてください」

「すまん、それよりこの事件はまるで誰かを誘っているようだな……」

……

「どういうことです?」

「わからん、なんとなく」

「とにかく、奈々子さんも気をつけてくださいよ」

「うん!蒼疾お兄ちゃんも菜々子のこと心配してくれるんだあ!や

さしい！だから好き！」

そんな大声で言う……

「な、何をしてるんですか！」

「ちよつと蒼疾！どういうことよ！」

ほら、二人きちゃった……

「お、おい、二人ともぶよがたまってるぞ」

「怒りがたまってますよ、蒼疾さん！」

「お邪魔虫を送り込んであげようかしら？」

画面には両者とも引き分けてきな何かが映し出されていた。

「おいおい、引き分けになったぞ」

「そんな人ごと言ってる場合じゃないよ、蒼疾お兄ちゃん……あれ、誰が蒼疾お兄ちゃんを一日で落とせるかって言う挑戦権をかけてるんだから」

「挑戦権？」

「あ、その件についてはノーコメントですから。ほら、菜々子先輩行きましょう」

「そうそう、ばれたら意味ないから」

「？」

よくわからんが今の俺はさつさと寝たほうがいいということだろうな。

ちなみにその晩……

「お邪魔するっす」

「ぐがあ……」

ナナスティアがやってきたそうで、いろいろと俺にいたずらをしていたそうだが爆睡していた俺にはどれも通用しなかったらしい。

「こ、ここまでやって無視するとは……さすがっす、蒼疾君！こ、こうなったら添い寝するっす！」

余談だが朝、ものすごくひどい目にあった。

第十五話 蒼い弓編第三話：「蒼い弓（前書き）」

菜々子「えつとねえ、蒼疾おにいちゃんの家出しちゃいました♪」
菜々子（裏）「というわけでここはきょうからわたし達の空間♪」
菜々子「でもね、特に話すことなんてないんだ」菜々子（裏）「そうねえ、確かに何もないわ」菜々子「だからさ、早く次回予告済ませようよ？」菜々子（裏）「よし、そうしよう！次回、フェアリーブレイヴ第十五話蒼い弓編第三話：『蒼い弓の』！」菜々子「ちゃんと見てね！」

第十五話 蒼い弓編第三話：「蒼い弓」

第十五話 蒼い弓編第三話

「蒼い弓」

「ねみい」

人の流れに逆らって俺は動かない。向かってくる学生たちはかな
り、迷惑そうに俺たち二人をよけて歩いていった。

「天川、僕は非常に爽快だ……なぜなら僕のスペースを彼らは荒ら
そうとしないからね」

「まあ、逆にとったら俺ら、避けられてるってことだからな。

俺の頭には馬の頭、ゴンゾウの頭は今ではプレ。ターとなってい
るからだ。

「それで、ゴンゾウ……見つけたか？そろそろ先輩の言っていたじ
かんだぞ」

「今探してる……えっと……一時の方向、それらしきめがね少女発
見」

俺もそちらへと視線を向ける。いた、写真に写っていたぐるぐる
めがねの少女を発見した。

「じゃ、どうするか観察させてもらうか……」

「おや、後手にまわるのかい？」

「ま、隠居している身だから」

「余裕だね」

そんなことを話しながら待っているとまっすぐこちらへと歩いて
くる。そいつのめがねの奥で瞳が光るのが見えた。どうやらターゲ
ッティングされたらしい……俺が。

「来るぞ、ゴンゾウ……とられて大切なものはきちんと隠しとけよ」

「大丈夫、とられて大変なものは玉金ぐらいだから」

おいおい、もがれて女にされるかもしれねえぜ？

もう何もしゃべらないまま俺はそいつがやってくるのを待ってい

た。

そいつが俺の隣を歩く途中、きつと常人にはわからないのだろうが……俺の目にはしっかりと俺の懐へそいつが手を滑らせようとしたのが見えていた……というわけで俺はそれを防ぐ。あせることなくそいつはすばやく手を引いてそのまま俺の隣を通過していった。急いで後ろを振り返ってみたがどうやら人ごみに消えるのもお得意らしい。

「ゴンゾウ、女になったか？」

「いや、パンツを代わりに盗られていってしまったよ……スースーする」

そうかそうか、あれからすぐに俺の後ろにいたゴンゾウのパンツをすっていったか……なるほど、こいつは強敵だな。

「まあ、安心しろ。替えがあるから」

「え？とられるってわかってたの？」

「ああ、だからほら、ここにブラジャーとパンティーがあるぞ。さつきすった」

「さすが親友」

そういつて俺はゴンゾウに黒のレース下着、上下を渡す。そして、叫んだ。

「大変だ！ここに変態がいるぞ」

「ちょ、ちょっと！なんてことを言ってくれているんだよ！」

「この前七海に余計なことといった罰だ。じゃあな」

さつさと馬の頭をぬいで人並みに紛れ込む。

「ご、誤解です！僕は変態なんかじゃ……」

「こんなブレ。ターをかぶったやつが怪しくないわけないだろ！」

「せめて下着だけでもこの手に……うわ！ない！」

後ろからはそんなゴンゾウの声が聞こえてきていた。ふふ、残念だったな……黒のレース下着なら俺のかばんの中にすでにしまっているぜ」

「思わぬ収穫を得ちゃったな」

久しぶりになんだかすかつとした気持ちで登校することになったのだった。

遅刻ぎりぎりでは俺は教室へとやってきた。かばんを開けるがもちろんな下着は教科書の一番下に隠されている。

「あ、やっときましたか蒼疾さん」

「蒼疾様、今日はどこに行っていたのですか？」

若干雲行きが怪しそうな雰囲気立ち上っていた。

「ええと、どうかしたのか？」

「蒼疾さんからなんだか女性のにおいがするんですよ」

「ええ、そうなのですか……七海さん、奈々枝さんにあのまるほつぺそして姉さまやわたくしのにおいのそれとは違うんだかいかがわしいにおいです」

「き、気のせいじゃないか？」

俺はポーカーフェイスが大好きだ。大好きだからといってそれがうまいかといわれたら否、と答えてしまうが……いや、そりゃ、昔は得意だったさ……けどな、ちよつとこういった状況じゃ苦手なんだ。「かばんからも怪しいにおいが……」

ちよ、ちよつと待った！ここでかばんを調べられたら黒レースの下着が出てきてあれで、あれな、ちよつとこまった状況が完成しまう！

「あ、天川あ！」

どんという音が聞こえてきて怒ったゴンゾウが現れる。た、助かった！

「ゴンゾウ、上か下かどっちか選べ」

真摯な瞳でアイコンタクト。憤怒していたゴンゾウだったがすぐにうなずいた。

「……下」

「相変わらず変態だな」

「ボインに興味はないからね」

「ボイン……さてはさっきの上としたって言うのはブラジャーとかのお話ですね？」

ぐわ、なぜわかったんだ？

「必然的にこのかばんの中に入っていて、怪しいにおいの発生源は……下着ですわね？」

す、鋭すぎる………これが一生かかっても会得できない女の感というやつだろうか？

「や、やだなあ………なんのことかなあ？ゴンゾウ、パス！」
「了解！」

かばんを無造作に投げ、それはゴンゾウにわたる。

「皆さん！蒼疾さんのかばんを取ってください！怪しいです！」

「急いでください！あの変態浮気大魔神えろエロ蒼疾様からかばんを手に入れるのです！」

「……わかった！」

「てめえら！何でもこういうときだけ団結するんだよ！」

ゴンゾウにクラスメートすべてが襲い掛かる。だが、完全に沈む前にゴンゾウもどこにかばんをほうりなげ……

「おっと……こあら！かばんをおもちゃにしてはいけませんよ！」

「せ、先生！」

すでに朝のHRの時間になったためか、先生がやってきていてかばんを手を持っていた。七海の目が妖しく光った。

「先生！天川さんが学校に持ってきてはいけないものを持っています！」

「ええ？そうなの天川君？」

「も、もってきていません」

「それなら、今ここで中を確認してもよろしくて？」

鬼の首を取ったかのようにしてナナスフィアがたずねてくる。俺は覚悟を決めていた。

「ど、どうぞ」

「ああ！僕の夢が！希望が！世界の破滅に！もがつ！」

うるさいゴンゾウの口を俺はふさぐ。そして、耳打ち。

「安心しろ、すでに俺の懷にうつってるから」

「おおっ！さすが本物の蒼い弓！」

どうせ中に入っているのは……教科書だけだろ？

だが、現実は違った。

「蒼疾君、学校には馬の顔を持ってきてはいけませんよ！」

「し、しまった！」

「後で職員室に来てくださいね？わかりました？」

「……はい」

ま、まあ下着に比べてまだましだったかな？俺はため息をついて席に着いたのだった。

番外編

「さ、さすが蒼い弓……なかなかやりますねえ」

場所は女子トイレ……ぐるぐるめがねをかけた一人の少女が朱にほほを染めながらスカートをめくる。

「とてもすーすーしてえ……こ、これほどの屈辱はありませんっ！」

そして、右手を突き上げる。

「第二ラウンドはぁ！絶対に負けませんからねえ！」

引き裂かれたゴンゾウのパンツが流されていったのだった。

第十六話 蒼い弓編第四話：「蒼い弓の（前書き）」

蒼疾「…………ふう、久しぶりに戻ってきたけど前回の前書きっておかしな次回予告してたよな…………」ナスティア「そうっすね、けど誰も気づいてないようっす」蒼疾「それなら別にいいか…………どうせ、この次回予告は当てにならないからなあ」ナスティア「じゃ、恒例の次回予告をするっす！次回、フェアリーブレイヴ第…………十七話？蒼い弓編第五話ぐらい、『蒼い弓の実』！」蒼疾「たどたどしいなおい！」

第十六話 蒼い弓編第四話：「蒼い弓の

第十六話 蒼い弓編第四話：

「蒼い弓の」

昼休み、金曜日だったために菜々子先輩と屋上にやってきていた。いつものラヴ・オーラが漂っている。

「ねえ、蒼疾お兄ちゃん」

「何ですか？もしかして料理がおいしくなかったとか？」

俺が作った料理を食べながら首を振る。

「ううん、全部おいしいよ」

「それはよかった」蒼疾、とってもうれしい」

「……」

「きゃぴ」

「……蒼疾、それは人としてやってはいけない領域だぞ、うん」

「……冗談ですよ、菜々子さん」

この人はしょっちゅう変わるなあとかそんなことをもういうことなく慣れてしまった。

「えっとね、なんだか最近蒼疾お兄ちゃん思いつめてるような表情してるかなあと思ってるね」

「思いつめた表情？」

俺は首をかしげる。そんな表情をしていただろうか？

「うん、昨日だって新聞を見ていたときかなり怖い表情だったよ」

菜々子先輩がそういうのならそうだろう。菜々子さんのほうが言うなら怪しいがこっちの菜々子先輩ならばうそはつかないはずだ。

「小さいころのわたしにそっくりだったからさ」

「そうなんですか？」

「うん、毎日毎日鏡を見てこのもう一人の人格について悩んだ」
「やっぱり、悩むんだろ……俺が口を開いても何もできないのはわかってる。」

「けどね、それもわたしなんだって思うことにしたんだ」
「？」

「たとえば、どんな暗い自分が、認めたくない自分がいたとしても、それは自分自身。だって、この世界には認めたくないものだってたくさんあるんだから」

「……………じゃ、じゃあ今の菜々子先輩にも認めたくない自分が……………」
「？」

自信満々に彼女は頷く。

「今だって逃げてるかもしれない……………認めないってことはわかってるけどそれが相手を認めてるってことかな？えへへわからないよね？」

「……………殆どわかりません」

「ごめんね、よく意味がわからないことをいってさ」

そういつて菜々子先輩は立ち上がる。

「……………このもうひとりの自分、それを誰かと一緒にその存在意義を見つけるのがわたしの夢かな……………」

そういつて頬を朱に染めて俺に手を差し伸べた。

「……………だからさ、今日だけわたしを選んで？まだ蒼疾お兄ちゃんに戻る道を歩いているからさ」

「……………ええ」

俺はその手をつかんで立ち上がる。きつと、今視線の先にある蒼空は同じ蒼空が拡がっているのだろう。

「今、蒼疾おにいちちゃんが考えてることなんてわたしにはわからない……………困ったときは相談してね？だって、わたし……………」

「一応年上だから」

「は……………これからよろしくお願いしますよ、お二人さん」

「うん」

気のせいだろうか、それとも目が悪くなつたのか……………俺の目にはぶれて映るもうひとりの菜々子先輩の姿が……………見えていた。
「じゃ、そろそろ戻ろうか？」

「今度こそ、このわたしのナイスバディーな姿をみせてやるから」
「……………いえ、ナイスバディーは遠慮しておきますよ」
「今日に映っているその姿は間違いなくお子様体型だから……………」
「菜々子さんのプライドを守ってあげるとしたら若干胸が膨らんで身長が高くなっただくらいだ。」

教室に戻ってきた俺にゴンゾウが近づいてきていた。

「天川、お前の机の中にこれが入ってたぞ」

「……………!？」

それには『蒼い弓様へ』とかかれた封筒だった。

「おいおい、あいつはこの学校の制服着てなかっただろ？」

「そうなんだよね……………一体全体、これはどういうことなんだろうね？」

全然わからないといった調子でゴンゾウは顎に手を這わせる。

「ゴンゾウ、何か知ってたらあの下着全部お前にくれてやるぞ」

「実はあの女の子が校門の前にいてそれからこの手紙を受け取ってばれないようにそれとなく天川に渡してくれれば報酬としてあの女学校の制服をもらえるんだ」

なるほど、そんなことがあったのか…………

「それで、お前は寝返っていいのか？」

「もちろん！友人をだますことなんて僕にはできない」

途中結構裏切り方面に動いてたけどな。

面倒なのでそれ以上言うことなく俺は手紙を開ける。

「中身、見たか？」

「いいや、それがラブレターなら中身を改ざんするけどそれじゃないとチェリーセンサーが感じ取ったから」

「すごいセンサーだな、それは。」

「それで、中身はどういったものだ？」

「えっと……………あの場所で、今日の夕方、決闘を望みます」だってさ」

「だってさつて……すごいね、本当に決闘するつもりかい？」

そりやするしかないだろ、ああ、でも憲法が何かで決闘すると罰金だという言葉を聞いた気がするな……

「ま、きたくなければ来なくていいから……」

「それで、君の大切な友人たちにはこのことを教えるのかい？」

ふと、七海、奈々枝、菜々子先輩にナナスティア、ナナスフィアがそれぞれ笑いかけてきたのだがもちろん俺は首を振った。

「あのな、お前は友人がものすごいすりだったとか自慢になるかうれしいか？」

「そうだなあ……まあ、蒼疾ならいいんじゃないか？」

「はっ、意味がわからん」

首をすくめて俺はさっさと教室へともどったのだった。さて、用意しておかないといけないものは……なんだろうか？ああ、勇気と根性、やる気にちよつとしたお茶目な気持ちだろうな。

夕焼けが眠ろうとしている時間帯、俺らを避けて学生たちが自宅に帰るために改札口を通過していく。

「暇だな」

「そうだね」

そんな中俺とゴンゾウはずつとその光景を眺めていた。まだあのお嬢様学校の制服は見えてこない。

「そういえば……」

「そういえば？」

「思うに何でお嬢様学校の連中がこんな駅を使うんだろうな？」

ナナスフィアだっていまだに車でお迎えとかなのだ。まあ、ナナスティアのほうは普通に俺たちと歩いて帰ったりしているのだが。

「そうだね、確かに言われてみれば……あの学校の制服はあの娘以外見たことないと思う」

「そうだよなあ……」

つまり、あいつはしょっぱなから狙っていたということか？うう

む、なんて計画的？な犯罪なんだ。

「蒼疾」

「……ああ」

遠くからかばんを背負った一人の女子生徒がやってくる。高貴なオーラをまとって俺たちの学園生徒たちからは完全に浮いているような存在だった。

夕焼けが、さらに傾いた。

第十七話 蒼い弓編第五話：「蒼い弓の実（前書き）」

蒼疾「Please gibe me remark and evaluation！」ナスフィア「まあ、蒼疾様……急に英語なんてどうしたんですの？」蒼疾「Never give up！」ナスフィア「困りましたわ……蒼疾様がおかしくなられてしまつて……まあ、放っておきましょう……次回、フェアリーブレイヴ第十八話蒼い弓編最終話『蒼い弓の実力』。評価、感想お願いしますわ」蒼疾「A beam of hope！」

第十七話 蒼い弓編第五話：「蒼い弓の実」

第十七話 蒼い弓編第五話：

「蒼い弓の実」

一歩一歩あるくたびに自信から来る余裕を高貴なオーラに変えて俺に果たし状を突きつけてきたそいつはこっちへと向かってきている。すでにその手には挑発のためか俺の学園生徒たちの髪留め、生徒手帳、マジカル少女ゆつこたん限定フィギュア、大胆な下着ふんどしなどを握っていた。

「やるねえ、天川、何かしなくていいのかい？」

「ああ、任せろ」

そいつって俺は朝すつた下着をちらつかせた。

「……」

そいつの目が細くなり、手に持っていたものをすべてかばんの中にしまつてこちらへさらに近づいてきている。

「……」

約七メートルほどのところですよと懷から生徒手帳を見せて戻す。俺もそれを真似て自分の生徒手帳を懷へとしまった。これを盗れば勝敗が決まる。

「ちえ、今回は生徒手帳か……下着がよかったな」

「ゴンゾウ、俺の下着がみたいのかよ、それは趣味が悪いぜ？」

「あのねえ、僕は君が負けるなんておもってないよ」

「そうかい」

がんばってくれよとそれだけ残してゴンゾウは学生たちに流されないように壁のほうへと歩いていった。壁に背を預けるやつの姿を数人の生徒がみたのだがすぐに視線を改札口へ……彼らはこれまでとなんら変わりのない生活を送っているつもりなのだろうが、俺とあいつが立ち止まっているという点では確実に違う生活を送っている。

「……」
「……」

両者無言のまま近づいていき、静かな決闘は始まった。勝負は一瞬でつくものだ。まずはやつから先手をつってくる。右手で懷に滑り込まれそうになったのを左手で阻止し、そのまま右手を懷に入れると見せかけてフェイント。

「？」

攻めてくると思っていたためか、あいての左手はしばしの間空を切って待機していた俺の右手が静かに相手の制服内部へと滑り込む。
「！？」

そしてそのまま狙いのものを引き抜く。

「ゴンゾウ！」

「わかった！」

引っこ抜いたそれをゴンゾウのほうへと投げつける。一瞬じゃ決まらなかったな。俺は自分の命（生徒手帳）を確認してからそいつへと視線を投げかける。表情は勝者だ。きつと鏡で自分の顔を見たらいたぶるのが好きな性格を体現してくれていることだろう。

「まだ、やるかい？次はもっかい下着すってやろうか？」

「……はあ……」

「え？なんだ？負け犬はおとなしくしとけよ？もう悪さするな」
すごい優越感。なんだか神様になれた気分だ……ま、馬鹿言っている場合でもないが。

優越感に浸っている俺の耳にぐるぐるめがねはそのめがねをとって俺を見る。ほほが朱にそまっていた。

「も、もっと……」

「もっと？」

もっと……もつとなんだろうか？

「もつと七尾をなじってえ……七尾をいじめてえ……お・ね・が・い」

そういつてよってくる。

「うえええ！？よるな！」

「んあ！最高！もつと！もつとお！」

こ、こいつ変態だ。

「ゴンゾウ、こいつはやばい！逃げるぞ！」

「え？わかった」

生徒手帳を投げ返して俺らは遁走を始める。裏道に裏道、時には隠れながらにしてばらばらに逃げた。なんだ、あいつは！

「はあ……はあ……もうかわらないどこ」

「あ、先輩じゃないですか」

走ってきたぐるぐるめがねに一瞬だけひるんだがどうやら奈々枝の同級生、八咲凜呼であることを確認してほっとしていた。

「なんだか顔色が悪いようですけど……」

「ああ、大丈夫」

「それより、今日はナナスケと一緒にじゃないんですね？」

「家に帰ってると思うぞ」

「そうですね……ところで、ナナスケから聞いたんですけど先輩ってかなりすりの腕があるそうじゃないですか？」

「……はあ」

できれば他言無用でお願いしたかったのだが、まあ、どうやら奈々枝の口からすでにこの娘に情報がいったらしい。

「そうだ、それが？」

「気をつけてくださいね？」

そんなことはわかってているし、大体俺はすでに悪さをしていない。

「いいえ、警察に気をつけてくださいとは言っていないません」

「どうということだ？」

首をかしげる俺に彼女は口を開いた……

第十八話 蒼い弓編最終話：「蒼い弓の實力」（前書き）

蒼疾「お、今回はメモリアルじゃないか？」七海「本当ですね！記念すべき20回目の更新ですよ」蒼疾「ちなみにいうが別に何かが変わるってわけじゃないけどな……ああ、そういう次からはちよつと違った話じゃなかったか？」七海「どうせ私の出番はないんでしょうけどね」蒼疾「ま、たまには違ったフェアリーブレイヴを楽しむのもいいんじゃないか？というわけで次回、フェアリーブレイヴ……まあ、読めばわかります！というかこの前の前書き伝わってなかったっぽい！」

第十八話 蒼い弓編最終話：「蒼い弓の實力」

第十八話 蒼い弓編最終話：

「蒼い弓の實力」

変態だったと思われるなぞの偽蒼い弓との第一種戦闘を終えて俺は逃げたのだが、帰りに奈々枝の友人であり、俺の後輩にあたる八咲凜呼にであつたのだった。

「実はですね、恥ずかしながら凜呼の姉も蒼疾さんと同じで手癖の悪い小悪党なんですよ」

「誰が手癖が悪いだ！」

「まあまあ……それで、最近蒼い弓という犯罪者の真似事を開始。それで、凜呼の姉は自分よりすごいと思われる蒼い弓に会おうとしているのです」

「……」

なるほど、罠だったということか？俺を警察に突き出せば自分はこのうとすりつづける……そういったことが狙いなのか？

そんなことを考えていたのだが凜呼はひとりでにしゃべり続ける。それで、蒼い弓を見つけたらいぢめてもらうんだといっています

「はい？いじめてもらう？」

「ええ、いぢめてもらうと……Mなんですよ、凜呼のお姉さんは」
つやのある瞳で俺を見ていた先ほどの光景が頭によぎる。

「七尾……という名前か、お前の姉」

「え？ええ……まさか、もうあつてしまったとか？凜呼と同じでぐるぐるめがねですよ？」

「え？い、いや……その、すりのほうで有名だからな」

「そうですか、とりあえず気をつけてくださいね」

それでは失礼しますとそれだけ言つて凜呼は去つていった。

「恐ろしい話だな」

「見つけたわあ、さあ、七尾をお、なじつてえ」

「ひいつ!？」

後ろを振り返るとそこには走って追いかけてきたためか息を荒くしていた凜呼の姉、八咲七尾が立っていた。

「いじつてえ」

「やめろ、それ以上近づくんじゃねえ!」

そういつて手をぶんぶんと振り回す。

「ふふふう、その手でぶたれたらあ、七尾幸せかもあ」

めがねをとっているのかわいらしいぱっちりした瞳が見えているがすでに恍惚とした表情でとろんとなっている。

やられる!そう思ったとき、七尾は動きを止めていた。

「けどあ……七尾もお、常識人」

「どこがだ、どこが!かんつつつべきに!おかしいぞ!いろいろと!」

「ごそごそとしてから生徒手帳を取り出す。

「八咲い七尾おですう。以後、よろしくお願いしますう」

「え?あ、これはご丁寧に!天川蒼疾つて言います」

そこで相手は動きを止めてあごに手を這わせた。

「ううん?あれ?天川あ蒼疾くうんは……七尾とあつたことがあありますなあ?」

「ない」

断言できる。こいつとは絶対あつていないはずだ。

「そうかなあ?七尾はあるよ?」

「俺はないつて」

「だってえ、七海ちゃんと同じ場所にすんでたもあん」

「なんだつて?」

自慢げに胸を張ったそいつを見て俺は啞然となった。

「あ、そうだあ……蒼疾くうんがこれからもたまに七尾とお遊んでくれるならあ……」

「その前に普通にしゃべれんのか?」

「七尾とたまに遊んでくれるなら」

「おいおい、普通にしゃべれるならさっさとしゃべれよ。」

「悪いことするのやめてあげる」

「……わかった、たまに会うからもうやめろよ」

「うん、わかった……今日はもう遅いからまたね」

七尾は立ち上がってそのまま回れ右をすると残像を残しながら去っていった。

「すげえな、あいつ人間かよ？」

そんなことを呟く俺の後ろに人影が……

「な、菜々子先輩」

「ついつい、後ろにたじろいってしまった。」

「あれれ？どうかしたの？」

「え？い、いや……」

先ほどのやり取りを見られていたらなんとなくいやだったのだが、危惧していたことは何もなかったらしい。

「えっと、今帰りですか？」

「うん、七海おねえちゃんからお買い物を頼まれていたからね」

「じゃ、一緒に帰りますか？」

「うん！」

菜々子先輩からマイバックを受け取り、俺は手を繋いで夕焼けが殆ど沈んだ帰り道を二人で歩いていた。

「なんだかつき物が落ちた顔ね」

「ええ、まあ……心配していらっしゃったようですけどもう大丈夫です」

「そう、それならいいわ」

鋭い瞳がふいに大きく見開かれる。

「よかったあ、蒼疾おにいちやんがまた元気になって」

「ええ、心配かけてすみませんでした」

「いいのいいの、わたしが勝手に心配したんだから」

ニコニコ笑っている菜々子先輩を見ていると心が安らぐのだが…

……なんだか既視感を覚えた。

「ほれた？蒼疾お兄ちゃん？」

「え？いや……」

にこりと笑ったその顔にはぶれて裏の菜々子先輩の顔まで見えていた……めずらしく笑っている。

「えっと、その」

「……わたしはね、でれでれだなあ……蒼疾お兄ちゃんに」

「……ありがとうございます」

「今の状況じゃさ、簡単にわたしにでれでれしているって言えないよね？」

「……すみません」

「いいのいいの。わたしは蒼疾お兄ちゃんと一緒にいられるだけで幸せだからね」

笑ってそのまま俺の手を引く。

「ほら、もうお家に帰ってこれたよ」二人だったら早いよね？」

「……そうですね」

「ただいま」

「ただいま」

最後まで俺の手を引いたまま、菜々子先輩は玄関を開けたのだった。

「……ありがとうございます、菜々子先輩」

「いいのよ、わたしも好きでやってるから」

にやつとした表情を見て俺は変なため息をついたのだった。

「あ、おかえりなさい」

そんな七海の声を聞きながら……

番外編

「違うんです！僕はやってません！」

「嘘付け！さっきの女の子はお前にやられたって言ってたぞ！」

「嘘です！そいつはすりです！」

「こつちにこいつ!!」

「助けてくれえ! 蒼疾!」

ゴンゾウが一週間ほど休んだらしい理由を聞いたのはやつが学校に来てからだった。

フェアリーブレイヴ 狭間 壱（前書き）

蒼疾「今回は前書き次回予告オヤスミ！以上！」

フェアリーブレイヴ 狭間 壱

フェアリーブレイヴ：狭間

「鶴来蒼疾の妹」

俺、鶴来蒼疾には妹がひとりいる。

「もうっ！お兄ちゃんの意地悪！」

「しるかよっ！」

そいつの名前は鶴来奈々枝。めちゃくちゃ生意気でしょっちゅう俺をからかっている。

「怖いんだから一緒に見てよ！」

「だ！か！ら！何で怖いのに怖い番組見ようとしてるんだよ！」

「そこがいいんじゃない！」

今日は両親が外に出払ってしまったているし、奈々枝の我侭を聞いてくれるようなお人よしはいないのだ。

「いやだあ！あたしと一緒にみようよあ！」

「しるかよっ！」

俺は妹が嫌いだ。我侭で、うるさくて、ぐずればすぐに何でも皆が言うことを聞いてくれるって思ってる。もう高校生なのに、こいつはぐずっているのだ。

「みてよみてよみてよみてよあ！！！」

それこそ本当にガキみたいに駄々をこねて足をばたつかせてる。

「パンツ見えてるぞ、おい」

「みてよみてよみてよみてよあ！！！」

顔を真っ赤にしてそういつているのだが、俺はさっさと自室へと戻ったのだった。

「はあ……………七海さんに告白なんてできねえよなあ」

なんとなく、憧れの天津地七海さんにはたまに学校であったりするのだからいかんせん、俺は臆病で色々と情けないので告白しても振

られるのがオチだろう。そんなオチはいらないし、振られるのなら
いわないほうがましではないだろうか？

「……………って、そんなこといってたらとっくに二時間たちまっ
てるよ」

既に時刻は十一時ほどになっており、俺は風呂に入る準備をして
部屋を出た。

「きゃっ！！」

「うわっ！？」

リビングから短い悲鳴が聞こえてきておそろおそろ覗き込む。布
団にくるまって泣きそうな顔になった奈々枝の姿があった。テレビ
の中では何も知らない主人公が今まさに襲われようとしていた。

「……………よし」

ここは一つ日ごろの悪さを実感させてやれ、悪魔が楽しそうにそ
んなことを言った。

そうと決めた俺はゆっくりと、抜き足差し足忍び足で徐々に奈々
枝へと近づく。そろそろテレビの中のお化けも主人公を襲うことを
決心したらしい……………俺と同じスピードで主人公へと近づいていく。

3……………2……………1！

「わっ！ー！！」

「きゃあああああああああ！？」

布団を取っ払ってそのまま立ち上がって、倒れる。

「あっはっはっはっは！！！！」

「う、うわああああああん！！」

「え？あれ？」

ぎょっとして俺は奈々枝を見る。じゅうたんが、濡れている……………
…？

「も、もしかしてお前……………」

「ひぐっ……………ばかあっ！！」

それだけいうとトイレへと姿を隠す。

「……………」

俺は雑巾を持ってきて湿っている場所を拭く。テレビの中では主人公が襲われている真つ最中だ。

それから少したって泣きながらトイレから出てきた。

「ばか……ばかぁ……」

「あ、ああ……悪い悪い」

近づいていって頭を撫でてやる。そのまま俺のほうに身体を傾けてきたので抱きしめてやって頭を撫でる。

「よしよし、俺が悪かった……泣くなよ」

「だって……だってえ……」

「ほらほら」

「ひぐっ……」

ソファーに二人で座ってそのまま撫で続ける。はは……どうやら悪戯がすぎたようだ。これは反省しないと。

「……す……」

十分ほどそうしているとそのまま眠ってしまった。やれやれ、子どもだ。

「よいしょっと……ん？」

パジャマの下が濡れたままだ。うん、このままじゃ風邪ひいちまうな。

「ん？あれ？」

「あ、起きたか？」

風呂から上がってきたらどうやらちようど起きたらしい。まあ、まだソファーで寝るには寒い季節だからな。

「パジャマ、濡れてたから今洗濯機で回してる」

「ん？あ、ありがとう」

俺の目を見ようとしなくて奈々枝は床を見ている。既に床にしみなど残っていない。さっさと部屋に戻ろうとすると奈々枝の声が俺を捕まえる。

「……え？パジャマがどうしたって？」

「だから、濡れていたから下だけ脱がして洗濯機に入れたから。あ、さすがに干したりまではしてやらないからな」

今度こそ部屋に戻るために扉を開ける。だが、今度は物理的に奈々枝に捕まった。

「ちよつとまつてよ！パジャマを脱がせたってこと！？」

「え？勿論パンツも濡れていたから脱がして新しいのはかせてやったから……ありがたく思えよ」

「何でよ！おかしくない！？」

顔を真つ赤にして俺に食って掛かってくる。

「何がだ？妹が濡れてるんだぞ？風邪引くだろ？間違つてないだろ？」

「そ、それはたしかにそうだけど……」

「じゃ、明日も俺は学校があるからオヤスミ」

部屋に入つて扉を閉めようとするが、それを奈々枝が防ぐ。

「だ！か！ら！何でパンツまで脱がせるのよ！」

「はあっ！？何意味がわからねえこと言ってるんだよ？いいか？パジャマを脱がせてしたのパジャマだけはかせてやってもパンツが濡れてるだろ？實際肌に触れているのはパンツだ！違うか？大体、パンツが濡れてたらまたせつかく履かせてやったズボンが濡れちまう！」

「そ、そうだけど、そうだけど………本当！信じられないっ！兄さんのほかっ！！」

奈々枝はそういつて自室へと走つて戻つてしまった。

「………あのなあ、俺も悪いと思ってるよ」

そういつて俺は鼻の頭をかく………まさか、まさかあいつが………もらしちゃうなんて思わなかったから」

うつうつとしていると扉を誰かがノックする。寝ぼけたままで返事をする静かに誰かが覗き込んでいた。

「………誰だよ」

「あ、あたし」

「なんだ、奈々枝か……脅かしやがって。
ベッドから抜け出す事無くその場で対応することにした。

「何かようか？」

「えっと……怖いの」

「……はあ？」

「怖い見たから、ひ、ひとりじゃ怖くて……」

「馬鹿か、あいつは。そんなの俺に関係ないだろうと思ったのだが……もしかして、俺のせいでは？と考えてしまつところもあった。ただ、それを認めてしまつのは嫌だったので寝返りをうち奈々枝を見ないようにした。

「……はいつてこいよ」

「あ、ありがとう……」

「部屋に入つて来いつて意味だったのだがどうやら俺のベッドに入
れつて意味と誤解したようで……静かに俺のベッドに滑り込んで
きた。

「……あつたかい」

「……あのなあ、奈々枝……」

「何？」

「……いや、なんでもない」

「眠気が襲つてきてこれ以上無駄な時間を使いたくなかつた。

「あのね、兄さん……」

「何だ？」

「あ、あたしの……あたしのことだ、大切？」

「はあ？意味わからねえこと言つてんじゃねえよ……」

「眠くてまともな会話がそろそろ出来なくなつてくる。

「……大切だから、色々、してやつて……」

「俺の記憶はそこから先がなかった。

「……朝か」

昨日の夜のこと嘘じゃなかったという証拠にそいつは静かに俺にしがみついて眠っていた。

「…………やれやれ」

そういつて頭を撫でてやる。幸せそうなこいつが昼間はわがままだからなあ…………人間は何がなんだかよくわからんもんだな。

今日は休みだ、もっと眠っていいだろうな…………せめて、こいつが目覚ますまで。

フェアリーブレイヴ 狭間 壱（後書き）

さて、どうだったでしょうか？あとがきまで読んでくださいました方々ありがとうございます。ここで一つお願いがあります。あと二つほどこの狭間という部分を出そうと思っているのですがよければこの狭間についてだけの感想をお願いしたいのです。勿論、誰が好きだとかそういうものでも構いませんが、ぜひ、聞きたいと思っています。メッセージから感想、評価のどれでもいいので！あと二つの話を読んだあとで構いません。よろしくお願いします。

フェアリーブレイヴ 狭間 弐（前書き）

蒼疾「今回も前書きおやすみ〜三連休」

フェアリーブレイヴ 狭間 式

フェアリーブレイヴ：狭間

「あの先輩は遠い／俺の後輩は近い」

俺の目つきは悪いようで、大小様々な連中に絡まれてきた。だが、ある日そんな俺をかばってくれた先輩がいた。そんなとき、髪を縛っていたゴムが俺の近くへと飛んできた。

「やめるよ、お前ら。大人数でひとりを囲むなんてはずいまねしてるんじゃないよ」

瞬く間にその先輩は全ての不良たちを軒並み沈め、俺の前に立つて立たせてくれた。

「おら、大丈夫か？」

「え？ええ……………」

「そうか、まあ、一応保健室まで連れてってやるよ」
その人は生徒会長だった。

「はあ……………」

「どうした、元気ないな？」

ゴンゾウが覗き込んでくる。俺はものすごく不機嫌なオーラをぶつけて見せるがやつだけには通用しない。

「……………生徒会長、かつこいいよな」

「ああ、そうだね……………一目ぼれでもしたのかい？」

「べ、別にそんなんじゃない……………このまえ助けてもらったんだよ」

その後、保健室で擦り傷とかを治療してもらった。未だにその絆創膏がしっかりと貼り付けられている。

「お礼がしたいと？」

「……………そんなところだ」

そういつて俺は両手を挙げてのびをする。

「んゝそれなら、その生徒会長の妹さんの友達になってやったらど

うだい？」

「はあ？」

こいつは何を言っているのだろうかと思っただ。

「あのなあ、俺が仲良くなりたいのは……こほん、お礼がしたいのは先輩だよ、えっと……菜々子先輩」

「おいおい、菜々子先輩の家系が複雑っていうの知らないんだろ？」

にやりとした調子でゴンゾウは笑っていた。

「どういうことだよ？」

「知らないのかい？菜々子先輩の今の両親は血がつながってないんだよ」

「？」

「えっと、菜々子先輩は母親一人で育てられて今の父親と彼女の母が結婚。そこで、母親が死んで……そうして新しい奥さんと結婚してその娘が菜々子って同名」

「それはまた……」

先輩はもしかしてその家庭では孤立しているのだろうか？

「だがね、実はその菜々子ちゃんっていうのも両親とは血がつながってなくて児童擁護施設から引き取ったらしいよ」

「へえ……」

それなら菜々子先輩とその菜々子ちゃんどちらかに愛情が分配されることもないんだろなあ……

「だけどさ、菜々子ちゃんは引ッ込み思案でよく面倒見ている菜々子先輩から見たら心配らしいんだよ……それにさ、菜々子先輩ってああいう性格してるだろ？だからお姉さんの報復を怖がってスネに傷があるような連中は手を出しにくいって」

「いや、それなら普通の女子とかいるだろ？」

首を振ってそれを否定。

「何だよ？」

「えっとね、暗いからっていった」

「暗い？性格が？」

「多分……だからさ、ちょうど僕たちの部に入ってもらわない？
ちようどというところとあまりいい聞こえはよくはないが、俺たちが発
足した文芸部（実際のところはだらけてるだけ）に幽霊部員として
もあと一人ぐらい数がほしい。それに……友達はやっぱり、重要
だからな。」

「じゃ、早速いくか？」

「え？もう？」

「ああ、友達は早くできたほうが嬉しいだろう？」

「……そうだね！そうしようか」

俺とゴンゾウは一年の教室へと向かったのだった。

「おい、お前の姉貴に言っとけ！」

「ひぐつ……………」

廊下でそんな場面を見つけた。勿論、これ以上下げられて困る評
価なんてもっていないので乱入する。先生？先生にばれるなんてぜ
んぜんおもってない。

「おい！お前ら何いじめてるんだよ！」

「ああ？」

相手を突き飛ばして誰がいじめられているか確認する。ゴンゾウ
が顔をのぞかせる。

「あ、この子が菜々子ちゃんだから」

「なるほど……………」

確かに、こいつは暗いな……………前髪で目が隠されている。

「あんたら、二年だろ？何か用かよ？」

三人いたいじめっ子達がそんなことを聞いてくる。

「お前らじゃなくてこっちに用がある！この菜々子ちゃんを俺らの
部活に勧誘しに来た」

全員がきょんとしている。

「ははっ、こいつに関わったら先輩だろうと友達いなくなるぜ？」

にやにやしてそういい、菜々子ちゃんは泣きそうになっていた。

「ああ、知ってる……菜々子先輩の妹さんだろ？」

「知ってていつているのかよ？」

「やあやあやあ、この先輩を誰か知らないのかい？友達の数、ひとり……あ、ちなみに彼の友人は僕だけだからね。」

親指をぐつと突き出す。それに対して菜々子ちゃんがきょとんとしており、他の連中は笑っていた。

「ゴンゾウ、名前を教えてやれよ」

「いやだよ、天道時蒼疾」

「て、天道時蒼疾だって？」

「逃げる！」

そのままやつらは去っていった。所詮はチキンだな。

「つて、名前ばらして菜々子ちゃんの友達になつたら菜々子ちゃんが余計嫌われるんじゃないかな？」

「……そうだな、それは忘れてもらおう……こほん、奈々子ちゃんだよな？」

「う、うん……」

びくつとしてたじろぐ。

「あ、そんなに怖がることはないから」

「そうそう、別に君をどうこうしようってわけじゃないから……これを君に見て欲しくてね」

「？」

手渡したそれは文芸部歓迎ポスターと入部届けの紙だった。ポスターは俺とゴンゾウの手作りで、絵心のない俺たち二人ではろくなものが完成しなかった。ただ、ゴンゾウが字がうまいので筆で字を書いてもらったのだが下手な謎の絵とはミスマッチだ。

「え、こ、これって……部活勧誘？」

「そうだな」

「ぜひ、君に入ってもらいたいんだよ」

ゴンゾウが右手を差し出して腰を低くしている。

「あとさ、蒼疾の友達になってほしいんだ」
「友達？」

「ああ、ほら、蒼疾ってとっても怖い顔してるだろ？」

「う、うん……」

「ぐはっ……」

かわいい子にそういわれるとリアルに心をえぐられた気がするぜ

……トホホ。

「けどね、こんなふうに傷つきやすいんだ……だから、ね？こいつの友達になってあげたら菜々子ちゃんにも友達が出来たってことだろ？」

「で、でも……わたしと友達になつたらいじめられちゃうよ？」

「その点は大丈夫だ……俺はいじめてくる友達、いか知り合いないから」

「そうだな、誰一人として関わろうとしてこない……いや、そこに一匹いるが。」

「ほ、本当にいいの？」

「ああ、俺からもお願いする……俺と友達になってくれよ」

「う、うん！」

前髪から覗く瞳がとても綺麗なものだということを知った……

…。

「あ、そうだ……」

「そっいえばこういうものがポケットにあつたな……」

「その前髪、しばっとけよ」

「え？」

「返事をまたずに縛る。」

「うん、似合うぞ菜々子ちゃん」

「え？あ、ありがとう……蒼疾お兄ちゃん」

「おい、聞いたかよ！蒼疾おにちゃんだって！」

「くう！うらやましい！菜々子ちゃん！僕も呼んでくれよ！」

「えっと……ゴンゾウさん？」

「くっそう！お兄ちゃんじゃなくてさん！？しかも疑問系！」

ひとりで騒いでいるゴンゾウを放っておいて俺は菜々子ちゃんに改めて言うことにした。

「場所はそこのポスターに書かれているとおり旧文芸部室だから」

「わかった！絶対来るね！」

予鈴が鳴り、俺らは別れることになった。

放課後、放送を告げる音が鳴り響き始めた。

『あゝあゝ……………ありゃ？これ何かおかしくないか？おかしいだろ、おい、聞いてるかって……………え？もう放送はいつているのかよ？あ、失礼！』

「……………」

ふと、思う……………こんなもんでよく生徒会長になれたもんだよなあ……………

『よくきけ！この学校内に天道時蒼疾っていうのって……………なんとかゴンゾウって言う奴いるだろ！』

「くっはあ！！」

「呼び出したよ！」

『今からカウントしてやるから10秒以内に生徒会室にこいよな！わたしより後に来たら……………覚悟、できてるんだろっな？』

「ひいっ！？」

「な、なぜだ！？」

ゴンゾウのほうを見る。急いで立ち上がってどこかへと走っている。

「お、おいゴンゾウ？」

「いこう！早く行かないと逝っちまうよあ！」

目がマジだ。急いで俺たちは生徒会室へと急いだのだった。

「ああっ！このまえ不正にエロ本を同級生に売ったのが間違いだっただのかなあ？」

「しらねえよ」

「まさか、年齢偽ってA V借りたのがバレたのかも……………」

ずっと墓穴を掘り進めていつている学友が非常に遠くに感じられた。

「あ、ついたぞ」

「ひいつ!？」

今更逃げようとしているゴンゾウを試しに放り込んでみた。

「おい、お前もはいつてこい」

「え？」

いきなり現れた手につかまれて俺も引きずり込まれたのだった。

「お前ら、わたしの菜々子に手を出したって？」

物凄く怖い表情……………ゴンゾウは足がぶるぶる震えている。わたしの菜々子? 今日から俺らの奈々子ちゃんである……………なんてことは口が裂けてもいえないわけですよ、はい。

「どうなんだよ? あ?」

「え、えつとですねえ……………と、友達に」

実にりりしい姿だなあと眺めているとこっちを見た。俺は急いでしつかりとした姿勢をとる。

「あれ、お前は……………」

まだ覚えていてくれたらしい。俺は一步前に出て頭を下げる。

「先輩、この前は助けていたいただいてありがとうございます」

「ああ、気にするな……………ところで、お前は何で菜々子の友達になるうとしたんだ?」

「……………友達が欲しいからです」

「はあ?」

首をかしげる相手に俺は言った。

「……………いけませんか? 残念ながら俺には友達がいません。男子は逃げる、または殴りかかってきますし、女子は俺が話しかけようとしても逃げます……………せめて先輩の中に友人を作ろうと努力しましたが結果はあまり変わりませんでした。友達、俺が望んじやいけませんか? 俺が友人といえるのはそこにいるやつと菜々子ちゃんだ

けです」

いつの間にか喧嘩をするときにのように相手を睨みつけていた。

「蒼疾……………」

「……………わかった、許そう」

「友達に許すもなにもありません」

「そうか？わたしは柄の悪い連中を友達にしようとは思わない」

俺も確かに思わない……………」

「色々と問題を起こしている二人組みだと思ったがそんなに悪じやなさそうだ」

「先輩、それは誤解です……………俺らは潔白です」

「そうですよ！僕らはいいい子です」

「そうか、それなら……………」

そこまで菜々子先輩がいつていると扉が開いた。

「はあ……………はあ……………」

「菜々子ちゃん？」

そこにはゴムで髪の毛を縛っている奈々子ちゃんが夕焼けを浴びて輝いていた。

「お、お姉ちゃん！二人をいじめないで！」

「菜々子……………大丈夫だ、お前らの友達が部活のメンバーが増えたっていつていたから呼び出しただけ……………それで、お前もわたしに何か渡すものがあるんじゃないのか？」

「え？あ、そうだった……………」

子どもみたいな字で書かれた文芸部に入部しますとかかれた紙を生徒会長へと渡す。

「……………お前ら、きちんと後輩の先輩を見てやれよ」

「わかってます……………さ、いくぞ二人とも」

「ああ、そうだね」

「うん！」

「じゃ、今日はそれぞれがやりたいことをやってくれ……………といい

たいところだが新しい部員が入ってさらにポスターを改良したいと俺は思う」

「そうだね」

「えっと、わたしはなにをすればいいのかなあ？」

首をかしげる菜々子ちゃんに俺は紙を渡した。

「えっと、絵は上手か？」

「うん！得意だよ！」

「よし、それなら文字はゴンゾウ、絵は菜々子ちゃん俺は監督ね」

「了解部長！！」

今日はいいひだ……友達が出来る日ってのはこんなに楽しいんだな。

フェアリーブレイヴ 狭間 参（前書き）

蒼疾「次回、多分最終回、以上！」

フェアリーブレイヴ 狭間 参

フェアリーブレイヴ：狭間

「絶望が生み出すもの」

絶対に人がやってこない暗い森。そこには俺と七海だけがたっていた。けっしてそれは楽しい空気ではなく、殺伐としたもの……俺の額からは冷や汗が流れていた。

「……蒼疾さん、あなたにはここで死んでもらいますから」

「な、七海、その……手に持つてるやつ捨てるよ」

あいつが握っているもの……それは出刃包丁だ。両手で持たずに片手で持つており、切っ先は俺の……俺の心臓へと向けられている。「捨てる？いいえ、これはあなたを殺すために必要なものですよ、蒼疾さん」

「じよ、冗談はやめろよ、な？」

一步一步、近づいてくる七海に対して俺はそれよりも早く逃げようとする。瞳孔が開いていて目に輝きなんてものはない。俺の息はぜんぜん運動もしていないのに上がっていて心臓は先ほどから普段の三倍ほどのスピードで動いていた。血が全身に流れているのがわかる。

「何で？……よく、そんなことがいえますね？」

かすかに空から降り注ぐ太陽が包丁を鈍く光らせる。

「仲良く帰ってきていませんか？かわいい後輩と一緒に」

おとといのことが思い返される。

「あ、あれは……」

あれは……あっちから……誘ってきたのだというとしてそこで俺は背を向けて走り出していた。

「あの日は私と一緒にあそぶって約束しましたよねえ！？」

そんな声が追いかけてくる。

「し、知らないっ！」

「……そうですか……わかりました」

その後、無言で後ろから追いかけてくる七海。後ろを振り返っている暇などなかった。

「はあっ！はあっ！！」

「……」

息が自然とあがってくる。このままだったらすぐに追いつかれてしま……

「ぐあっ！！」

複雑に張り巡らされていた木の根っこに足をすくわれ、俺は無様に両手をついて転んでしまった。どうやらかなり打ち付けてしまったようで右足が動かない。

「……死んでください、蒼疾さん」

「ななっ……」

振り落とされた出刃包丁は俺の肩に刺さっていた。

「……楽には殺しませんから」

「あああああああっ！！！！」

俺の声とは思えない声があがる。激痛どころではなく、熱い。滴る血が地面へと吸い込まれていく。

「……苦しんで！苦しんで！苦しんでくださいっ！！！！」

「あがっ……うがっ……」

右胸、肝臓、下腹……幾重にもめったざしされていき、俺の体は赤にそまっっていく。絶望しかない。

「しねえっ！！！！」

最後に振り上げた包丁の刃が紅く鈍く光、俺はぼーとしたままその光景を眺めていた。

「うわっ！？」

振動の鼓動が走っているときと同じテンポで脈打つ。

「……夢かよ……」

最悪の夢だった。最近仲良くなった……というより、昨日告白し

てきた七海の夢だった。が惨殺される夢だなんて……

「……正夢には……ならないよな」

胸糞悪いままベッドから降りて俺は夢の中で七海にさされた場所を確認する。一瞬だけ血が流れているような錯覚があったのだが、錯覚は錯覚。

「……なにも、ないよな？」

ぴるるるる……

携帯が鳴り出し、少しだけ驚いてからそれが誰だか確認。一瞬だけ迷ったが七海との会話に望む。

「もしもし？」

『おはようございます、蒼疾さん。あの、まだ寝てました？』

「いや、今起きたところ……」

まあ、七海に起こされたな。否、殺されたか。

『そうですかあ、私が起こしてあげようと思っていましたんですけど……』

……

「ああ、それなら大丈夫だ……夢の中に七海が出ていたから」

『え？ほ、本当ですか？』

なぜだかぎよつとした調子だ。どうしたんだろうか？

「うそじゃないぞ」

俺を殺そうとしていたからな。あれで目が覚めないやつは相当……地球サイズぐらいの心臓だろうな……だが俺はそんな心臓など持ち合わせておらずたぶん、こぶし大だ。

「あゝえつとだな……」

『どうしたんですか？』

「俺はお前だけが好きだから」

せめて現実だけでも勘違いされては大変だ。

『えつと……朝からそんな、少し恥ずかしいです』

「いや、大切なことだ。勘違いしないでほしいが俺はお前だけが」

好きだから」

しばしの間、七海は沈黙。そうだろうな、俺だって七海からそんな真剣な声で言われたら固まる。

『私も蒼疾さんのことが大好きですよ』

それを聞いて安心した。とりあえず、今日殺される心配はないようだ。ほっとしたらなんだか俺は……俺を殺したやつ顔が見たくなかった。

「……えつとな、今日、休日だろ？だからさ、会えるかな？」

『はい、大丈夫ですよ？どこかに行きますか？』

「いや、俺の家に来て何かして遊ぼうぜ？」

夢は夢だ、それ以外の何ものでもない。あんなものは俺じゃないし、七海じゃないはずだ。まだ七海のことなんてほとんど知っていないかもしれないがあんなに笑って頬を朱に染める恥ずかしがり屋が俺を殺すわけないだろ？

「お、おじゃまします」

「いらつしゃい」

リビングに通してお茶を出す。お茶菓子は適当にあつたものを出すことにした。

「あ、これどうぞ……」

「え？」

一瞬だけ、ポーチから取り出したものが出刃包丁に見えた気がした……それは単なるお菓子だった。

「お母さんから粗相がないようにって言われて持ってきたんです」

「わざわざいいのになぁ……」

「いえ、せっかく娘をもらってくれたお礼だからと言っちゃいました……しつれいしちやいますよね？」

「ああ、確かにしつれいだよなぁ……こんなにかわいいのに」

テーブルにひじついてそんなことを思う。腰に届かないぐらいの長さのたおやかな髪にパツチリした瞳……少し細めの眉にばっきゅ

ぼんではないが満足できる身体……どこをとっても美少女だ。性格だって清楚で、可憐で、優しいのだ。頭のほうはというとそんなによくないらしいがそんなに悪いというわけでもない。いわば普通だ、成績は。

「あの、蒼疾さん？」

「え？ああ……なんだ？」

「どうかしたんですか？ボーっとしてましたよ？」

「いや、だってこんなにかわいいのになあって思ってたんだよ……」

「そんな……恥ずかしいですよ」

俺は何を言っているんだ……やれやれ。

「それより、何で俺なんか選んだんだ？」

ふと、思う。学業だってそんなによくないし、顔も普通だろう……運動だってそんなにできるってわけではない。俺より容姿、能力など高い連中は俺の高校にはたくさんいるはずなのだ。

「私は蒼疾さんが好きですから……今回の席替えで隣になれたことがうれしいですよ？」

「おいおい、答えになってないぞ」

「蒼疾さんを好きになった理由はですねえ……」

「うんうん、なんだ？」

「秘密です」

がくし……もしかして何かたくらんでいるんじゃないか、こいつは。大体、俺が女子に告白されること自体がおかしい。これはもしかして夢なのでは？

「それで、蒼疾さんが私の……こ、告白を受けてくれた理由は？」

「え？そりゃあ……前からあこがれてたりした人から告白されたらうれしくねえか？」

俺の場合は少しだめだ……というより、多情なのかもしれない。人に勝手にランクをつけてそのままとまりの中の誰かと仲良く慣れたらいいなあと思っていたくらいだから……いいや、そんな気持ちでいたらいけないんだろうな。

「あこがれてたんですか？私に？」

不思議そうに俺を見る。

「ああ、そうだ」

視界の隅に入れていたのだからほかの連中より気にかけていたんだろうな、俺は。

「それは……うれしいです」

「そりゃよかった」

そこから何もしゃべらない。お互いになにやら気まずい……しかも、かなり悪いほうの気まずい雰囲気の流れ始める。

「……」

「……」

すでにお茶の中身は冷えていたりする。

「こ、こんなことを言うのはとてもおかしくて気持ち悪いかもしれません」

「何だ？言ってみろよ」

「……今日、蒼疾さんを……殺す夢を見たんです」

「！？」

俺は言葉を失った。俺が殺される夢を見て七海が俺を殺す夢を見た……

「そ、それってどんな夢だ？事故で俺を殺しちゃったとか？」

「いいえ、森の中で弁明をしている蒼疾さんにそのまま包丁で刺してしまう夢なんです。それで、それが勘違いだったってことにあとで……あとで気づいてしまう夢でした……うつつ、それで、怖

くなって急いで朝蒼疾さんに電話を……うつつ」

「……」

俺は近づいて七海を抱きしめ頭をなでていた。しかし、心の中では別のことを考えていた。俺が死んだ後の光景を七海は殺した側だから知っているのだ。それと、弁明をしていたといっている。

「どんな弁明だった？」

「えっと……誤解だ、七海！俺は昨日ずっとゴンゾウと一緒にいた

って……いつてました。それと、死ぬ間際に痛い！って……」

思い出したのかそのままなき始める。

「な、なくなよ。ほら、俺は死んでないからさ」

普通だったら気持ち悪がっただろう……だが、俺だって細部は違っているが似たような……殺される夢だが……ものを見ているのだ。俺は七海以外の女子と……ごによ……をして後悔して殺され、七海は俺の家へと入っていくその姿を見て俺を殺した後に後悔をした。両者とも後悔しているのだ。

「わ、私のことを気持ち悪いとは思わないんですか？」

「そんなことはおもわない……」

「い、今のうちに別れたほうが……いいかもしれませんよ？」

「……」

俺は強引に唇を重ねた。

「……ばかつ！俺はいやだ！絶対にお前を離さないから！」

「……蒼疾さん……」

もとはといえば俺が原因なのではないか？俺が七海以外の女の子と仲良くしなければ七海が切れることなんてない。七海はこんなにかわいいのだ。それ以外にどこに目を移せばいいんだよ……

挑むように七海の瞳を見ているとしっかりとした光が彼女の瞳から見てとれた。

「私もです……ほかの人には絶対に……絶対に蒼疾さんを渡しませんから！」

「……」

その瞳の奥にさらにしっきりとした意思を感じられる……俺は再び七海と唇を重ねた。

「……」

俺は思っただ……この約束が敗れたとき夢は現実になるだろうと。逆を言えば、ここまで七海が俺のことを思ってくれているということ。夢は見せてくれたのだろう。

ただ、ただ今はこのかわいくて泣き虫な女の子だけを見続けてい

こつとしか思えなかった。

フェアリーブレイヴ第一幕 閉幕（前書き）

蒼疾「さて、前回からよく意味のわからないことが起きてるなあ
って思っている人は……いませんね、それはおいておくとして、今
回で若い俺とおおさらばですね……次回会うときは成長して帰っ
て来る予定です」

フェアリーブレイヴ第一幕 閉幕

フェアリーブレイヴ 第一幕閉幕

「あら？」

七海は不自然に開かれた蒼疾の部屋の扉を開ける。

「蒼疾さん？」

しかし、そこにはこの部屋の主人の姿はなく、ただいつもよりかなり整頓された部屋が残されていた。あれだけ床に散らばっていた衣類や雑誌、漫画本などは綺麗にタンスや本棚に収納されている。数年間一緒に生活していたが初めてのことであった。

「珍しいこともあるんですね」

それだけ残して部屋を出ようとすると奈々枝がやってくる。

「どうしたの、七海」

「いえ、実は蒼疾さんの部屋が綺麗なんですよ」

「へえ、そりゃすごいわね」

奈々枝も入ってきて驚いている様子。この蒼疾の家に住んでいる人たちにも各自きちんと部屋わけが行われているが綺麗な順番は七海、菜々子、それから数十歩下がって奈々枝に続いて蒼疾だった。

「あたしより綺麗なんておかしいわ」

「そうですね、それに、携帯とかおいていきますし……」

いつもだったら肌身離さず持っているはずの携帯電話を今日は電源を消してこれまた収納スペースにすべて片付けられてしまっている机の上におかれていた。

「手紙？」

携帯電話の隣には手紙がおかれており、それを手にとって見る。

「どうかしたの、七海おねえちゃん？」

「あら、菜々子先輩……そういえば蒼疾さんを見ませんでした？」

「知らないなあ？」

首をかしげ、七海の持っている手紙に視線を送る。

「何それ？恋文？」

「え？」

綺麗に封をしてあるそれを急いで開けてみる七海。ほかの二人も左右から覗き込む。

「？」

そこに書かれていたことは次のものだった……

『こないきなりの文章を書いてしまったのはとてもわがままなことでとわかつているんだが、許してほしい。 捜さないでください』

天川蒼疾』

「こ、これって家出文章じゃないですか！」

七海がおどおどとした調子を見せ始める。

「い、急いで蒼疾さんのご両親に電話をしなくちゃ！」

「……そうね、蒼疾の携帯から……」

「急がないと！」

こうして、天川蒼疾は失踪してしまったのだった。

フェアリーブレイヴ第二幕開幕 第一話：「私は教師になりました」（前書き）

蒼疾「どうも、久しぶりですね…………教師になった天川蒼疾です…
…………以上、解散」

フェアリーブレイヴ第二幕開幕 第一話：「私は教師になりました」

フェアリーブレイヴ 第二幕開幕

第一話

一朝一夕女学校……といってもここは以前まで女学校だったが今では男子入学オーケーな共学制の学校である。

「……………」

しかし、実際に入ってこようとする男子は少い、というかこれまで例が一度もない。理由は以前からこの地域にあった別の共学制の高校へと進むからである。そして、今年もまた男子生徒は一人として入学してこなかった。

本日から新学期が始まり、先生にとってはあらたな生徒たちが、また生徒たちからしてみれば新しい先生と出会う日でもある。ここに、一人の男性教師が校門をくぐっていったのだった。

ざわめきたつ教室内にチャイムが鳴り響き、生徒たちは席へとつく。そして、黒板側の扉が開いて一人の男性教師が入ってきた。教壇へ出席簿を静かに下ろす。

「はい、はじめまして……今日からあなたたちのクラスの副担任になった天川蒼疾です」

自己紹介をしたのはいいのだがその教師の視線は校庭のほうに吸い寄せられていて声にも気迫というか、やる気がこもっていない。端正な顔立ちをした美男子なのだがやるきねえというオーラが漂っている。

数人が男性教師の見るほう、つまり校庭へと視線を向けた。すると、男性教師は眉をゆがめあからさまに不機嫌なオーラを出し始める。

「……失礼ですね、先生は今、自己紹介をしている最中なのに校庭

なんかに視線を送るなんて」

「……」

理不尽な物言いにはあ？とした顔もいたが、いや、先生が見ていたから釣られてみましたとかはさすがにいえるような雰囲気ではなかったのだまりこむ。

「好きなものはお金、嫌いなものは知恵をつけ始めた子供ですね……
……そうですね、ちょうどあなたがたがそれに一致するかと」

「……」

それなら何でお前は教師になったんだと誰かが小声でつぶやこうとしたがそれもオーラで黙殺される。

「このクラスの中で一番頭がいい人、手を上げてください」

誰一人としてあげるものはいなかった。

「失礼、質問を変えましょう……この中で一番成績がいい人、手を上げてください」

大して変わっていないような質問を生徒達に浴びせ、理解した生徒達の視線が一人に向けられる。

「あなたですか、名前は？」

「え？わ、私ですか？私は……あしかがいまり足利伊万里です」

「いちいち名前に振り仮名とか必要ないですから。あなたの名前を読めない人なんて小学生低学年ぐらいですよ。今度から行動などに厳しく指導とかしていくのでそこところ注意をしておいてくださいね」

「は、はあ……わかりました」

いまいち状況がわかっていないという風にうなずいて足利伊万里はぼーっとしていたのであった。蒼疾はなにやらノートに書き込んでいる。

「じゃ、次に一番成績が悪い人」

一人の生徒に視線が集まる。

「え？あたし！？」

髪を茶髪に染めている一人の女子生徒が驚いたように辺りを見渡

す。

「そんなに悪い？」

「本人自覚なし、最悪と……あなた、名前は？」

「あ、あたしは舞錐好ですけどぉ？」

「やれやれ、何で語尾に疑問符がつくんですか疑問符記号があるからっていい気にならないでくださいね疑問符記号があるからこそ、このように読みづらくないんです感嘆符わかってますか疑問符どうです疑問符読みづらいでしょう疑問符」

生徒の中からうわ、読みづらいなと声があがる。注意された舞錐好はぎよつとしてうなずいていた。

「は、はい！今後は記号を大切にします！」

「またそんな記号を使って……まあ、いいです。今後はさまざまなところを見ていきますから心に入れておいてください……さて、話は変わりますがあなたたちは先生が最初に言ったことを覚えていますか？」

全員が首をかしげている。校庭を見ていたのでさして覚えていない。

「残念ながら先生はこのクラスの担任ではありませんから」

「！？」

クラス一同驚いて先生を見る。

「じゃ、じゃあ先生はこの担任ですか？」

「どこの担任でもありませんよ」

「え？」

「先生はこのクラスの副担任ですから」

「……」

沈黙。誰一人として声を出す人はいなかった。

「まあ、今日はこのぐらいにしておきましょう……ああ、そうそう、先生が受け持つ教科は国語ですから」

廊下に出る前にそういったが誰一人として返事をしなかった。先生が扉を閉めてから生徒の一人がため息をつく。

「はあ、変な先生がきたなあ……」

「はい、あなたの名前は？」

「ひつ！？」

窓際の生徒の横から蒼疾の顔が伸びてくる。どうやら聞き耳を立てていたらしい。

「えつと……篠原岬です」

「地名ですか？」

「違いますっ！」

「まあ、そんなことはどうでもいいとして……」

先生の瞳がきらりと光る。

「変とはどういった意味でしょうか？」

篠原岬は友人たちに助けを求める視線を送るが、誰一人としてこの先生を相手に回してまで友人を助けようとする人たちはいなかった。誰も助けは来なかったのだがそれが正しい判断だと篠原岬は思った。

「答えられませんか？まあ、あなたが言った意味での変だとすれば普通ではないこと、異常だとか、奇妙だとか……先生、そのように見えますか？」

外見的には大丈夫だ。どこもおかしくないし、むしろかつこいいほうである。

「い、いいえ。外見は変ではないです」

「そうでしょう、訂正してください」

「え、ええつと……かなり精神異常をきたしていそうな先生がきたなあと……あはは……あれ？」

篠原岬はうけを狙ってそういったのだが、わかりましたとだけつぶやき、蒼疾は窓から首をぬいて篠原岬に告げた。

「なるほど、精神がおかしいと……わかりました、先生はこれから精神病院に行ってきます。異常かどうか診断してもらうために」
「……」

もはや答えられることもなく、ただただ呆然とクラス全員が消え

去った教師を見送ったのだった。

第二話：「先生は正常です」（前書き）

蒼疾「人には思い出話というものがやはり一つはあるものです」伊万里「先生にもあるんですか？」蒼疾「ええ、一応は………高校生ときは非常にもっていましたよ」伊万里「へえ、知りませんでした」蒼疾「ですがまあ、三年生のときにいざこざとかあつて逃げ出してきました。あのままだら命がなくなっていたでしょうから」伊万里「怖いんですね」

第二話：「先生は正常です」

第二話

「おはようございます、みなさん」

「……おはようございます」

比較的今日は普通に入ってきたなあとクラス大半が思った。衝撃的な初対面で生徒たちは圧倒的に先生に置き去りを食らっていたのだが、もしかしたら昨日のあれは冗談だったのではないかと全員が思っていた。

が、それは少し甘い見通しだった。

「先生、昨日篠原美咲さんに言われて精神病院にいつてきましたが……異常ではないといわれました。これが診断結果の紙できちんと医者サインも貰ってきました。左側からまわしてくださいね。ああ、改竄しようとしても無駄ですよ。それはコピーですから。本物は先生の家の机に置いてますから」

「……」

自然と全員の視線が篠原岬に向かう。彼女はあははと笑ってすごしたが顔にはすごい汗が。

視線が篠原岬に向かっていることを気にしていないといった風に蒼疾は足利伊万里へと視線を送る。

「では、ここで一番成績のよい足利伊万里さんに学級委員長が決まるまで授業の始まりと終わりの挨拶をしてもらいます」

「はい、わかりました」

足利伊万里がそういうと先生はため息をついた。

「足利さん、そこは否定とかしないと……いわれたとおりをすべてこなしては駄目な人間になってしまいますよ？」

「そ、そうですね、すみません。私、そんなの出来ません」

「おや、では先生の言うことが聞けないと？」

「……先生、あのう……やっぱりやります。というか、やらせてく

ださい」

「そこまで言うのなら仕方ないですね、いいですよ、お願いします」
「……」

クラス全員が沈黙するが、一人だけ声を上げた生徒が……

「うわ！本当だ！先生本当に精神科に行ってる！」

「……舞錐さん、あなたですか……」

一度だけ蒼疾はため息をつくと舞錐好へと目を向けた。

「先生の話は聞いていましたか？」

「え？も、もちろん！」

「では、舞錐さん、あなたに質問ですが……このクラスで学級委員長は誰でしょう？先生の話聞いていたらわかりますよね？」

「え？え」と。すみません、わかりません」

「よろしい、素直に答えたので今回のことは不問で……では、これより授業を始めるとしましょうか？」

なんだか授業より苦痛だなあと生徒全員がまとまって思ったのだ。
った。

意外や意外、なんだかひねくれたような性格をしている天川蒼疾教師だったが比較的まじめというか、熱心に授業をしていた。

常に生徒のほうを見て黒板に文字を書いているのだが字は比較的上手であり、スピードも早くもなく遅くもなかった。少しでも不思議そうな顔をしている生徒がいたら当てることなく繰り返し繰り返し説明。そして、すでにその部分を理解している生徒たちのために黒板の隅のほうに四文字熟語などを書かせてその意味を調べさせていた。

「はい、ではここで当ててみることにしましょうか……」

にやりと笑い、生徒たちがびくつとした。どうやらここから授業前のひねくれモードに入るらしい……そんなことを軽々と予感させるような顔だ。

「じゃ、まずは先生のことを精神異常者であるというレッテルをは

った篠原岬さん。では、篠原さんに精神異常者であるといわれた先生の心の傷はどのくらい深いか答えてください」

「え？え〜？」

それ、ぜんぜん授業に関係ありませんようとこれまたクラスがそう思ったが当てられるのが怖いので黙っていた。前日のこともあったので篠原岬は友人を当てにすることなく少しの間考えをまとめる。「えっと……タンスの角で小指をぶつけるくらいですか？」

冗談でいった篠原岬は愛想笑いを試みるが、だいぶ苦しかった。まあ、生徒の大半がそれはかなり痛いなと思っていたが。

「惜しいですね、家族にプリンを食べられてしまったぐらいが正解です」

「そ、そうなんですか？」

「そうです、篠原さんも一度ぐらいはあるでしょう？」

「一応は……」

「名前を書いておくべきだったと気がついたところですので後の祭りです」

ああ、それはわかるなあと生徒たちがつぶやく。

「はい、この間に舞錐さん、黒板は写せましたか？」

「え？あ、先生の話に夢中」

「……はあ、いいです、それなら次の質問ですが……」

先生の目線がじろじろと生徒たちの顔をうつつていくが、誰一人として顔を合わせようとはしなかった。特に足利伊万里は先生からいじめられているような錯覚を覚えたので一生懸命勉強してますみたいに下を向いていた。

「はい、では足利さん」

「……」

人生が終わったといった顔をする。それに対して生徒たちは両手を合わせて合掌。

「すみませんが自己紹介をしてくれませんか？先生はよくみなさんのことがまだわかりませんから。ああ、クラスメート全員に聞こえ

る程度の声でお願いしますね」

明らかにうそっぽい笑顔を足利伊万里へと向ける。警戒しながら立ち上がる。しばしの間突っ込んでこないかどうか蒼疾を確認し、何を言うか頭の中でまとめる。短くても長くてもきつとあの教師は突っ込んでくるに違いないと彼女、いやクラス全員は考えていた。「えっと、足利伊万里です。好きなものは読書、嫌いなものは肉の白い脂部分です……」

先生のほうへと視線を向けるが目をつぶって聞いているようだった。もしかしたら嵐前の静けさかもしれない。

「……これから一年間、よろしく願います」

「よろしい、実によくありそうな自己紹介ありがとうございます。これで先生は足利さんについて少しは知ることが出来ました」

あれ？ いじらないのかなと生徒や足利伊万里が思ったときにやっ
と蒼疾は笑った。

「今、何もいじらないのかなあって思いませんでした？」

「え？ い、いえ……」

実際はそのとおりだったので少しだけ動揺し、しっかりと蒼疾を見れなかった。

「まあ、それはいいとして……実際にそんなことを思っちゃった人はMっ気がある可能性があります……あくまで可能性ですが……さて、舞錐さん、黒板は写せましたか？」

「大丈夫」

「そうですね、それなら次に進みたいと思います」

笑みは消え、まじめな顔がのぞく……それを見て大半の生徒がほつと胸を下ろしたのだった。

「はあ、授業中はいいい先生なんだけどなあ……」

クラスメートたちがうんうんとうなずいていた。今は掃除の時間であり、なぜだか蒼疾はいなかった……まあ、いたらこんな話はしないのだが。

「すごくひねくれてるよね。四十度ぐらいかな？」

「顔はいいのに……」

「残念だよね」

「今頃ほかのクラスでもうわさになっているだろうから今から聞いてきてみようよ！」

「「うんうん！」」

ほとんどのクラスメートがそんなことを言っただが一人だけ首を振った。足利伊万里である。

「みんな、そんなところを天川先生に見られたらまた何か言われちゃうよ」

「大丈夫よ、伊万里。どうせ今頃職員室にいるだろうから……」

そういつて篠原岬と舞錐好を筆頭としてクラスメートたちは教室を去っていったのだった。

それから少し経ってから蒼疾が教室へと入ってきた。しばしの間教室内をきよきよとする。

「おや、今は掃除の時間ですよね？」

「え、ええ……えっと……」

挙動不審に箒を持ってあたふたと床をはわく。

「ほかの生徒はどうしたのでしょいか？消失ですか？それとも早退？保健室送りにしたのでしょいか？」

「え、えっと、用事があつていなくなりました」

「そうですか、しかしまあ、足利さん、あなたは掃除は下手なほうなのですか？箒がきちんと床についていませんよ？」

あまり興味がなさそうにそんなことをつぶやく。

「え？あ、すみません……」

あわてて綺麗に箒を持ち直して掃除を再開する。

「ああ、いづらないなあ……みんなについていけばよかった」

そんな言葉がついつい心の中でこぼれてしまう。そんな足利伊万里の心境を知ってか知らずか近づいていき、頭に右手をのせる。

「いい子ですね、というわけで頭をなでてあげましょう」

「へ？」

「よしよし。どうですか？これで大体の子供は喜ぶものです……まあ、今の生徒たちはどうかは知りませんがね」

それだけ終わらせると教壇へと近づいていって位置を修正する作業を始める。足利伊万里はきょとんとしてそんな蒼疾を見ていた

「あゝあつ、かなりいい先生だったとしか聞けなかったねえ！」

「そうだねえ！」

そんなことを言いながらほかの生徒たちが帰ってくる。

「おやおや、いまさらお帰りですか？掃除はどうしたんですか？」

「せせせせせ先生！？」

「いつここに！？」

「少し前ですが……それが何か？」

「い、いえ、実は全員でトイレに……」

「そうですね、あなた方がもどってきたのは左側、トイレがあるのは右側ですか？」

誰も何も言えずに黙って掃除へともどる。そして、数人がすでにいた足利伊万里へと小声で話しかける。

「先生に何か言われなかった？」

「え？う、うゝん、意外といい先生じゃないかな？」

「！？」

それだけいって前よりも掃除をがんばっている足利伊万里。そんな彼女は頬を少しだけピンク色にそめてうれしそうだった。

そして、渦中の蒼疾はあごに手を当てていた。視線の先には教壇が……

「……微妙ですね、角度が」

大半の生徒は急いで掃除を終わらせようとしていたのだった。

第三話：「担任は……」（前編）」（前書き）

七海「めつきり私たちの出番ってなくなっちゃいましたね」奈々枝
「まあ、しょうがないんじゃない？　といたいけど、予定じゃ一切
登場しないで終わりまで突き進むそうよ」菜々子「え？　それ本当！
？」七海「非常に危険な臭いがぴんぴんしますね！」菜々子「まあ、
待ってあげばきつと出させてもらえるよ！」奈々枝「本当かしら？」

第三話：「担任は……（前編）」

第三話

「先生！そういえば担任はどうしているんですか？」

何気ないその会話が問題だったのだろう……。一週間ほどたつて篠原岬いわく変な（精神的に異常がありそうな）先生である天川蒼疾との付き合いもわかってきていたための油断だったに違いない。生徒たちに対して連絡をしている途中だった蒼疾が無表情になった。

「……担任、ですか？わかりました、そこまで先生のことが嫌いだというのなら言ってくればいいものを……」

「そ、そこまで言つてませんけど、先生？」

ほかの生徒を代表して足利伊万里が告げる。

「いえ、いいでしょう……。つれてきますが、クレームなしでお願いしますよ？先生に対してクレームをつけれるのはPTAぐらいですから」

話は変わるが、ほかのクラスでは非常に人気の先生であり、大体の女子が蒼疾に対してかつこいいとか尊敬できる先生だと言っているし、先生の受け持ちのクラスでうらやましいとか蒼疾のクラスは言われていたのだった。まあ、クラスメートとしては授業は認めるがいまだにひねくれた性格である蒼疾がとりあえずいい先生ではあるが人としていいかどうかはわからなかったという意見が主流である……。一部を除くが。

携帯電話を取り出してどこかにかけ始める。それを見て生徒たちが啞然としているがもちろんそんなことは気にしていなかった。

「ああ、ええ、はい。生徒たちがどうしても、どうしても来てほしいと……。私としては先生の出る幕じゃないと思っていたんですが……。はい、そこをどうしても……。ええ！そうですか！来てくださいますか！ありがとうございます」

声はかなり弾んでいるようだったが顔色はすごく悪かった。グロイ映像や画像を見た後、某アーティストが歌っているときの表情みたいな顔をしている。

「はい、では午後からの授業の国語、よろしく願いしますね」
電話を切って生徒たちへと視線を向ける。

「……え、あのような魔王を光臨させたことを後悔してください。先生の心に傷を残したことを後悔してください」

魔王？と誰かがつぶやいたが蒼疾はそれを無視する。

「先生が呼んだのでは？」

篠原岬がそうつぶやく。

「発端を作ったのはあなた方ですから……先生は一生懸命今日まで努力してきましたがどうやら無駄だったようです……精神的なケアは後ほど行ってあげますから、一応、緊急時として先生の携帯電話の番号を教えておきます。携帯を持っている生徒たちはすぐに書き記して置いてください。はつきり言いますがそれでも先生がどうかして上げれるとか甘い考えはしないでください。教師たるものが助けることが出来る範囲は妖怪に教われた時とか、不良に教え子がやられてるときとかそのぐらいです」

それはメディアでしようとか誰かがつぶやくがそれも無視。

番号の書かれた紙を渡していき、生徒はそれをすべて書き写していた。すでに、蒼疾の肌は青白くなっていて気分が悪そうだった。

「……ああ、それと……」

生徒をざっと見下ろして一人に目をつける。

「あなたは確か榎本小夜さんでしたよね？」

「え、ええ」

顔色が悪く、体育の授業もよく休んでいるような生徒だった。目をつけた蒼疾の瞳がきらりと光る。

「あなたが一番危険ですので、出来れば今すぐ、それが無理なら四時間目までに保健室に来てくれませんか？」

「な、何ででしょうか？」

「それがあなたのためだからです」

理由を言わずにため息だけをつく。うそは言わない先生なので小夜以外の生徒たちはあの先生を脅かす教師の顔が見たいと思っていた。希望をもっているということなのかもしれない。小夜はどうするべきか悩んでいる。

「ああ、先に言っておきますが好奇心で人は滅べますからね？パンドラは箱を開けて後悔してますから。まあ、セクハラは警察に、それ以上だと感じたならば自衛隊、または地球防衛軍を呼んでください……」

そこまで言った蒼疾の携帯がなり始める。びくつと蒼疾はしながら携帯を手に持ったのだった。

「……はいはい、あ、え？今学校に向かっています？はあ、わかりました、え？榎本小夜？え、えっと……」

ちらりとだけ榎本小夜のほうへ視線を向け、彼女はびくついた感じで蒼疾を見た。

「いえ、彼女は今日は欠席です……ああ、それと、具合が悪いので私は保健室で休んでおきますので……はい、はい、お願いしますね」

失神寸前みたいな表情となっていてかなり具合がわるそうだった。榎本さん、選択の余地は先生の視点からはありませんが、ここにありますか？」

よろよろとなったところで足利伊万里が席を放れて蒼疾を支える。「だ、大丈夫ですか、先生？」

「……いえ、大丈夫ではありません……悪いですが、保健室までお願いできますか？」

「わかりました」

「では、榎本さん、あなたはここに残るんですね？」

蒼疾の目は死ぬのがわかって巨大隕石にぶつかっていく人を見ているようなものだった。

「い、いえ！私も具合が悪いので保健室で休みます！」

あわてて榎本小夜は蒼疾の元へとやってくるがそんな榎本小夜を

止めて、かばんまで持つてくるように告げる。

「……………いいですか、皆さん……………彼女は欠席しているという事でお願
いしますよ」

「はあ、わかりました」

居残り組みとなった篠原岬が鷹揚にうなずいたのだった。

「先生、何で榎本さんを保健室に連れてきたんですか？」

保健室の先生があくびをしながらなにやら書類へ書き込んでいく。
「おや、足利さんがそのようなことを聞くのですか？先生の話、聞
いていませんでしたか？」

「聞いてましたよ」

「では、話の途中でセクハラがあつたら警察という部分もあつたで
しょう？」

「ええ、ありました」

そこで榎本小夜へと視線を向ける。彼女は青白い肌をびくつとし
て驚かせていた。

「実は、先ほどお呼びになった先生は肌が白い生徒などが大好きで
ですね…」

「まさか、セクハラを！？」

それに対して首を振る。

「いいえ、彼は見えているだけです……………それより、保健の横島先生、
今日は生徒が増えますよ」

「……………わかりました」

それだけ言つて再び黙りこくつた横島。書類を書いていると思わ
れたがどうやら漫画、何かの同人誌を書いている途中らしい。すで
に終わりが近いらしく『f i n』という文字まで書こうとしていた。
「そろそろわれわれのクラスの担任がどこかのクラスの国語を担当
しているころでしょう」

ああ、おぞましい餌食になった生徒さんにも心のケアが必要で
すね……………といった調子で蒼疾はため息をついていた。

「では、足利さん……あなたは健康体なので授業に戻った方がいいかと思います。あなたのような成績優秀者がいなかったらほかの先生も悲しむでしょうから」

「そうですね？」

照れたようなしぐさを見せ、頭をかいている足利に蝶の吐息みたいなため息をつく。

「ええ、そうですね……しかし、五時間目にある国語の時間帯、危険を感じたら急いで保健室シエルターに来たほうがいいかと思います」

「はあ、わかりました……保健室ってシエルターって読めるんですか？」

「さあ？それは人それぞれです」

「そうですね……じゃ、行ってきます」

それだけ言って足利伊万里は保健室を出て行ったのだった。

「逝ってきますにならないればいいんですが……」

「あの、先生、私が担任教師の好みだからって別に大丈夫ではないんですか？別に身体を触られるとかそういったことはないんですね？」

欠席として扱われることになんだか憤りを感じながら榎本小夜はベッドに寝転がっている蒼疾へと質問をぶつけた。

「ええ、まあ、たいていの人はそう思うはずですが……タネをばらすとですね……」

近づいてひそひそと耳打ちする。

「そんな馬鹿な……」

「……事実です、信じなければ結構ですが一応先生のクラスの生徒ですから情けで助けてあげることになりました」

「……そんな小説とか漫画とかでしかないような設定が存在するんですか！？」

釈然としない気持ちの榎本へと続けて蒼疾はいった。

「まあ、それはおいておくとして……せっかくだから寝ませんか？」
「え？」

「保健室ですし、今日は静かです」

「……」

榎本小夜が周囲を見てみると横島は姿を消していて机の上には『薬補充のため不在』と書かれている紙がのせられていた。どうやら先ほどの同人誌をどこかへ持っていたようだ。

「わ、わかりました」

そういつて榎本小夜はかばんを床において蒼疾と同じベッドに入る。

「おや、こちらがよかったのですか？ああ、もしかしてよく来るから指定席になっているのですか……これはすみませんでした」

「え？」

「では、先生はこちらのベッドで寝ますから……おやすみなさい」

「……」

蒼疾は隣のベッドにのつてすぐに眠ってしまった。

「……………」

なんだか間違っていた自分が恥ずかしかった榎本小夜はまるで不貞寝するかのようにこれまで蒼疾が寝転がっていた場所で眠りに落ちたのだった。

第四話：「担任は……」（後編）」「（前書き）

七海「さて、ここで問題です！今作者が欲しいものはなんでしょうか？」奈々恵「金？」七海「黒すぎます！」菜々子「わかった！社会的地位！」七海「それも黒いです！答えは……後書きで！」

第四話：「担任は……（後編）」

第四話

授業を終えるチャイムが鳴り、榎本小夜は目を覚ました。

「あれ？」

「お目覚めですか？ちなみに今は三時間目の始まりです」

気がつけば病院の一室みたいにたくさんあった九つのベッド……
無論、榎本小夜が眠っていたベッドも含める……すべてが埋まっていた。

「これって……」

「比較的精神面が弱い人はこうなります」

なぜだか白衣を着ている蒼疾が榎本小夜へと降りるように促す。

「これで本当かどうかわかりましたか？」

「え、ええ……」

うーん、こわいよーとか戦場の救護テントを思わせる言葉も飛び交っていた。

「あとあの先生が今日受け持つ授業は私たちのクラスだけですし、二年三組はなんとか大丈夫でしょう。予想範囲内で被害者は収まりそうです」

いまだに信じられないなあと思いながらもソファアーへと移動。ソファアーに寝ていたほかの生徒がベッドへと蒼疾に運ばれていった。

「……じゃ、五時間目終了まで暇なので先生に自己紹介をお願いできますか？」

「え？自己紹介ですか？」

「ええ、先生は残念ながらいまだに生徒たちの大半を知りませんから」

教師としてそれでいいのかと思われるかもしれないが一応それで教師としてやっていけているのでいいのだろう。

「えっと、榎本小夜です。好きなものは怖い話で苦手なものは日光

です」

「怖い話ですか……残念ながら先生は怖い話は大嫌いですので遠慮してほしいですね」

「そうなんですか？」

意外そうにそういつてにこつと榎本小夜はするのだった。

「かわいいですね」

「かわいい、ではないと思います。表現がおかしいです」

「そうですか？」

そんな他愛もない話で時間は過ぎていったのだった。

「久しぶりですね、皆さん……どうでしたか、あなたたちの担任は？」

人を小ばかにしたような目線をクラス全員に向ける。

「……先生、私たちが間違っていました」

篠原岬など疲労困憊というか、嫌悪感丸出しの生徒が殆どで、榎本小夜ともう一人は普通の表情だった。

「おや、足利さんは大丈夫だったようですね？」

「はい、ちよつと怖かったので図書館に行つてサボってきました」

「生徒の見本としてはいけません、私からの見解ですと賢い判断です……ん？」

それだけ言つてから蒼疾は黒板に何かを書き始める。

「先生、それは何ですか？」

「……そういった質問は先生がすべてを書き終えてから言つてください……はい、読んで」

そこには『はい、ではこれからこのように筆談で会話しますから盗聴されている恐れ大なので……わかりましたか？』

生徒たちはぎょつとしながら無言でうなずいた。それを確認してから蒼疾は続きの文を空いているスペースに書き込む。

『クラス全員でこれから盗聴器を探します。見つけた人は音をたてずに持つてきてください。わかりましたか？』

全員がうなずいてから各自急いで探し始める……

そして、十分後、足利伊万里が比較的中央の生徒の椅子の裏から盗聴器を蒼疾の元へと持つてくる。

「……」

それを無言でとつて足でつぶす。

そして、再び黒板へと文字を走らせる。

『はい、今のは予備として考えられますので探し続けてください……担任が教室のどこにいてどうしていたかわかる人たちは心当たりがありそうな場所を探してください』

再び探しはじめ、次は比較的早く発見された。

教壇の裏につけられていたのだ。

「……」

それも無言で破壊し生徒たちに手で座るように指示をする。

「はい、ではまたあの先生が来てほしいなと思う人は手を挙げて」

「……」

誰一人として手を上げなかった。

「ああ、これって意外と生徒たちのお仕置きにも使えるかもしれないませんねえ……いえ、これはあくまでお仕置きですので泣こうとしなくて結構です」

それだけ言つて蒼疾はため息をついた。

「はあ、まあ、一時間ほどお風呂で丁寧に身体を洗えば忘れることが出来ます。普段からお風呂に入っていない人は今日は入ったほうがいいですよ」

「いつも入っています」

「そうですか、それなら結構です……ああ、それと榎本さん」

「はい？」

首をかしげる榎本小夜に蒼疾はいつもの調子で言ったのだった。

「あなたは制服をきちんと洗ってください。非常ににおいが染み付いてしまっているでしょうから」

「ええっと？どういう……」

そこまで言つてふと、とまる。ああ、先生が少しだけ寝ていた場所に寝たから先生のおいがうつつたと思つたのかなあとそんなことを榎本小夜は思つたのだった。

「大丈夫です、気にしてませんから」

「そうですか、先生は薬品のおいは駄目ですから白衣を着てましたけどね」

そつちか！と心の中で突っ込んでおく。ほかの生徒は納得していた。

「先生としては非常に残念なことで、皆さんには喜んでほしいのですが、明日から担任がきちんと来るといつていて非常に美少女がこのクラスに揃つていてうれしいとおっしゃられていました」

「……………」

クラス全員の顔が引きつる。

「……急ですが、先生は旅立とうかなと思います。たぶん、今度帰ってくるのは本年度が終了してからだろうと予想されます」

「え！？」

逃げる気だと一瞬で理解し、野次が飛ぶ。

「逃げないでください！」

「それでもあなたはこのクラスの副担任ですか！」

そこまで言われて仕方がないといった調子でため息をついた。

「しょうがないですね、それならまた病院にいてもらいますか」

「病院？」

「ええ、実は担任の先生はこれまで奥さんに病院送りにされていたんですよ」

どんな恐ろしい奥さんだ！と誰かが突っ込もうとしたのだろうが、誰も突っ込まなかった。なぜならその恐ろしい奥さんによってこのクラスの平和は保たれるに違いないだろうからだ。

「また、今日のことを担任の奥さんに伝えておきます。残念ですね、せっかく担任がやる気を出していらしたのに」

「いえ、先生のほうがまだ断然ましです」

「そうですかそれならいたし方ありませんね」
携帯を取り出してダイヤルを開始。

「はい、では明日も元気に会いましょう。さようなら」
遠くのほうで救急車のサイレンが鳴り響いているが誰一人として騒ぐことなく放課後となった。

「ああ、最後に言い忘れていましたが携帯電話を使用しなかったことを先生はほめたいと思います。すごいですよ、皆さん」

それだけ残して蒼疾は消えた。しかし、クラスはしーんとなっていた。このクラスの実に九割が助けを求めて電話をしていたのだが蒼疾は教壇に携帯電話を置いていたのだった。

第四話：「担任は……」（後編）「（後書き）」

答えは感想DEATH。いいじゃないですか、栗林だって緑色の龍に頼んでパンツもらったんだし……卑屈になってすみませんでした！

第五話：「靡く人」（前書き）

七海「さてさて、あれから感想なんて一切ありませんでしたが」奈々恵「そりゃそうよ。考えが甘い」七海「敢えて逆を目指します」菜々子「逆？」七海「そうです！これから先一切評価されないままでこの物語どこまで突き進めるのか！実に見所あると思いませんか？」奈々恵「それってただ単にこの小説がいかによいか体现してるだけじゃない？」七海「いえ、それは違います。自主規制の。をいれるか入れないかの違いが生じると思われます」菜々子「じゃあさ、途中評価されたらどうするの？」七海「それは……」奈々恵「もちろん、七海が責任とってここからいなくなるということで」七海「ええっ！？」奈々恵「そりゃそうでしょ？さあ、開始！」

第五話：「扉く人」

第五話

天川蒼疾は一朝一夕学校の教師である。ひねくれたような性格だがその性格が出ているところはいまだにHRのときだけ。授業中はまじめであって勉強が出来る生徒、出来ない生徒から尊敬のまなざしを一身に受けている。

そんな天川蒼疾は職員室でも比較的普通というか先生たちの評価はよかった。

「先生、今日もまた居残りですか？」

教師歴二週間大久保孝子（教科は生物）は白衣の状態で話しかける。

「ええ、大久保先生は帰るんですか」

「はい、お先に」

「最近は物騒ですから気をつけてくださいね」

「ご忠告ありがとうございます」

そういつて大久保孝子は職員室を出て行ったのだった。後に残っているのは蒼疾だけだ。

「そろそろ帰りますか……」

立ち上がるうとして職員室の扉のところに自分のクラスの生徒がいることに気がつく。

「おや、あなたは……」

いまだに全員の名前と顔が一致していない蒼疾は一生懸命書類をめくっているが、そんなことすでにクラス中では周知のことなので相手は自己紹介を始める。三日ほど蒼疾と話していないと本気で顔と名前を間違えてしまうので蒼疾に対して三日以上話したことのない生徒は一応のところいなかった。

「石井舞です、先生はもう帰るところですか？」

「そついう石井さんは？」

一生懸命ノートになにやら書き込みながら蒼疾はたずねる。

「私ですか？私はちよつとまだ用事があります」

帰らないということなのだろうととって蒼疾は帰り支度をやめる。生徒より先に帰るのは嫌いというか、徹底して生徒よりは絶対に早く帰らないという主義者なのである。

「相談ならありますよ？一応あなたたちのクラスの副担任ですからそれだけ言つて近くの先生の椅子を適当に持つてきて進める。」

「いえ、実は音楽室の扉がしまつてしまつて……」

「ギャグですか？」

「え？」

「いえ、いいですから続きを」

コーヒーを口に運びながら石井舞にもついで来たコーヒーを渡す。どうも……ゆつくりしている場合じゃないんですけど」

「それなら簡潔に話をまとめてください。先生も暇ではありませんから」

ずずーっとコーヒーを飲み干してから顔をしかめる。どうやら苦かつたらしい。

「えつと、友達が音楽室に閉じ込められてしまつたんです」

「それはまた……いじめですか？」

「違います」

「学校の七不思議？」

「それも違います……多分」

「それなら……」

まだ何か続けようとしている蒼疾よりも先に話を続ける。

「ちょうど私が出ようとしたら扉がしまつて、それで降びくともしないんです。一応、中にいる友達とは話は出来るんですけど……」

そういうと蒼疾は驚いたようにコーヒーを飲んでいる石井舞を鼻で笑っていた。

「ほお、それなら石井さんは余裕をもつてご友人を助けに行こうとしているのですね？コーヒーを飲む時間はあると？」

「……あの、これは先生が……」

「飲むか飲まないかはあなたの自由意志ですから……」

それだけ言っていると蒼疾は立ち上がる。石井舞はばつが悪そうな顔をしていた。

「さあ、ご友人を助けに行きますよ、そこにある鍵をとってください」

「わかりました」

石井舞が鍵に手を出している間、何かを思い出したかのように蒼疾は口を開き始めた。

「ああ、そういえば音楽室は携帯で助けを求めようにもなぜか圏外になりますし、ご友人お一人ですか、閉じ込められているのは」

石井舞がうなずくのを確認して面白そうに笑う。石井舞は不思議そうな顔をしていた。

「それはそれは……音楽室はそろそろ電灯を変えないといけないという時期でしたからねえ……一人でしたら心細い上に窓から叫ぼうにもあちら側には誰も通りませんから」

「……」

徐々に悪いことをしているような感じを覚える石井舞が走り出す。

「ご友人を心配してのことですか……輝かしい友人愛ですね」

何度かうなずいて蒼疾も石井舞の後を追って走り出したのだった。

「それで、ご友人はまだ中に？」

「はい」

「やっと助けがきたあ……」

そんな声が聞こえてきたが、蒼疾は無視して扉に手をかける。

「おや、本当に開きませんね」

「でしょう？」

「もう、いつそのこと何も聞かなかった、聞こえなかったということとで帰りますか」

「そ、そんなあ！」

そんな声が聞こえてきて蒼疾は近くにあった机を持つてくる。

「これは完全に扉が固定されていますね……中にいる人が誰かは知りませんが……」

「ひどいですね！それでも先生が受け持っているクラスの生徒です」
「声では何とでも言えます。オレオレ」とかそれに準ずる何かで大金をせしめる連中もいますから……とりあえず、危ないのでいてください」

「先生何を……」

「このことは校長に秘密ですよ」

それだけ言々と蒼疾は扉に机をぶつける。ものすごい音がしたがほかに生徒はおらず、すでにほとんどの生徒たちが帰っている時間帯だった。

五分ほどで学校破壊は終了し、扉が中に倒れこむ。

「……さて、大丈夫ですか？」

「え、ええ……天川先生って意外とすごいことするんですね」

啞然とした調子で中にいた生徒、芹沢東葭せりざわとうかが顔を出す。蒼疾の足元にはまるで戦争後の家の扉が転がっていた。

「別にすぐくはないですよ、人命がかかっていましたから」

「人命って大げさな……」

「いえ、現実には似たような話を校長先生から聞いたことがあります。十年ぐらい前行方不明になったまま見つからない子がいると……だから、そのようなことがあったら大変だったので急いで助けあげました……この学校の六不思議のひとつです」

「……」

石井舞と芹沢東葭は固まって蒼疾を見ていた。この先生がうそをつかないというのはわかってるが、校長先生がうそをついている可能性もあるからなあと石井舞がつぶやく。

「とにかく、職員室に行きましょう。ここにいたら犯人だと思われるてしまいます」

「実際、そうなんですけどね」

「わかりました」

こうして、学校破壊を行って（ちゃっかり手袋を着用していた）さらっと職員室へと三人は向かったのだった。

「ところで、あそこで何をしていたんですか？」

「え、えっと、それは……」

言いにくそうにそれだけ言って蒼疾はうなずいてノートに何かを書き始める。

「なるほど、お二人がそういった関係でしたか……それは言いづらいですね」

「そ、そういった関係って何ですか！」

「いえ、気にしないでください。先生はこう見えても口が固いほうですから」

「……」

さあ、もう帰ってくださいとそれだけ言って二人の生徒を職員室から出す。

「やれやれ、今日は私も早めに帰ったほうがよさそうですね」

なにやら音楽室のほうから誰かが歩いてくるような音が聞こえてきて急いで身支度を終える。すでに歩く音は消えていた。廊下を一度出てみるが蒼疾は足を止める。

「……ふむ、下足箱のほうに先回りされている可能性もありますね……」

言っが早いか蒼疾は職員室の電気を消して窓から外に脱出したのだった。

第五話：「靡く人」（後書き）

後書きまでやってきてくれた方々、ありがとうございます。実はここまで読んでくれた人に尋ねたいのですが、『ヴァンパイアはヴァンパイアであることが罪であり誇りである』という言葉を知っている人がいたらお手数ですが兩月までメッセージをお願いします。あ、もちろん小説の感想とかでもよろしいので待っています！

第六話：「信じる生徒は……」（前書き）

七海「日々、救われぬ時間を過ごしてます。いつ評価がくるか……」
奈々恵「自業自得とはまさにこのこと……」七海「いや、あなたが悪いですよ！」菜々子「世界は愛で回ってる」奈々恵「先輩がおかしくなつた！」七海「これも蒼疾さんのせいです！」奈々恵「まあ、九割はそうだとおもうけどね。一割は七海のせい」

第六話：「信じる生徒は……」

第六話

「え、次のうちあなたが信じられるものを答えてください」

現代国語の問題を書き終えて唐突に蒼疾がクラスをぐるつと見る。もちろん、蒼疾がこんなことをするクラスは彼が受け持っている三組だけである。

「一、お金、二、友人、三、自分自身、四、その他……じゃ、今日は……」

誰にしようかと探す。普段だったら足利伊万里が自ら手を上げたりするのだが今回は真剣に悩んでいるようで制限時間内に手を上げることがなかった。

そういう理由で蒼疾が当てたのは珍しく黒板をすばやく書いていた舞錐好だった。

「最近、めっきり出番がなくなったような気がしますから」

「お、お情けであたしを当てたんですか!？」

「いいえ、珍しく黒板を書いていたからです」

「……信用できないんですけど」

「信用してもらわなくて結構です。先生とあなたたちとの間にあるものは教えてあげてお金をもらうと教えてもらってお金をあげるというギブ&テイクで成り立っています」

当然だといわんばかりの口調だった。うわっ、黒い!とか叫ぶ生徒もいたがどこ吹く風みたいな顔をしていた。

「おかしいです、そんなの。信用とか絆とかじゃないんですか?」

それに対して驚いた表情になる蒼疾。

「おや、これは珍しいですね……まさか、舞錐さんからそのような言葉が出るとは……」

「そうでしょうそうですね」

もっとほめてくださいといった調子で舞錐好は胸をそらす。多分、

それは皮肉だよと誰かが教えようとしたのだが舞錐好は聞いていないようだ。

「では、ここでひとつ面白いお話をしてあげます」

そういつて取り出したのは写真の貼り付けられたボードだった。どうやらブランドもののバックを受け取っているようだ。

「これはK、Mさんがバックを手に入れたときの写真です……プライベートのために目のところに黒線を入れさせてもらいました」

「……」

クラス全員がそれが誰だかわかっていた……いまだにわかっている本人以外は。

「はい、それでここにうつって顔がにこにこしている哀れな男の子が表向き、彼氏であるという人物です。裏ではこの女子高生の金づるでしかないという哀れな男子ですが……先生もこんな男子にはなりたくないですね」

ここで気がついたようで本人は顔を真っ青にしていやな汗を流している。

「それで、彼とのデートが終わった後にわかれて彼女は友人にメール。内容は『マジ、ちよろい』ブランド物ゲット』三井君だけに貢いでくれる感じ?』はい、彼女ほど素直な人間はいません。この写真の彼女とセンスのいいギャグに拍手をしてください」

「……」

誰一人として拍手をしようという気はないようだった。

「わかりました? ほら、この話が理解できたというのなら拍手をしてください」

静かに拍手が行われ(クラス全員の視線が舞錐好へと向けられる)先生がそれを止める。

「さて、では……この話はここで終了。ほかに答えてくれる生徒は……」

「はい!」

足利伊万里が手を上げる。

「おやおや、やはり熱心な生徒です、足利さん、どうぞ答えて下さい」

「私は四番を選びます」

その他とかかれており、蒼疾はあごに手をあてて足利伊万里へと向き直る。

「ほお、具体例は？」

「それは、愛です！」

おおっという声が聞こえてきた。足利伊万里がその言葉を発するときに恥ずかしがってつまらなかつたためである。

「ほお、愛ですか？」

それを鼻で笑う男性教師天川蒼疾。彼が生徒に教えることは多分、教科書のことだけだろう。生き方とかそういうったものを彼は教えるような性格をしていない。

「ええ、お金だつて友人だつて自分自身だつて信用するには愛が必要です。お金が好き！これは少なからずの愛です！好き 愛です！」

蒼疾はそれを聞いてあごに手を再びつける。

「……そうですね、そのような見方もあるということですね」

「でしょう！」

おおっという声がここでまたあがってきた。あのひねくれ教師を納得させたからである。それに対して蒼疾は内心むっと来たのだが納得してしまったので話を続けさせる。

「ほかに例をあげてください」

「えつと、た、たとえば人を好きになつたとします」

「ええ、それで？」

緊張しているのかかくとした調子で頬を真っ赤に染める。それを見てクラスの全員（蒼疾をはずす）が足利伊万里は恋をしているということに気がついていた。

「たとえ、それが些細なことだつたり小さいころの約束とかで……」

「ああ、先生後ろのほうは経験済みです。まあ、それがすごいことになつてここに逃げてきたんですけど」

「え？」

「いえ、妄言でした。続けてください」

「こほん、本当に些細なことでもその相手はそれがうれしくてうれしくてたまらない時だってあるんですよ」

「あ、それわたしわかるかも」

そういつて白い肌の榎本小夜が立ち上がる。

「初めはとっつきづらい人だなあと思っていたんだけど実際話してみると意外といい人だったりすること！ギャップがすごいなあっていうか、かなり優しい人じゃないかなあって思っちゃって気になることない？」

「ああ、それあるかも」

クラスの女子たちはそういつてうなずきあっている。しかめっつらをして蒼疾はその話に茶々をいれる。

「そうですか、そんな人はいるとは思いませんけどねえ」

蒼疾がそういうと榎本小夜は笑っていたのだった。

「まあ、ともかく、愛が重要であるということは否定しておかないであげましょう。先生はそこまで物分りが悪いほうではありませんから」

しかし、顔はしかめっ面だったので頭では理解してるが身体では拒絶しているという矛盾したことが蒼疾のなかで起こっていると生徒全員がすぐにわかった。

「ま、それならそれでかまいませんが……逆に信用できないことを何か一人ずつ言ってください」

そういつて蒼疾は左の席から当てていくのだった。

始まった信用できないものリレー……上がってくるのは日本の政治、金の問題、男、天動説、地動説、宇宙人がいるという証拠にネッシーの映像……etc

「おやおや、最後までいったのにこのクラスの副担任が出ませんでしたね」

「まあ、先生はうそをつきませんからね。信用は出来ます」

「そうですか、まあ、誰か一人でも先生の名前を出したら担任をまた呼び出そうと思っていましたから」

全員が震えだしたのだった。無論、言った本人もおびえている。

「せ、先生も震えてますけど？」

篠原岬が突っ込むが蒼疾は首を振っていた。

「これは人間として当然の行為かと……」

「それだけは人として納得できると思います」

しばしの間クラスが一致団結（足利伊万里と榎本小夜は首をかしげていた）し終えて蒼疾がため息をついた。

「まあ、そのぐらいにしておきましょう。いずれ、チャイムも鳴りますから」

そういった直後にチャイムが鳴り響く。

そんな午後のひと時。

第七話：「次回は家庭訪問です」（前書き）

七海「お母さん、お父さん七海はなんとか生き延びる事が出来そうです」奈々恵「何々？どうしたの？」七海「もとはといえば奈々恵さんが悪いんですよ？」奈々恵「知らないわね……ところで菜々子先輩、みなくなったわね？」七海「そうですね、どうしたんでしょっ？」

第七話：「今回は家庭訪問です」

第七話

帰りのHR。蒼疾はいつものように教壇に立つて書類を配り始める。その表情は億劫そうで『誰か手伝ってくれる人いないかなあ』といったものだったが生徒たちはあさつての方向を向いて誰一人として蒼疾と目を合わせようとしていなかった。慣れてきたものである。

「家庭……訪問？」

いつもだったら真つ先に教師の手伝いをしたりする足利伊万里がそうつぶやく。彼女は渡されたプリントを細部までじっくりと読むといった珍しい女子高生なのでこういったときだけは教師の手伝いなどをしなかった。

「ええ、そうです」

「でも、一年生のときに行いましたけど？」

そうです、やりましたよいまさら何をどうするんですか！という声があるところから聞こえてくる。うるさそうに手で制して教壇のため息をひとつついた。

「すでに決定事項。今年から毎年一度は行われるそうです。昨今、家庭内の事情……まあ、だいぶ違いますが親との仲のよさや自宅での学習時間、こういった職業につきたいかどうか、そういったものを教師が詳しく知っておくことで後の進路などに使用するというのが目的だそうです」

「そうなんですか？」

足利伊万里がいまだにプリントを見ながらそうつぶやく。

「そうなんです、なので、来週から行いますので各自しっかりと保護者の方々に説明をしてどのような時間帯に来てほしいか希望を取ってきておいてください。ああ、ちなみにあなたたちの中には期限を越えてもたらだと期限を引き延ばしてくれるとか甘い考えを持

っている人がいそうなので……」

「せ、先生！何であたしを見る！？」

舞錐好が顔を真つ赤にして両手を机にたたきつけていた。

「一番信用ありませんからね」

「……ひどい！」

「まあ、謝つてほしいのなら明日の朝一番に先生のところにいつが
いいか教えに来てくださいよ……ああ、保護者がいないという人は
明日いつてきてくださいね。時間帯は何時でもかまいませんから」

その答えに対して一人の生徒が手を上げる。

「本当に何時でもいいんですかあ？」

先ほど蒼疾に見られた舞錐好が冗談を思いついたといった調子で
手を上げる。

「ええ、何時でも……それが本当に舞錐さんにとってお暇な時間帯
であればね」

近くの生徒が舞錐の口をふさぐとするがふさぐ前に彼女は口を
開けてにこりとした表情で大声を出していた。

「じゃ、深夜三時に来て♪約束だから♪」

「ええ、わかりました……ほかの方は舞錐さんを真似せずにきちん
と親と話し合つて決めてください。実質は三者面談、または四者面
談、ご兄弟や親戚などを混ぜた複数面談も考えられますが」

いや、考えられて四者面談まで（教師、両親、生徒）が最高だろ
うと考えたのだが口に出さないでおいた。なにせ、蒼疾はいろいろ
と突っ込んでくるからである。早く終わらないかなと思っている生
徒が大半であった。

「じゃ、ペットもオーケー？」

しかし、やたら今日は食いつきのいい舞錐好は手を上げながら質
問を開始。ほかの生徒たちははらはらしながらそれを見守っている
が、足利伊万里は勝手な想像をいろいろとしていてそれどころでは
なかった。

「ええ、もちろん。大丈夫ですよ」

「隣の家のおばさんも？」

「あなたが希望するならば、ああ、もちろん隣の家のおばさんがその時間帯に起きているのならばかまいません」

冷静にそう答え、周りの生徒たちを見渡す。

「無論、あなた方も舞錐さんのようなことをしでかしてもかまいませんよ……」

その言葉が舞錐好以外全員『責任は自分で取れ、俺は知らんぞ』に聞こえていた。

「実に有意義な時間を舞錐さんの家では過ごせそうですね……」

いやゝな笑みを顔面に貼り付けて蒼疾はニヤニヤとしている。何かしら騒動が起きそうだなあとたいていの生徒たちが思っており、さらにその内訳としては絶対に舞錐さんの後にはとばかりがきそうなので自分の順番を置くのはやめておこうと決めていて残りは見に行ってみたいと思っていた。

「じゃ、今日はこれにて放課とします。くれぐれもこの書類はキチンと渡しておいてください」

「はい」

それだけ言ってクラスはいつものように騒がしくなっていた。

「先生」

足利伊万里が何か決心したような表情をしていた。

「来週の月曜日、学校終わってすぐで大丈夫だってお母さんからメールがきました」

そういつてシンプルなストラップがつけられたケータイを蒼疾に見せる。内容を確認してうなずく。

「おやおや、もうお決めになられたんですね……さすがにまじめです」
「えっと、家の場所とかわかりますか？」

「場所ですか？大丈夫ですよ。この前すべて調べておきましたから」
「そうですか、それなら大丈夫ですね」

それでは失礼しますと足利伊万里は去っていったのだった。

「先生！」

「今度はあなたですか…… なんですか、舞錐さん。最近出番が減ったからといってやたらに手を上げたりしないでください。気がつけば敬語さえ使わなくなっているじゃないですか」

「あ、わかる？」

ため息をひとつだけ、蒼疾はつく。

「日本語を読める方ならば外国人の方でさえわかりますよ。さらに言うならしっかりと語学について学んでいらつしやるので最近日本人より外国人の方のほうがちゃんとした日本語を話せるのですよ」

「しらなかったなあ…… あ、そんなことより言った時間に絶対にきてよね！」

「ええ、それはもちろんです。楽しみにしておきますよ」

手帳を確認しながら蒼疾はため息をついた。どうやらこのままの成績では親との喧嘩が期待できそうであると決め付ける。

「しかし、最近はいつかりと授業を聞いているそうなので先生としてはほっとしましたよ」

「まあ、一応は」

「その調子でがんばれとは言いませんが一進一退を繰り返してください」

「わかった、がんばるよ！」

じゃ、さよなら」と手を振って去っていく。

「やれやれ、実に家庭訪問が楽しみです」

それだけ蒼疾は言い残すと自らも教室を後にしたのだった。

第八話：「星付くさんのお宅ですね」（前書き）

七海「世界は地軸を中心に回っています……………気がつけばもう私人しか残っていない状況に！」

第八話：「星付くさんのお宅ですね」

第八話

「初めに訪問するのは星付さんの家ですね」

メモ帳を片手に持ちながら蒼疾は目の前に聳え立つ巨大な家を首をかなり傾けて眺めていたのだった。

「大きいですね、これが高校の校長が住む家だからでしょうか？」

星付睦……彼女の祖父は一朝一夕学校、つまり天川蒼疾が教師として教鞭を振るっている高校の校長先生である。

「これは粗相がないようにしておかなければ私の首などあっさりと飛びかねませんね」

恐る恐るインターホンを押す。しばしの間静寂が辺りを包み込んで庭に植えられている桜の木から鳥のさえずる声などが聞こえてきていた。

「はい、どなたでしょうか」

「私、一朝一夕学校の教師天川蒼疾です。星付睦さんの家庭訪問としてやってきました」

「少々お待ちくださいませ」

そして再びの静寂。遠くのほうからは夕方なのだが早速暴走族と警察がチェイスを始めたらしい……とまりなさいとかそついった放送が流れ始める。

「あの、天川先生、睦様はこちらに住んではいませんか？」

「そうなのですか？」

あれ、おかしいなとメモ帳を見る。住所はここであっているはずなのだ。

「ええ、睦様は学校の近くにあるアパートで一人で暮らしになっています」

「そうですか、ありがとうございます……」

ひとつため息をついて蒼疾は踵を返したのだった。

「星付さん、星付睦さん」

かなりぼろつちいアパートの一室にたつて蒼疾は扉をたたいていた。インターホンがなく、隣の部屋は扉が壊れていて中の部屋が確認できる。

「はいはい、あ、先生じゃんか」

「住所が間違っていましたよ」

それを指摘するとたははと笑う。

「そっかあ、だから先生来るの遅かったのかあ……せつかくケーキと
か用意してただけで全部食べちゃったよ」

「別にそれはかまいません……それで、ご両親とかは？」

「あいにく二人とも出張中。帰ってくるのはいつになるかわからないよ」

「それはしょうがないですね……では、二者面談ということでは」

中に案内されて蒼疾は静かに中へとはいり……

「これは、一体全体なんですか？」

「ゲームだよ。そのダンボールの中に入っているのがネオ。オ、
そっちがドリーム。ヤストであれがワンダー。ワンだよ」

「いえ、それはどうでもいいことなので……」

リビングの床はほとんどがゲームに埋められていて本棚とかには
すべてゲームのソフトが占領していた。

テレビ三台には最新機種がそれぞれ接続されておりオンラインで
も使用できるようになっているらしい。

「先生もスーフ。ミする？」

そういつて2Pのところにコントローラーを接続。

「いえ、私は格ゲーなどは結構です。それに、ハメ技するきまんま
んでしょう？」

「あ、わかった？」

「そのタイトルを見れば大体わかりますから……さて、今日は遊び
に来たわけではありませんよ」

「え？違うの？」

さも当然とばかりに今度は別のゲーム機を取り出していた。

「違います、家庭訪問ですよ」

「あ、そうだった……」

「これで成績が三番目というのが理解できませんね……」

「睦ね、大きくなったらゲーム会社の社長になるんだ！」

目をきらきらとかがやせながらそんなことを言う。

「そうですか、それはいいことですが……」

「それでね、他人をあごで使わせてせつせとゲームをつくってもらってバグチェッカーとかやるんだ」

夢を勝手にしゃべり始めるが、それをまじめに蒼疾はメモしているのだった。

「ふむふむ、それはすばらしい夢ですね……」

「あ、もちろん先生にもやらせてあげるから期待しておいてね」

「残念ながら先生の家にはゲーム機が置かれていないのでどのソフトをあなたが作ったとしても私は出来ませんよ」

「それじゃ、睦がどれかあげようか？」

最新機種をそれぞれ指差していたりする。

「何を言うんですか他人にこのような高価なものをほいほいとあげてはいけませんよ」

「でも、先生は他人じゃないよ。それに、まだ予備はあるから」

嚴重に鍵がかけられている隣の部屋を指差す。

「さすがに先生にもあそこには入らせてあげないよ」

「……結構です」

その後も少しの間いろいろと会話を交わし、蒼疾は立ち上がる。

「では、これで失礼します」

「もうかえるの？」

「ええ、あまり長居をしても迷惑ですし、この後も別の生徒の家に行かなくてはいけませんから」

「そっかあ、それじゃしょうがないね」

「ええ、仕方ありません……それでは」

立ち上がって転がっているソフトのパッケージを踏まないようにして家を後にする。

「またきてね」

「……はたして意図してここに来る女子高生とかいるんでしょうか……」

手を振る星付睦に手を一度だけ振って去ったのだった。

第九話：「次は足利さんの家ですね」（前書き）

蒼疾「人はみな、平等だとかいう人こそ、絶対に信用ならない気がします」伊万里「そうですか？」蒼疾「そうです。そして、有限実行を掲げてしまったために居場所をなくすというかわいそうな人がこの世界には五万といるのです」伊万里「そうなんですかあ……………」
「知りませんでしたよ」蒼疾「読者の方々も口から出るのは言葉だけではなく、約束も出ますので気をつけてください」

第九話：「次は足利さんの家ですね」

第九話

今、蒼疾のいる場所は足利伊万里の実家である。チャイムを押す前から玄関の前には足利伊万里が立っていた。

「おや、これはご丁寧にわざわざ外に出てくれましたか」

「先生が迷子になったら大変ですから」

「……失礼ですね、私はこれまで一度も迷子になったことなどありません」

案内されて敷居をまたぐ。そこには足利伊万里にそっくりな足利伊万里母が姿を現した。

「はじめまして、伊万里の母です」

「これはどうもご丁寧に……足利伊万里さんのクラスの副担任をさせていただいています天川蒼疾です。伊万里さんと同じでお美しいですね」

「そんな、照れますわ」

「それより先生、どうぞこっちに来てください」

そのまま中へと通される。

「それで、伊万里は学校ではどうでしょうか？」

出されたお茶に手をつけることもなく、おかれていた茶菓子に目もくれずにメモを取り出す。しかしそれを開かずにてにもつだけだった。

それを足利伊万里は母の隣にたつてときどきとした感じで見つめていた。

「……成績に関しては非常に優秀ですね、職員室での評価も非常に高く、名実ともに二年生の中で一、二位を争うような存在です。私としても授業中に何度も発言などをしていてこの前などは考えさせられるようなこともいつてくれました」

足利伊万里のほうを見てにこりと笑う。それに頬を染めて母親は

喜んでいようだった。

「まだ二年生ですがこれからの進路はどのようにお考えですか？」

「ええと、それはまだですが……伊万里は何になりたいの？」

「うーん、私は……」

ちらりと蒼疾のほうを見てからしゃべり始める。

「私はきよ、教師になりたいかなあって思ってた……ど、どうかな先生？」

「あらら、親より先生を頼りにしてるのね」

「べ、別にそんなのじゃないよ！」

蒼疾はあごに手を当てて考え事しているようだった。

「そうですね、伊万里さんが教師を目指しているのはすばらしいことなのですが……まあ、今はなんともいえません。教師になることも大変ですが、それ以後も大変なものです。私は比較的素直な生徒たちに恵まれたので今年は楽しく過ごせそうですね……あくまで今回は希望を取るまでですので早急に決めなくていいので、何かわからないことがあったら先生などに尋ねにきてください、伊万里さん、わかりました？」

「は、はいっ！」

背筋を伸ばして顔を真っ赤にする。

「……ところで先生」

「はい？」

急に足利伊万里母に呼ばれてそちらを見る。

「先生って独身ですわよね？」

「ええ」

「年齢は？」

「23歳……ということにしておいてください」

「彼女は？」

「いませんが？」

「ちょ、ちよっとお母さん!？」

足利伊万里が驚いた風に母を見るが、彼女はずっと流し目を蒼疾

に送っているだけだった。

「静かにしてなさいな、いつも天川先生のお話ばかりしているじゃない」

「ちょ、ちよつとお！」

「おやおや、これはうれしい話ですね」

さしてうれしそうな顔をせずにそんなことを言う。足利伊万里の顔はすでに真っ赤だった。

「それで、先生にお願いがあるのですが……」

「何ですか？私に出来ることがあるならばお手伝いしますけど……？」

「先生、どうか伊万里の……」

「お母さん！な、何を言い出すのよ！」
娘を無視して足利伊万里母は続ける。

「伊万里の父になつてくれませんか？」

「はあ？」

「と、言うത്？」

さして驚いたような感じもなく蒼疾は首をかしげる。足利伊万里は固まっていた。

「このこの父はいません。まあ、はつきり言いまして離婚をしまして……私の夫になりませんか？」

しばしの間蒼疾は考える。首に手を当てるといふ人からしたら珍しいであろう癖が出る。

「……このようなすばらしい娘さんにとっても綺麗な奥さんをもてるのはすばらしいことですねぇ……」

「ちよつと、先生まで！」

「失礼、この件はなかったことにしていただけますか？伊万里さんがご立腹のようで……まだ私のようなペーペーではあなたの相手を務めることができないと思っていらつしやるようですから」

「ち、違います！先生のことをペーペーとは思ってませんから！」

「まあ、伊万里さんはお母様のことを大切にしているようですから

ね……では、何かまたあつたらご連絡ください」

残念そうに足利伊万里母はため息をついた。

「そうですわね、今日のところは身を引いておくことにしましょう」

「ちよつとお母さん！」

「おほほ、このように娘もご立腹のようですから」

こうして、足利家の家庭訪問は終了したのだった。

「本当にすみません、先生」

「気にしないでください。冗談が好きなお母さんですね」

見送りということで足利伊万里は近くの道までついていく。冗談を言っていないというのは足利伊万里にはわかっている。

「足利さん、ここまで結構ですよ」

「そうですか？」

「ええ、最近は自宅前で教われたりする人がいますから気をつけてくださいね」

「わかりました」

夕焼けに消えていく姿を足利伊万里はずっと眺めていたのだった。

「残念だったわね、伊万里」

「お母さん……もう！あんなこと言わないでよ！」

「けど、もう少し押してたら先生はあなたのお父さんになってたわよ？」

肩に手をおいたが娘は頬を膨らます。

「いいもん！別にお父さんにならなくたって！」

「あらら、それじゃやっぱ伊万里の夫になつてもらつようをお願いすればよかったかしら？」

「お、お母さん！？」

「冗談よ、冗談」

足利伊万里とその母は小さな鬼ごっこを開始したのだった。
夕焼けが静かに沈んでいく。

第十話：「今度、転校生が来るそうです」（前書き）

蒼疾「日々のた打ち回るようにして私は生きていますが、世の中には賢く生きる人もいますよ」篠原「そうなんですか？知りませんでした」蒼疾「篠原さんは相変わらずそういったことを知らないのですね」篠原「いいじゃないですか、今ここで知ることが出来ましたから」蒼疾「まあ、いいとしましょう。消えてしまったと思われる人物達もどこかに痕跡とか残ってそうですから」篠原「先生、靴が落ちてました」蒼疾「まれに道に靴とか落ちているんですが……しかも片方……あれってなんなんでしょうか？」

第十話：「今度、転校生が来るそうです」

第十話

家庭訪問が終了し、新たな週が今週も始まるのだった。

「はい、じゃあ今日は皆さんに転校生が来ることを教えておきたいと思います」

朝のHR……天川蒼疾はいつもの事務口調で話を始める。それに対して篠原岬が手を上げる。

「先生、私たちの家庭訪問の様子は？」

「あなたたちの家庭訪問は特に取り上げることも特にありませんでした」

なんだか残念そうな感じなのだが、首を傾げつつも、篠原岬は再び発言をする。

「それは納得できますけど好の家庭訪問はどうですか？うわさじゃ結構すごいことになったって聞きましたけど？」

榎本小夜がそういう。それに対して蒼疾はため息をひとつだけついてから渦中の人物である舞錐好へと視線を移した。

「……先生もそれを期待していたんですが包丁が出てきたところでこれは取り上げてはいろいろ問題が起こるだろうと判断………いえ、決断しました」

「え？今なんと？」

「包丁」

「……」

「さて、くだらないことはこのぐらいにしておいて今日は先ほどいった転校生についての情報を開示したいと思います。今や情報を垂れ流す世の中ですから」

そういつて一人の生徒の写真を張り出す。

「来るのはこの人ですか？」

「そうです。資料によると名前は香椎民。スリーサイズは上から…

…おっと、失礼、失言でしたね……スルーしてください」

周りからの視線を感じて書類をめくる。特に足利伊万里からの視線が殺人光線ではないかというそんなものを感じさせる。

「趣味はスポーツ、料理。好きなものはしつかりとしたもの……よく意味がわかりませんね、嫌いなものはピーマン。高校生にもなつてしんちゃんみたいです。このたびの転校は親の都合だそうです。皆さん、適度に仲良くなつて上げてください」

篠原岬が手を上げる。

「先生、適度つてどのくらいなんですか？」

「そこにつっこみますか……適度は適度です。たとえば……そうですね、これから目をつぶって五秒間数えてください……質問は後で受け付けます。もちろん、口に出して数えちゃ駄目ですよ？五秒だと思つて手を上げてください」

まあ、いつものことだということで全員が目をつぶる。

「じゃ、3、2、1……GO」

全員が静かに心の中で数え始める。蒼疾は自分の時計で五秒過ぎるのを待っていた。

「……はい、全員終わりましたね」

手を上げたのを確認してから黒板に名前を書き始める。

「とりあえず、この中で一番体内時計が先生の時計と同じだった人は足利伊万里さんだけです。あとは全員ぶれていました、全員拍手」

意味不明な拍手に戸惑っていたが一応礼を言っている。そして、再び篠原岬が手を上げて発言する。

「先生、これがどういった結果をもたらすんですか？」

「適度は適度です。自分がこのくらいがいいなあと思つところで仲良くなるのをやめてください」

クラス一同が首をかしげる。

「？」

説明が不十分だったかと思つて蒼疾が再び説明をする。

「先生、仲良しこよしは嫌いです」

「それが理由ですか？」

「ええ、それが理由です」

いつものことだったが教室のあちらこちらからため息がこぼれていた。

「友人の保証人になって滅んだ人を先生は数人知っていますから。仲良しはこうなることが起きたりします。だから、あまり仲良くしないほうが身の為ですよ」

「それって仲がいいんですか？」

保証人の話になってか、蒼疾の目はきらきらしているような、していないような。

「いえ、知り合いになっていればこういったことが起こるということとを全員に教えておくことが教師の務めですから。ああ、その人今コンクリートと一緒にダイビングしていると聞きました」

「え？」

篠原岬の呟きを無視してクラスをざつと見る。

「友人関係には気をつけておいて下さい。思わぬところで揚げ足とが取られる可能性大です。友達が増えると楽しいですがそれに比例してトラブルのタネを抱え込むことも考えられますから。思い当たる方もこの中にいることでしょう」

そりゃそうだとクラス内の一部が賛同するがそれに反対の人もいるにはいた。

「先生、それって寂しい考え方ではないですか？」

例によってこういうことを言い出すのは一人しかいない。

「なんですか、足利さん？」

「だって、寂しいですよ。先生も友達とかたくさんいたほうがよくないですか？」

しばしの間そう訪ねられてふつと寂しい顔をする。

「確かにそういった考え方もありますが、先生は友人の数を覚えていません。これをゼ口とするのか、大人数とするのかはあなたがたの自由です……」

ゼロのほうだと誰かがつぶやく。

「今、ゼロだと思ったかた、覚悟しておいてください……」

「先生、そんな失礼なこと誰も思ってませんよ」

篠原岬が愛想笑いを浮かべながらそんなことを言う。

「……覚悟しておいてくださいね篠原さん」

「……なんですかぁ!？」

「いちいちうるさい生徒ですね……のちに補習授業を行ってあげますから……」

怪しげな指の動きをしながらそんなことを言う蒼疾。

「何のですか!？」

「とにかく、友人を選ぶことは先生のお薦めです」

篠原岬の言うことをもはや無視してそういつて話を終えようとするが、無視された死野原岬はいまだ蒼疾に噛み付いていた。

「先生も選ぶことが出来たらよかったですね?」

「篠原さん、最近よく余計なことを口ずさむようになって来ましたね?」

そういうと篠原岬は笑いながら右手を後頭部へと当てる。

「いやだなあ、先生と私たちの仲じゃないですか?」

嫌そうな顔を隠さずに蒼疾はため息をつく。

「ああ、そうですね、まったく、ついていないものです」

「そうですね? 私たちは先生の生徒になれてよかったですよ?」

「……よくそんな恥ずかしい言葉が口から出てきますね。私だったら顔から火が吹いて消滅していたこと頃だったでしょう」

「そうですね? 先生、着火するんですね。あははは……」

やれやれ、困ったものだといわんばかりのため息をつきながら篠原岬を見ると彼女はいまだに笑っていた。

「ああ、そういえば今日は私の誕生日なんですよ」

クラスメートからおめでとうという言葉が聞こえてくる。

「……女性っていつからか誕生日を毛嫌いするようになるのですが篠原さんはそういったことはないようですね?」

「そうですね、だって大人の女に近づいていますから」

「自分を子どもときちんと認めていることを素直に感心しましょう……ですが、二十歳になれば大人になったとか勘違いをする生徒が最近はおおいですね……大体、体つきだって貧相な癖して……おっと、失言でした。このことは……セクハラ扱いされて先生、独房行きですから」

「じゃ、黙っていてあげるから誕生日プレゼント私にください」
両手を差し出してくれくれのポーズをする。

「まったく、仕方がないですね……」

「やったあ」

「ばんっ！という威勢のいい音が響き渡り、そこでとある生徒が立ち上がった。」

「先生！それなら私が誕生日のときも……プレゼントくれますか？」
足利伊万里が手を上げてそんな発言をしたせいでクラス中からそんな声が聞こえてくる。

「……まったく、篠原さん一人だけというわけにもいきませんからね……すでに誕生日を迎えた人は手を挙げてください」

誰一人として手を上げなかった。

「まあ、まだ四月ですからね。仕方ありません……このノートに自分の名前と誕生日を書いておいてください。ああ、もちろん書きたくない人は書かなくて結構ですから。その分私の出費が減りますからね」

そうは言ったがすでに誰も聞いてくれていなかった。代わりといっただけだがクラスがざわつき始めていた。

「先生、私には何をくれるんですか？」

ノートが回っている間篠原岬は蒼疾のところまで歩いてやってきていた。

「そうですね、何がいいんですか？」

「いいですか、先生？女性のプレゼントは聞いちゃ駄目なんですよ？」

蒼疾は首をかしげる。

「先生が決めていいのですか？」

「ええ、お願いしますね♪楽しみにしてますから♪」

すっごくうれしそうな表情を見て蒼疾はため息をついたのだった。
「いたしかたありません。明日の朝、渡してあげますから楽しみにしておいてください」

「やった！ありがとうございます♪」

そんな二人を足利伊万里が見つめていた。

「……」

「どうしたの、伊万里ちゃん？」

「え？いいや、何でもないよ」

「そう？なんだか思いつめたような表情をしていたみたいだけど？」

「気のせい」

そして、いまだに話している二人のほうへと視線を送っていた。

「ああ、それなら哀がこもったプレゼントですね」

「そっちの哀はいりません」

「そうですねえ……まあ、明日のお楽しみということで」

第十一話：「転校生がやってきました」（前書き）

蒼疾「めつきり出番が少なくなったと思う人物を私は知っていますよ」好「だれそれ？」蒼疾「わかつているのにそんなことを言っているんですね。先生、涙が出そうですよ」好「はあ？」蒼疾「読者の方々もめつきり会わなくなった友人とかにたまには電話をかけてみたらどうでしょうか？」好「ちなみに作者は電話がつかうかと思っただけなら……」蒼疾「それはあまりにも酷ですから」

第十一話：「転校生がやってきました」

第十一話

「はい、では今日は転校生がやってきたという事実を皆さんに教えたいと思います。どうか、仲良しごっこはやめてください。上っ面の友情ほど醜いものはありませんから」

笑う事無くそんなことを言つてのける蒼疾にクラス一同がため息をついていたりする。

「相変わらずひねくれてますね。けど、約束守ってくれてうれしいですよ」

篠原岬が懐中時計を蒼疾へと見せびらかせながらそんなことを言う。

「いちいち他人に見せびらかさなくて結構です、それともちろん、私は約束は忘れません」

「一生大事にしますよ」

「……そうですか、その懐中時計も喜ぶことでしょう」

「先生の誕生日にも何かお返しをしておきましょうか？」

「そうですね？それなら……」

そこへ足利伊万里が手を上げて発言する。

「……先生、転校生の方が廊下で待っているんじゃないんですか？」

「ああ、そうでしたね、すみません少々話が脱線してしまつたようです」

入ってきてくださいという言葉とともに扉が開いて一人の男子生徒が着る学ランをきた生徒が入ってきた。

「お、男！？」

「……」

全員が驚いているなか、その生徒は教壇まで歩いてくると頭を下げた。

「俺の名前は香椎民。よろしくな」

にかつと笑うその白い歯がかつこいい生徒だった。クラスの数人がざわつく。

「ふむ、これはすばらしい生徒が来ましたね」

休み時間になったのだがいまだにクラスに残っていた蒼疾は女子生徒の中央にいる香椎民を見ていた。

そんな蒼疾の元に三人の生徒がやってきた。

「大丈夫ですよ、先生、わ、私は先生一筋ですから」

「先生、貰い手がいなかったら私がもらってあげようか」

「……最近さ、なんだかあたしの扱いひどくない？」

足利伊万里、篠原岬、名前を忘れかけそうな誰かの三人だった。

「先生は残念ながらそこまで落ちぶれてはいません」

「そう？」

「そうだよ、先生はそこまで落ちぶれてないよ！」

「……若干落ちぶれているって聞こえますね」

そんな蒼疾ににこつと笑って篠原岬が近づく。

「けど、内心じゃこれまで女子生徒に囲まれて生活してたけどこれからはあの男子生徒が中央になっていくから残念かもよ？」

「そういうことは本人の前では言わないように」

「はい」

「大体、篠原さんは男を見る目がなさすぎですね」

「そういつてため息をついたのでむっとする。」

「何ですか？あの男子生徒顔も性格もいいほうですよ？少なくとも先生よりは」

「私の評価を下すのはかまいませんが、あの方は男ではなく女子生徒です」

「……へ？」

仰天といった感じで間抜けな声が発せられる。

「息子を所有していないと私は断言できますよ？」

「先生、そういうことを言うとは非難されます……でも、あれって

中世的な美男子で私はいけるとおもいますけど?」

いまだに納得のいつていない様子を見て蒼疾は口を開く。

「じゃ、今から篠原さんが確かめに言ってみればいいじゃないですか……背後から息子をわしづかみ」

「……できるわけないじゃないですか!」

「そうですね、まあ、私の言ったことは事実です。ここでぬいであれって頼んで見たらどうですか?」

「でも、先生の言うことも信じられるけどなあ」

足利伊万里はそういう。

「信じる、信じないはあなた方の勝手です」

そういつた蒼疾の元へ転校生である香椎民がやってくる。

「先生、俺ってかっこいい?」

「ええ、かっこいいですよ」

「……?」

足利伊万里は首をかしげた。いきなり来てこの人は何を言っているんだと思ったのだ。

「じゃ、先生俺と付き合ってよ」

「な!?!」

クラス中の生徒がそんな声を出した。もちろん、蒼疾の近くにいた足利伊万里、篠原岬、名前を忘れかけそうな……誰だっけ?も驚いている。

香椎君ってそっち系なんだ?とかそういつた声が聞こえてくる。

「俺さ、すでに転校生ってことで女子生徒の心ほとんど掌握しちゃったんだよね」

「まあ、女子生徒しかこの学校にはいませんからね」

「あとは……」

びしつと蒼疾へ人差し指を向けた。

「何です?」

「先生の心をゲットすればコンプリート」

「まあ、あいにく私の心をゲットしたところでコンプリートではな

いでしょうが……」

「先生落とせばあとはらくだから」

「なるほど、難しいところからクリアするのがお好きなんですね？」
「なんだか火花が散っているようで白熱していた。」

「ですが、残念ながら私は女子生徒の相手をしてあげるほど暇ではありません」

「そ、そうです！蒼疾先生はそんなに暇じゃないんですよ！」

「そうよそうよ」

足利伊万里と篠原岬が前に出てくる。

「大体、私は子供っぽい女の子は好きじゃありません」

「そ、そんな……俺って子供っぽい？」

すでに心をゲットしていた女子生徒に尋ねてみるが全員が首を振った。

「ほら、子供っぽくないっていつてるぜ？」

鼻でふんと笑って蒼疾は続ける。

「それはクラスの皆さんの考えでしょう？私にとって悪ぶったりかっこいいとかたずねてくるようながきはあくまでがきです。それ以上でも以下でもあったりなかったりします」

「どっちですか？」

「なかったりするほうが可能性大ですね。87パーセントぐらいですか？」

「微妙……」

「とにかくっ！！」

教壇をばんとたたいて蒼疾は断言した。

「あなたが男子制服をきるならきるで別にかまいませんが、火遊びは適度におかないと先生みたいに命の危険にさらされますよ？」

「え？」

クラス中が一瞬固まったが香椎民はため息をついた。

「はあ、でも女子制服ってこの学校の女子を全員征服してから着ようと思ってただけだなあ」

「そんな親父ギャグはどうでもいいです。わかるかどうかわかりませんからね……はい、みなさんさつさと次の授業をしておくように。香椎さんは女の子ですからそちらが好みだという人はお付き合いを申し出てくださいね。それでは先生は失礼させていただきます」
それだけ言って蒼疾は出て行ったのだった。

第十二話：「少しだけ、過去のことをお話ししよう」（前書き）

蒼疾「作者も以前、脈絡のない文章だといわれたことがあります
……」伊万里「そうなんですか？」蒼疾「ええ、ちなみに、今だ
って脈絡のない文章のままなんですよ」伊万里「先生、脈絡の意味
わかって使ってます？」蒼疾「さあ？」伊万里「……」

第十二話：「少しだけ、過去のことをお話ししよう」

第十二話

「先生、前回言っていた先生みたいに命の危険にさらされるって先生に何があつたんですか？」

場所はいつもの教室……足利伊万里がHRが終わる手前に手を上げて発言したのである。

「あいかわらずそういったことは聞き逃さない性格なんですね？」

「まあ、わからないところがあつたら気持ち悪いですから」

ひとつため息をついて蒼疾はクラス中をじろーっと見ていた。

「……では、せっかく民主主義の国ですので多数決で決めましょう」「多数決？」

首をかしげる篠原岬に蒼疾はまたひとつため息をついた。

「……この話を採用するか、否かで決めたいと思います。ああ、もちろん私はあげる前から否のほうに票を投じておきますから……くだらない話を聞きたい人は手を挙げてください」

クラス全員が手を上げていた。

「……賛成一致ですよ？」

勝ち誇ったかのように篠原岬が手を上げて発言。

「……はあ、あなたがたはなんて暇人なんでしょうか？先生が嘆いてしまいそうです」

「後で存分に嘆いてください、私でよければ慰めてあげますよ？」

篠原岬はそういつて笑う。足利伊万里も急いで手を上げて発言をしたのだった。

「あ、先生……もちろん私も慰めてあげますから」

「慰めるぐらいなら過去をつくじってほしくはないのですが……いいでしょう、先生の身に何が起きたのかを……」

「あれはまだ先生が高校三年生の終わりを迎える一歩手前だったと

思います……そうですね、冬休みぐらいでしょうか？まだ進路は決まっていますでした」

そういつてため息をつく。

「……知っている方はいないと思いますが、先生これでも昔は女子にもてていました」

まあ、そうでしょうねという声が上がったがそれを無視するような形で蒼疾は続ける。

「日に日にエスカレートしていく女子たちの誘惑……風呂に入ってきたり、ベッドにもぐりこまれることもしばしば……実は先生、親とかあつちの都合とかで三人の女子生徒が先生の家の下宿していたんですよ」

おおっと言う声上がる。

「先生、高校でさっそく三人相手にやっていたんですか！？」

香椎民である。

「いえ、そういったことは一切なかった……それが問題でしてね、危なく理性が飛び去りそうになったことも数回あったんですけど嫉妬がすごかったんですよ」

そういつて手の傷を見せる。

「先生、それは？」

「包丁です」

「……え？」

腕まくりを戻してため息をついた。

「……約束というものは恐ろしいものでしてね、そういつた関係で一度相手が半裸になって先生と一っしょに寝ようとしたんですよ。そしたらその日は別の方と……」

「寝る約束があったとか？」

「いえ、断じてそういつた約束ではなく花火に行く約束をしていたのです」

「なるほど」

憂鬱そうにため息をついて蒼疾は続ける。

「相手からみたら約束破ってほかの女と寝てる！って見えたそう……」

「じつさいそうなんですよね？」

「ちがいますよ、まあ、それでいきなり引っ込んで殺してやる！って言われました。あのときが一番命の危険にさらされていたときじゃないんでしょうかね？」

「いやあ、まいったまいったとそういつた蒼疾に対してこの先生も苦勞してきたんだなあ」と生徒の半分が思っただけ残り半分が先生が悪いから仕方ないだろうなあと考える。

「でも、人間というのはなれると恐ろしいもので今後そういつた猟奇的なことがあってもあまり動じなくなってしまうてね、最終的にはわき腹とか太ももとかにもいろいろと刺さりました」

「……やりすぎですよね？」

「コメディーの域、超えてますよ？」

クラス中からそんな声が聞こえるのだが蒼疾はため息をついたのだった。

「そんなのわかっていますよ」

「ならなんでドロドロのラヴ劇場を終わらせなかったんですか？そんな危ない女性とは別れるべきですよ！」

足利伊万里が憤慨した調子でそういつた。

「……きつとあの三人とかその他にもう目の前に現れないでくれって言ったら先生確実にここにはいなかったでしょうね……」

ふつと笑って出席簿を閉じる。

「でも、今はその人たちとは一緒じゃないんですよ？」

「まあ、そうですね……先生、実は誘拐されているんですよ」

「へ？」

クラス中が驚いていた。そりゃそうだ。

「見知らぬ人に誘拐されて、脅迫されながらこの家を出るって文字を書いておけって言われましたね……それ書いた後もちよつとまた騒動に巻き込まれたんですよ。それで、戻ってきたら教師になれた

「とっていいでしょう」

「話が読めませんが？」

「読まなくて結構です……どうせ言ったところで誰一人として信じてくれないでしょうしあまりべらべら他人に話すことでもありませんからね」

それだけ言ってこれで話はおしまいだといわんばかりの顔をする。しかし、足利伊万里はまだ聞きたそうな顔をしていて蒼疾のほうを見ていた。

「それで、実際のところ先生は昔の方々といまだに会われていたりするんですか？」

首を振って蒼疾は否定のしぐさ。

「いいえ、そんな恐ろしいことをしませんよ？私を誘拐した人は意外といい人でしてね、私の行方をかく乱させてくれていますし……改めて思えば包丁で刺されるのはNGですね。そんな猟奇的ラブコメを誰も望んでいるとは思えません……まあ、誰かが望んでいればさっそくこの物語は破綻しかねない事態に陥りますけどね」

「そうだった怖いことを言わないでくださいよ」

「ともかく、これで話は終わりです……」

職員室、蒼疾は自分の机に座って一息ついていた。そして、家から持ってきた一枚の写真を眺める。

それを別の教師が見つけてたずねてくる。

「先生、そちらの写真の方、先生の彼女ですか？」

中年男性の教師で顔がニヤニヤしている。まあ、これぐらいのレベルなら普通だ。担任と比べるにはランクが落ちると頭で考えながら蒼疾は首を振っていた。

「いいえ、違いますよ。この人は私の恩師であり、命の恩人です」

「そうですかどのような方なんですか？」

しばしの間蒼疾は考える仕草をして答えた。

「実につかみどころのない先生でした。そうですね、腹黒くて人を

騙すのが好きな性格でしたが……他人の痛みをすぐに察知できる
そんな人でしたよ」

「変わった方なんですねえ」

そういつて中年教師が去って行き、蒼疾は窓の外を眺めながらポ
ツリと呟いた。

「……………確かに、変わってましたね……………今、生きているんですよ
うか」

十三話：「番外編をやりましょう」（前書き）

蒼疾「たまには番外編をやりましょう」岬「けど、番外編をやった
ら大体終わる予定でしたよね？」蒼疾「……………」岬「うわ、なんだ
かかなり最終回近い予感が……………」

十三話：「番外編をやきましょう」

第十三話

蒼疾

「たまには番外編をしようということで料理番組的なことをやりたいと思います」

岬

「先生、料理できるんですか？」

蒼疾

「岬さん、あなたは目玉焼きを料理といわないんですか？」

伊万里

「私はいえるところですよ」

蒼疾

「でしょう？それなら、私は料理が出来るということですね」

岬

「…………じゃあ、目玉焼き以外の料理は？」

蒼疾

「さて、今日準備してもらいたいものはヨーグルトに牛乳、何かのジャムです」

岬

「無視されたあ！？」

好

「あたしのほうがずっとここのところ無視されてるわよ！」

蒼疾

「何かのジャムは苺だったりオレンジだったりブルーベリーだったりあなたの好みでよろしいかと思われます」

好

「また無視されたあ！？」

蒼疾

「好さん、そのスプーンをとってもらえますか？」

岬

「いや、無視されてないじゃん」

蒼疾

「残念ながら先生の貴重な番外編を邪魔するような方には強制退去してもらって後はそうですねえ……………」

ぬいぐるみ

「……………」

蒼疾

「こんな感じになると思いますよ？わかったなら邪魔しないで下さい。わかりました？」

伊万里

「わかりました」

岬

「多分、わかりました」

ぬいぐるみ

「……………」

岬

「既に手遅れに!？」

蒼疾

「さて、好さんにスプーンではなくフォークを渡されてしまいました
たがこれをどうしろというんですか、好さん？」

ぬいぐるみ

「……………」

蒼疾

「そうですか、このままそれですと……………いつになく態度が大き
いようですね、好さん」

岬

「ああ、先生がぬいぐるみ語を喋り始めた……………」

伊万里

「先生、早くしないと時間が……………」

蒼疾

「そうでしたね、まずはヨーグルトを綺麗にかき混ぜて若干液状に
してください」

岬

「そのまま進めるんだ……………」

伊万里

「次はどうするんですか？」

蒼疾

「ジャムを入れてかき混ぜます」

岬

「どのぐらいの割合なんですか？」

蒼疾

「ヨーグルト7に対してジャムは2ですね」

伊万里

「では次に牛乳ですね？」

蒼疾

「ええ、牛乳は1です。あとはこれを混ぜて完成です」

伊万里

「お疲れ様でした」

蒼疾

「ここでワンポイントですが冷やしておくとき分、おいしくなります」

岬

「多分？」

蒼疾

「ええ、試したことはありませんから憶測でものをいうしかありません」

ぬいぐるみ

「……………」

岬

「あ、今のぬいぐるみ空気読んでた……………それはさておき、適当なんですね」

蒼疾

「まあ、番外編ですから」

ぬいぐるみ

「……………」

〈終〉

最終回：「ええ、終わりですよ終わり」（前書き）

蒼疾「今回で本当に終わりですよ」伊万里「なぜですか？」蒼疾「そりゃあ、まあ、色々と問題があるとかないとか」伊万里「実際のところは？」蒼疾「秘密です」

最終回：「ええ、終わりですよ終わり」

第十四話

いつもの朝のHR。

教師、天川蒼疾が教室にはいつてきていきなり教壇をたたいた。

「ど、どうしたんですか？」

「今回で最終回っ！」

「え？」

「いえ、何でもありませんから気にしないでください」

クラス中がシーンとなったが、それでもお構いなしに天川蒼疾は出席を取り始める。

「足利伊万里さん」

「はい」

「……そうですね、今日はもうちょっと踏み込んだ出席を取りたいと思います」

いきなりの発言でクラス中が再びシーンとなった。

「踏み込んだ出席って何ですか？」

篠原岬が最近めつきり姿を見なくなった舞錐好を見ながらそんなことを言う。

「えつとですね、まずは舞錐好さんを例としてやってみましょう」

「やつと出番が来た……」

こほんと、ひとつせきをしてから天川蒼疾は出席簿を開ける。

「舞錐好さん」

「はい」

「………今日は何時に起きましたか？」

「え？えつと……七時」

「朝食、着替え、洗顔、歯磨きをどういった順番でして言ったか言ってください」

「うーんと、まずは朝起きてから顔洗って朝食くってから歯磨いて

着替えて、髪の毛セットして……」

「朝食のメニューは？」

「牛乳とパンだけ」

「学校に到着したのは？」

「ええつと……」

どのくらいだったけとつぶやいてからしゃべる。

「八時四十分位？」

「……まあ、ざっとこんなところでしょうか？」

パタンと出席簿を閉じてからそんなことを言う。生徒のみんながなんだか引いていた。

「おや、どうしたんですか？」

「あの、先生それってかなりプライベートなことですよね？」

篠原岬がそういうが、蒼疾は首を振る。

「プライベートというのはそれこそ人には言えないようなことです。ああ、なんだかストーカーさんが知りたがるようなことですが安心して下さい。先生、あなたたちに愛とか恋とか胸きゅんとかそういったことは一切起こしませんから。まず、魅力を感じません」

「ひどい！」

「ひどいものですか、魅力を感じるようなことをしてみたらどうですか？」

「よ、よおし、それならわたしの本気を見せてあげますから！」

そういつて篠原岬が立ち上がった彼女が言う、魅力的なポーズを取ってみる。

「どうです？どきつとしたでしょ？」

「ひきます」

「そんなにはつきり言わなくても！」

「じゃ、じゃあ次は私が！」

そういつて手を上げたのは足利伊万里だった。人気のある彼女はクラスの中からがんばれ〜という声援がついていたりする。

「せ、先生！一緒に昼食を食べましょう！」

そういつて頭を下げるがみんながシーンとなっている。

「あれ？」

「……がんばりは認めます。なんだか痛いポーズの篠原さんより上でしょう」

「そんなあっ」

そういつて篠原岬の頭の上に手を置く。

「まあ、無謀なことをしなくていいですから、それに、最近は物騒ですからね……そのようなポーズはあまり人様に見せてはいけませんよ」

「うう、先生がやれつていったじゃないですか！」

「言つてません。やったのはそちらです」

「ひどい」

「ひどくないです」

そんな言い争いが続いていたが、天川蒼疾は適度なところで切り上げる。

「ああ、ひとつ言い忘れていたんですが、今回の話で終わりですよ」
「え？」

「だから、今回で終わりです。いやあ、思えば長い長い道のりでした。富士山を三回ぐらい登頂した気分です」

「ほ、本当ですか!？」

「ええ、本当ですよ」

「あいまいに終わらせる……これこそ真骨頂です……ところで、これって読み方しんこっちょうですよ？まこっちょうじゃないですよね？」

「どうでもいいことですよ!」

「それはよくないことですよ。最近はきちんと読み方も……」

「そ、それよりどういったオチにするんですか？」

不適に笑つて天川蒼疾は一枚の紙を取り出した。

『これで終わりです』

「……あの、先生これつてマジですか？」

「ええ、マジですよ、篠原さん」

「し、しんじられませんか」

「信じてくれなくて結構ですが、これで終わりです」

「読んでくださっている方に失礼では？」

「おや、香椎さんですか……」

香椎民の指摘に少し悩んでから天川蒼疾はこういった。

「……いいですか、この世界には読まれていない小説と読まれている小説の二種類が存在しており、4以下は切り捨ての世界、5以上は切り上げの世界なんですよ。4と5の間には絶対に越えられない壁が存在するものなのです」

「つまり、この小説は前者であると？」

「そこはあなたのご想像にお任せしますよ」

「……」

「さて、これで終わりです」

〈終〉

最終回：「ええ、終わりですよ終わり」（後書き）

さて、マジで終わりです。応援してくれている人には申し訳ない……たえそれが少なくとも！感想、評価とかお待ちしています。でよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2872g/>

フェアリーブレイヴ ～777（スリーセブン）と蒼い弓～

2010年10月8日14時35分発行